

特217

869

竹田敏彦著

牡丹崩れず續
二人の母



刊館文博



始



特 217
869

牡丹崩れずれ
人の
母 (續)
竹田 敏彦 著

小説選集



博文館

續牡丹崩れず — 目次 —

牡丹崩れず

爆彈演説……………	二
暴風雨の後……………	一四
血の秘密……………	二一
湖畔の巨人……………	五二
謎の紹介状……………	六五
新歸朝者……………	八〇
二つの旅……………	一一〇
黄邦思大人……………	一三一
亂雲……………	一四五
秋更けて……………	一五六
和平聲明の夜……………	一七四
恩讐……………	一八二

爆彈演説

英二と康子の縁談は、立野夫人の強襲的斡旋によつて、五月十日黄道吉日、豫定通り飯田橋大神宮で、目出度く華燭の典を擧げられ、越えて、翌々十二日の午後六時、丸ノ内東京會館で盛大な披露の宴が催された。

兩家とも、時節柄、成るべく質素にといふので、料理の献立も、招待客の範圍も、相當手加減は加へたのであつたが、それでも、中央財界に響く牧山炭礦王の勢力、また康子の父政之助の地位につながらる井菱財閥のバックなどが物を言つて、來會者の數も三百を越えてゐた。その顔觸れは、政界、財界、朝野の各方面に亘り、名だたる名士の颯爽たる禮装やめざむるばかりの贅を競つた夫人、令嬢達の美々しい姿が、ズラリと大食堂を埋めて豪華に輝くシャンデリヤの光りに、花園のやうな色彩を誇つてゐた。

正面中央のメインテーブルには、新調のモーニングがびつたり似合つた、新郎英二の瀟洒な花婿姿に並び、艶々しい高島田、黒縮緬の振袖に、眼も絢な唐錦の丸帯を、つましやかに胸高に締めた人形のやうな康子の花嫁姿とが、羨ましいばかり美事な對照を示してゐた。

先づ橋渡し役の立野眞平が立つて、開宴の挨拶を述べ、それから賑やかに食卓が開かれた。そして食事も終りになつて、シャンパンが一同のコップに酌がれると、花婿英二の隣りに控へた、表面上の媒妁人——財界出身の非常時商工大臣として、始終新聞紙上に寫眞の出でゐる松岡龜藏氏が、満場の拍手に迎へられて立上つた。

「皆さん、今夕は、牧山、室井兩家の結婚披露に際しまして、御多用のところを特に御出席くださいまして、有難うございます。兩家を代表いたしましたして、厚く御禮申し上げます。それと同時に、不肖媒妁人といたしまして、皆さんに新郎新婦を御紹介申上げ、併せて今後の御厚誼をお願い致したいと存じます……比處にゐられます英二君は、九州の炭礦王として知られました牧山蓮藏翁の愛甥でございます。今春、東京帝國大學經濟學部を、優秀な成績で卒業されました秀才でございます……」

と、紋切型な禮讃的紹介が、新郎新婦の上に長々と續けられた。續いて一同の乾盃があり、當夜の主賓である貴族院議員大野伯爵の祝辭を魁に、何れも時めく朝野の名士達が、次々と指名されて、テーブルスピーチの數が重なる、潮時を見て立野眞平が立上り、「いろく有益な御教訓のお言葉を頂きまして、新郎新婦に代り厚く御禮申し上げます。尙誰方でも御希望の方がございましたら、御指導の言葉を頂きたいと存じます……」

「それでは、時間も迫りましたし、お話はこれくらゐに致しまして……」

と、正にスピーチを打切らうとした瞬間、
「潜越ながら、新郎新婦に、一言申上げたいございます……」
ずつと離れた出入口に近い末席の方から、突如立上つた男がある。
「あッ……」

英二は、その男の顔を見ると、思はず表情を曇らせた。
しかし、それは英二ひとりではなかつた。

「あら……」
立野夫人も、男の顔に眉をひそめて傍に控へた康子の母室井夫人の袖を引いた。

「……………」
室井夫人も不安に蒼ざめたが、同時に、これも新婦の姻戚として目近な席に列してゐた江島家の當主直彦の眼も異様に輝いた。

その男は、何者だつたらう——それは豫てからこの縁談に反対し唾子を支持して八方に狂奔してゐた英二の親友石黒雄吉だつたからだ。

「何を言ふつもりでせう……」
不安な豫覺に蒼ざめた立野夫人は、室井夫人に眼配せすると、遽て、良人眞平の耳許に、何か低聲に囁きかけた。

しかし、もうどうする道もなかつた。たゞ一人不斷着の背廣に、精動指定の禮式マークをつけて、遅しい躰軀を卓上に突出した雄吉は、

「皆さん、私は、今夕の新郎牧山君とは、中學時代からの竹馬の友であります。しかしながら、今夕の披露宴に列するには、甚だ皮肉な立場にあるものです。その理由は、この縁談の事實上の媒人である立野眞平御夫婦並にこれも當席に列席の新婦の姻戚江島直彦氏こそ、最もよく事情を存知のことと存じます……」

石黒の頬は、たゞならぬ熱情と堅い決意の心に燃えて、きつと強く、立野夫人の方を見据ゑた。

「それは外でもありません……この朝野の名士を網羅した花々しい婚禮の蔭に、言ふも忌はしい欺瞞と、背信と、人權蹂躪の不徳がひそみ、同時に世にも氣の毒な、一人の寡婦とその愛娘が、痛ましい犠牲となつてゐる事實を、たゞ一人私だけが知つてゐまして、徹底的にこの縁談に友人として反対したのであります。しかし私は、今こゝで、折角國家の非常時も忘れて巨額の経費を擲つたこの華やかなお祭騒ぎに、水を差さうと申すではありません……」

聲を勵まし、満堂を睨んで、怯めず應せずまくし立てる石黒の容赦ない爆彈演説は、この嚴肅な儀禮の席に時ならぬ雨をよび、嵐をよんで、今まで美辭麗句に飾られてゐた一切の儀禮が、一瞬にして根こそぎ叩き潰されてしまつたのだ。囁き合ふ者、眼を瞠る者、中には明らかに憤りに燃えて、この破壊者の方を怒り睨むもの——しかし、石黒は、いかなる報復も、あの欺かれた邦子母子の、傷まし

い涙に思ひ比ぶれば、まだく不足を感じずにはなれなかつた。

「私が、場所柄も顧みず、かやうなことを申上げるのも、一つには、親友牧山君の反省を促し、この偽りの上に盛られた虚偽の結婚を一日も早く、解消せられんことを望む次第であります。牧山君！人間になれ！これが私の新郎に對する偽らざる叫びであります……」

石黒がこゝまで言つた時、突然――

「馬鹿！」

場の一方から耐へかねたやうな、罵聲が遮つた。同時に八方から、

「馬鹿」

「無禮者！」

「氣違ひ！」

「赦さんぞ……」

結婚披露宴は忽ちにして、怒號罵聲の巻と化してしまつた。しかし、石黒は自若として、

「俺を何うしようといふのだ」
見る／＼ぐるりと石黒を取圍んだ屈強さうな紳士達を睨んで、冷やかな笑ひを浴せかけた。

二

その翌日の朝だつた。

澁谷大山の江島家では、茶の間の火鉢の傍で、邦子と暁子が水入らずで、つゝましやかな朝食の膳についてゐた。

石黒の斡旋で、暁子が歸つてから、邦子もすつかり、安心したらしく、その後、病氣も著しく軽快に向ひ、もう昨日あたりから、床を拂つて、元氣に立廻つてゐた。

かうした邦子の恢復に伴つて、つい一時は、自分の過失から来る何か氣拙い引け目のために、以前のやうに母親にも打解け難かつた暁子のくすんだ氣持も次第と晴れて、今朝の食卓も寂しいながら、従前通り變りない母子の愛情で、打寛いだ氣分に和んでゐた。

「あら、これで三つですわ。そんなに召上つていゝんですの」

暁子は、母の茶碗を受け取ると笑ひながら箸めるやうに母の顔を見た。

「だつてお腹が空くんだもの」

邦子も、明るく笑つてみせた。

「まあ……でも、お母様はその道の玄人だから、安心して差上げますわ……でも軽くつけますわよ」

「ほつほ、まるで、どちらがお母さまだか、わからないわね」

「だつて、大事なお母様ですもの……」

暁子は甘えたやうに、につこり首をかしげたが、

「そのお母様を、あんなに、おいてきぼりにして御免なさい……」
 「また、そんなことを……それはもう早く忘れるの。ね。お母さんは、どんなことがあつても、あんなの心を信じてゐるから、もう何とも思つちやゐないから……」
 「済みません……お母様に心配かけて、病氣にまでさせておいて、今更にお食事の心配なんかするの、私随分お馬鹿さんですわね」

暁子は笑つたつもりだったが、却つて、ほろりと涙を落とした。
 「まあ、いつまでそんな、くだらないことを氣に病んでゐるの」
 「だつて、勿體ないんですもの……私、もう一生お嫁になんか行かないで、お母様の傍で孝行しますわ」

暁子は、かう言つて、再び箸をとり上げたが、ふと、今まで忘れてゐた英二の顔が、晝間の電燈のやうな、ぼやけた影をちらつかせた。
 「石黒さんは、あれからお見えにならないやうだが、お忙しいんだらうね」
 邦子は、娘の氣持を引立てるやうに、急に話題を替へようとしてうっかり石黒の名を出してしまつた。

「あの方にも、御心配ばかりかけて、ほんとに私、お馬鹿でしたわ」
 「それや、あんたばかりの罪ぢやないから、これから注意すればいゝのよ……それよりこの夏は、あ

んたも卒業したし、お母さんもこれで一息といふところだから、一週間ばかり、どこか靜かな海邊で二人がのんびり暮してみたらと思つてゐるの」
 「結構ですわ。さうしませうよ。そのかはり平常はいくらでも儉約しますわ」
 愛情の溢れた朝餉もすんで、二人は茶をすゝりながら、その日の新聞を、二つに別けて眺めてゐたが、

「あら……」
 今しも第八面の社會面の記事に、何氣ない視線を走らせてゐた暁子が、突然魂消たやうな聲を出した。

「まあ、何うしたの？……」
 邦子はびつくりして、暁子の方を顧みた。暁子の顔は蒼ざめて、
 「大變ですよ……石黒さんがお怪我をなすつて……」
 「まあ、何うしてなの……」

邦子も顔を寄せて、同じ紙面を覗き込んだ。ちやうど紙面の中央に、石黒雄吉の寫眞が大きく出て結婚豪華披露宴に、爆彈演説から大亂闘、牧山、井菱兩財閥のお目出度大椿事 初號四段抜の大標題が、煽情的な文字を躍らせて、讀者の興味を唆かしてゐた。
 二人は、もう言葉もなく、食るやうな眼を、紙面に走らせた。

十二日夜丸ノ内東京會館に催された九州の炭礦王牧山蓮藏氏愛甥牧山英二氏(二六)と、井菱商事の少壯幹部室井政之助令嬢康子さん(二〇)との豪華結婚披露宴席上で、招待客中の一青年が、突然爆弾的な暴露演説を試みたのが動機となり、來賓紳士が入亂れての大亂闘となつて、見る見る數名負傷者を出し、さしも華やかな宴會場が、流血叫喚の修羅場になつたといふ、稀有の椿事が起きた。新郎英二氏は、今春帝大卒業の秀才で今回立野商事社長立野眞平氏夫妻の斡旋により、新婦康子さんと婚儀整ひ、去る十日、松岡商相を媒妁として、目出度く飯田橋大神宮で結婚式を挙げ、十二日午後六時から丸ノ内東京會館で華々しく披露宴を開いた。來賓男女三百を算し、政界、財界、朝野の名士、名流婦人を網羅して、さすがに兩大財閥を繋ぐ黄金結婚の豪華振りを發揮してゐたが、テールスビーチの最後になつて、突然背廣服の一青年が發言を求め、

「自分は新郎英二氏の中學時代からの竹馬の友である」

とて一場のスピーチを始めたまではよかつたが、間もなく、

「この朝野の名士を網羅した華々しい婚禮の際に、言ふも忌はしい欺瞞と、背信と、人權蹂躪の徳がひそみ同時に世にも氣の毒な一人の寡婦とその愛娘が、痛ましい犠牲となつてゐる——」

と、思ひもかけぬ暴露演説になり、さしもの豪華會場も、忽ち蜂の巢を突いたやうな混亂の巷となり、新郎新婦は勿論、關係者一同の狼狽は譬へやうなく、そのうち湧起る罵聲と共に屈強の紳士約十名が、青年を圍んで大亂闘となり、五、六名の重傷者を出し、青年は頭部其他數ヶ所に、全

治三週間を要する重傷を負つた。青年は、花婿英二氏の親友で、牛込區神樂町一丁目日本印刷會社員石黒雄吉(二六)といひ、柔道三段の豪の者で、目下市ヶ谷山手病院に入院加療中である。一方、石黒に挑んだ負傷者中には、新婦の實兄井菱商事社員室井義雄(三九)同社員木村秀太(三〇)立野氏令嬢奈都子さんの夫君落合男爵次男正俊(二九)等、何れも重傷を負ひ、新郎新婦の新しき首途は遂に流血を以て呪はれるに至つた。事件は目下丸ノ内署で取調べ中であるが、石黒は友人間にも評判の人格者で、昨日までの親友の結婚を、これほどまでに呪つた裏面には、何か深い事情が伏在するらしいが、石黒はその筋の取調べにも絶對口を噓してゐる。

「まあどうしませう——」

暁子は蒼ざめた顔を上げたが、邦子は深い太息をつくばかりであつた。

「ねえ、私、今から山手病院へお見舞に行つちやいけません……」

暁子は、この披露宴の椿事を、痛快にも思ひ、恐ろしくも思ひ、またこよなく悲しいことにも思はれた。それにつけても一流の名士を網羅したこの大宴會場の威壓にも怯まず、關係當事者は勿論のこと三百に餘る會衆を敵に廻して、たゞ自分等母子のために、これほど大膽な報復を敢てした石黒の熱情を考へると、暁子は捨て、おけない氣がした。

「でも、もうすこし考へてみませうよ……」

邦子は容易に動かなかつた。現に新聞にも報道されてある通り、事件は既に表沙汰になつて、丸ノ

内署の取調べさへ進んでゐる様子である。もし、調べの進行につれて、自分等母娘の名まで出るやうなことがあれば、それこそ暁子の前途をどうしよう。恐らく自分の過去も洗はれて、暁子の父の秘密も曝され、ひいては江島本家の名前も出て、康子の母俊子對暁子の母自分といふ忌はしい姉妹の争ひまでが、世評の種となるのではなからうか。

「蔭の事情を御存知ないからでもあらうが、少し石黒さんも、輕卒過ぎた……」

邦子は、口にこそ出さなかつたが、餘りにも表面化した石黒の厚意が、舊い秘密に喘ぐ彼女には、却つて恨めしくも思へるのだつた。殊に邦子の立場から見れば、石黒は、現に彼女が看護婦長として恩顧をうけてゐる山手病院長山路寅三博士の甥である。もしその甥の石黒の暴行が、自分等母娘のためであることが博士の耳に入るやうなことがあれば、自分は何と詫びていゝのだらう。

「ね、暫くお見舞ひ、見合せてみたら何う？」

邦子は躊躇せずにおられた。

「だつて、それぢや、悪くありません？」

「でも、うっかり立入つて、お前の名前など出るやうなことになる、それこそ、とんだ恥ぢやないの。さうでなくても山手病院なら、皆さん私の娘として、あなたの顔は知つてゐるし、新聞でみると石黒さんは、係官の調べに對しても、詳しい事情は明かしてゐないやうだけど、それだけにこちらで注意しないと、却つて目をつけられて、折角私等の名前を秘さうとしてゐてくださる石黒さん

が困るぢやないの」

「それも、さうだけど……」

暁子も、それは氣づかないことはなかつたが、しかし傷ついてベットに寝てゐる石黒のことを考へると、黙つてゐられないのだつた。

「ねえ、暁子……」

暫くして邦子が言つた。

「それぢや、お母さんが何氣ない顔で、今日から病院へ出勤して、様子を覚えてくるわ」

「だつて、まだ〜お母さんの、今のお體軀ぢや……」

暁子も、大事な母親に、そんな無理までさせられなかつた。そして、

「ねえ、お母さん、だからかうしたら……石黒さんは院長さんの甥御さんですから、病氣中のお母様の代理で、私が見舞に出たといふ態にすれば……ねえ、それなら、誰も疑はないでせう」

しかし、そんな表面をつくるつておいて、後で萬一事情がばれた時には、いつそ邦子は院長に對して、顔向けがならないやうな氣がした。

そんなことで、その日は、一日、母娘で處置に迷つてゐた。

暴風雨の後

全く暴風雨の後だつた。――
 萬金を投じた大披露宴は、遂に流血の巷と化し、綺羅錦繡に輝いた歡談の席上は呪はしい暴露の泥靴に踏み躪られて、忽ち痛罵と怒號の混亂に陥る。こんな不名譽な結婚が何處にあり、誰がこんな棒事を想像したらう――。

花婿は蒼ざめ、花嫁は打震へ、仲介人は面目丸潰れで、おまけに親戚知人には、多數の負傷者まで出す騒ぎに、仲介者立野夫妻は勿論、わざ／＼九州から出てきた忠雄を始め、室井夫妻と共に、蒼くなり緘くなり、半狂亂の狼狽を極めて、警察へ呼ばれる、負傷者の見舞に走る。媒妁人として名を借りた松岡商相始め、主だつた來賓には、一々お詫に廻らねばならず、また一方では、縁故を辿つて新聞社へも差止め頼みに狂奔しなければならず、その間には新婚旅行も中止して打ひしがれたやうに消げ返つてゐる新郎新婦の氣持も慰めてやらねばならず――まるで關係者一同は、この目出度かるべき一夜を、落ち着く間もない心勞の中に引摺廻されたのである。
 『あなたがいけないのよ……鎌倉の驛で遇つたあの娘のことです』

『しかし、僕は何も別に……』

『私、こんな恐ろしい恥辱は、一生忘れることができないわ。どこの娘が、結婚披露の席で、あれほどひどい恥を掻いたでせう。みんなあなたの所爲よ』

康子は、身を震はせて泣いた。

二人は一應立野家の離れに引取られたが、新婚旅行もする氣にならず、さりとて、新に借入れた二人の新居へも、康子が歸らうと言はず、英二は勿論、立野夫妻も手のつけようもなく扱ひあぐんだ。そして、混亂のうちに夜が明けると、都下の新聞は何れを見ても競つて大活字を躍らして、事件は遠慮會釋なく、デカ／＼と書立てられてゐるではないか。

『何うしたものでせう……』

忠雄も、室井夫妻も、立野夫妻も、立野家の座敷に集まつて、新聞紙を展いたまま、ただ吐息をつくばかりだつた。

『とにかく、ひどいことをする男です。私、死んでも崇つてやりますから』

蒼ざめきつた立野夫人は、睨を吊り上げてブル／＼體軀を顫はせた。いくら口先で呪つてみたところで、何の役にも立つた譯ではなかつた。自分自身でもすぐに氣がついたか。

『私、私……もう一度警察へ行つて、あの男を、ウンと重い罰にしてやりますわ……』
 いくらか具體的な報復を口走つたが、

「いや、それが困るのです……」
室井政之助が冷やかに言った。

「この上警察などを煽ると、ますます世間的に事件は擴大されて、傷を受けるのはお互ひですよ……何しろ相手が悪いですよ。名譽も地位もない人間ですからね」

「ほんとうですよ。今朝も警察から歸つた使ひが言ひますのに、あの石黒といふ男も、係官に對して、それを言つてゐるさうですよ（原因はいつでも申上げるが、申上げて名譽を落すのは、先方のお歴々様ですよ。武士の情にそれだけは、秘しておきませう）さう言つてゐるさうですから」
忠雄も政之助に同意した。

「まあ、武士の情……」

立野夫人が口惜げに唇を噛んだ時、

「奥様、病院から、落合様の奥様がお電話です」

「あら、奈都子から……」

立野夫人は、あたふた座敷を出ていつた。

「落合さんのお傷痕が、いけないんぢやないですか」

忠雄が、眉をひそめて眞平に訊ねた。

「さあ、昨夜の話では卓の角へ投げつけられて、腰骨を打たれただけといふ話でしたから大したこと

はなからうと思ひますが……」

眞平は、男爵家次男の肩書を持つ、奈都子の良人正俊の容態を氣遣ひながらも、今度は室井政之助の方に向つて、

「それより、お宅様の御息は……」

「いや、あれは、手頸を挫いただけでございますから」

政之助は苦笑したが、そこへ行くと、怪我人を一人も出してゐない牧山側は甚だ工合が悪く、

「どうもとんだことで、皆さんには、何ともはや……」

面目なげに口籠るのだつた。

そこへ、電話を濟ませた立野夫人が、涙ぐんで這入つてきた。

「奈都子は何うかしたかね」

眞平が、不安に訊ねると、夫人は泣き出しさうな顔で、

「どうも、かうもありませんわ……男爵も見舞ひにいらして、お前のお母さんもすこしおでいやだから、無理な話を押し過ぎてこんなことになつたんだらう。まあ、いゝ経験だなんて、正俊の怪我をまるで私がしたことのやうにいつて、奈都子に當り散らすんださうですよ……私、皆さんの爲によかれと思へばこそ、夜の眼も眠らぬ位に心配してお世話申上げたのに、こんな事になつてしまつてはたからは、おでしやなんて言はれちや立つてもゐても堪りませんわ。ほんとに口惜しいつたら……」

びくつと、小鼻のあたりをひつつらせたと思ふと、ヒステリックに顔を歪めて、人目もなく、わーつと泣き崩れてしまった。忠雄も室井夫妻も持て餘して、

「まあ、奥さん……世間は勝手なことをいふもんですから、さう御興奮なさらないでもいゝぢやございせんか」

室井夫人がなだめると、忠雄も、

「さうですとも、これといふのも、英二の奴がつまらないことをしてゐた罰なんで、申譯ないのは私共の方でございませう……然し世間の噂も七十五日で、忘れっぽいのが世間ですから、いかがでせう室井様にも御立腹もございませうが、立野さんにしてみても、容易な御苦心ぢやありませんし、折角結んだ御縁ですから、康子様の方も、おすかしくだすつて、まあ仲好く添ひ遂げていただきませんと、それこそ、あんな演説のために打毀されたといふことになり、餘計に面目も失ふことになりますから、此際お互ひ内々の團結だけでもよく堅めて、世間の噂に、協力して當りたいと存じますか……」

「いや、御尤もでございます」

と、政之助もいつて、立野夫人の方へ、

「ねえ、奥様……お聞きの通りでございますして、我々は何處までも、あなたのお骨折に感謝して、協力一致してゐるので、どうぞその段は、御心配下さらないで……」

慰めてゐるところへ、

「あの、室井様の奥様へ、江島さんからお電話でございます」

「またも、女中が知らせてきた。」

「室井夫人俊子は、部屋を出て、電話室へ急いだが、

「もし……室井でございますが」

「俊子かね、兄さんぢやよ」

直彦の聲が答へて、

「どうも、昨夜は大變なことで」

「ほんたうにとんだことになりました、申譯もございません」

「それで、康子は、何うしてゐるかね！」

「すつかり機嫌を損つてしまひまして、花婿さんと争つてばかりゐますのよ。困つちまひましたわ」

泣き出しさうな聲で訴へた。

「いや、全く困つたことだよ……おまけに今朝も新聞を見ると、デカ／＼と書き立てゝゐるぢやないか。まあ、江島家の名前が出てゐないだけでも助かつたが、今にこの調子で警察の調べが續くと、奴も秘し切れなくなつて、何時原因を喋らないとも限らない。さうすれば、自然江島家の名前も出て、花婿と噂子のことまで曝け出され、蓋を開けたら江島家の姉妹喧嘩、従姉妹同志の結婚争ひ——」

「あら、可憐！」

「いや、きつと世上の興味は、そこへ落ちてきて、折角世間から忘れられてゐる例の支那人の邦子の一件まで論はれて、迷惑を蒙るのは、我々だよ、さうなると、関係者の間でも、一番肩身が狭くなるのは、お前、といふことになるんだから、何うだらう、一つ警察の方だけでも、何とか運動して、取調べを打ち切つてもらつたら……」

「さうねえ……」

「石黒は、お前達の側から告訴でもしてゐるのか」

「さあ、よくは存じませんが……」

「それなら、いゝ加減で、告訴など取上げて、事件を警察から引離さないと、結局藪蛇だよ。餘り香ばしい話でもなし、今更石黒を一月や二月、牢に入れてみたつて仕方がなし、また何方が先に手を出したか、これもはつきり判らないことだから、何うだ、わしが仲裁に入つて、示談取下げのやうにしようぢやないか。お互に家の名譽といふものもあるから、無意味な意地張りなどで、餘計な恥をさらしてゐるのも利口ぢやないと思ふよ」

「ほんたうですわ……」

「お前、一つ室井さんに、お話してみないか」

聞いてみると道理のある話なので、俊子は、部屋へ歸ると、直彦の注意だけを、さつと一同に傳へた。

「成程、その通りですね」

忠雄が真先に賛成して、政之助もすぐ同意した。

「いかにです、奥さん……」

俊子は最後に立野夫人に謀つたが、

「でも、私は、あの男がこのまゝぢや、口惜くて……」

石黒の處罰を諦めかねてゐた。

「それなら警察の方は示談にしても、外にいゝ方法があるんだよ」

突然立野真平がいつた。

「まあ、どういふことでせう」

「わしはこれこそ、致命的な報復だと思ふんだがね……」

真平は、にやりとして、夫人を顧みた。

血の秘密

—

康子が、八方の慰撫を容れて、英二とともに原宿の新店に入つたのは例の披露宴の騒動があつてか

ら三日目のことだつた。

しかし、自分の誇りも、歡喜も一生一度の幸福の夜をも、居並ぶ公衆の面前で芥のやうに蹂躪された、あの石黒の爆彈演説からうけた康子の心の深い創痕は、何んな英二の優しい囁きにも、甘やかな愛撫にも忘れ去ることができなかつた。

一日、二日——二人の間には、新婚らしい楽しい言葉は、一度も交されなかつた。くだらぬ女に心をうつして、一生の誇りを滅茶々々にした男——康子はあの夜の混亂と、消え入りたかつた恥かしさを思ひ出すと、英二の顔を見るのも堪らなかつた。

「いかゞ、奥様の御機嫌は直りまして！」
立野家には目と鼻の距離なので夫人も心配して、朝晩のやうに顔を出し、英二の冴えない顔を覗いた。

「どうも、はつきりしないで弱つてゐます。しかし、全ては僕の落度ですから、何とも致方がありません」

英二は襖一重を境にした康子の方へ聞えるやうに、かういつて、夫人に訴へた。

そんな事が二三度繰返されて、ある日、夫人は二人の爲に、あれきり中止になつてゐた新婚旅行を勸めて來た。

「ねえ、康子様、今日あたり、お二人で御旅行なさいませんか！ 私、今朝、熱海の聚樂へ電話をして

一と部屋靜かな室を空けさせておきましたのよ」

かういつて、しきりにすゝめたが、康子は、

「だつて、あんな新聞が出て、宿屋の女中だつて何も彼も知つてゐるのに、恥をかきに行くやうなものですわ」

不機嫌に眉をよせてみせた、夫人は笑つて、

「まだ、あんなことを……あんな氣狂ひのいつたことなんか誰が眞に受けて信ずるのですか。お二人でそんなことを、いつまでも氣にかけていらつしやると、却つて世間なんて、いゝ氣になつて騒ぐものですよ。反對にお仲のいゝところを見せびらかして、これ見よがしに當てゝやつて御覽なさい。さうすれば世間の見る眼も變つてくるし、あなたがたの氣持も變つてきますわよ。あんなことに負けちや駄目！ さうでせう。これから生涯仲よくしなければならぬ御夫婦がそんなことで、水を差されてゐちや、どうなさいませぬ。元氣を出して、仲よくいつていらつしやう」

立野夫人は、如才なく康子を促して、

「ねえ牧山さん、さうなさいませ、二人きりで旅に出れば、また氣分も變つていゝものですよ。宿も申付けてございますから、さうなさいませ」

「結構ですね。何うです、行つてみませんか——」

英二も成ることなら、旅にでも出て、氣持を直さなければ、やり切れない氣持だつた。

「それぢや、いらつしやいますね……あれッぼちのことで、新婚旅行もなならないぢや、行末、新婚の思ひ出話もなくしてそれこそさびしいことすわ。ぢや、善は急げですぐにいらつしやいませよ。お車廻しますよ」

夫人は煽り立てるやうに言つてあまり乗氣にもなつてゐない二人を旅に追ひ立てた。康子も夫人に對する義理もあつて仕方なく手廻りのものを用意し始めた。

午後三時發の準急で、二人は熱海へ出發した。

車窓から見る初夏の空は隈なく晴れて、明るい陽光が、キラ／＼と海や山に輝き、何か穴の中にでも閉ぢこめられてゐたやうな康子の氣持も、いくらかまぎれた。

「もうちき、夏になりますわね」

小田原を過ぎる頃、初めて、康子から英二に呼びかけた。

「この夏も、逗子の別荘で暮すかな」

英二は、はつとして、妻を顧みだが、すぐ、かう言つて、去年の夏の楽しい思ひ出をそゝるやうに康子の方へ笑み返した。そして、

「奈都子さんも、旦那さまを連れて、やつてくるかも知れませんよ」

「夢のやうだわ。あれから、一年……」

「また、毎日泳ぎのコーチでもして上げようか」

英二は笑つたが、

「でも、あなた、あの時と同じやうに、私を愛することができて？」

英二は、思ひがけない康子の言葉に、ちらと探るやうな眼を見上げたが、

「僕の今の愛情は、たしかに、あの時以上です。たゞ詫びる言葉もない、大きな過失に苦しんでゐるだけです」

しかし、康子は、それには答へないで、じつと窓の外の海に眼を放つた。その瞳は、妙に潤みを帯びてゐた。英二は、その潤んだ瞳の中に、康子の心を見たやうな氣がして、何かいぢらしさが込み上げてきた。

「この過失については、僕は、あなたにいくら詫びても、なほ詫び足りないのを知つてゐます。しかし、今、僕の心を占むるものが、あなた以外にないことも、同時に誓ふことができます……」

英二は心から、康子の惱みをいたはるやうに付加へたが、康子はそれきり口をつぐんで、再び何も答へなかつた。

二人は、間もなく熱海に着いて、立野夫人が申込んでおいてくれた旅館聚樂に車を命じた。

奥まつた三階にある、十疊と四疊半の、海を見晴らす座敷へ案内された。

湯へ入つて夕食を済ませ、ヴェランダの籐椅子に落着いた時にはもう湯の街もすっかり暮れて、微かにたゆたふ沖の夕明りの中に、初島の影が、おぼろに黒ずんでゐる。眼下の街にはネオンの灯が、

夜の女の腫のやうな、艶めいた色に微笑みそめてゐた。

「ねえ……」

暫らくして、また突然、康子が呼びかけた。

「……………」

英二は、康子の顔を見たが、

「あなた、今日、汽車の中で仰有つたこと、きつと間違ひありませんの？」

康子は、真剣な顔で訊ねた。

「汽車で言つたこと！」

「ほんとに、私を愛していらつしやるの？」

「愛してゐるから、過去の過失に、こんなに苦しんでゐるのです」

「それぢや、あなたは、そのことで、ほんたうに懺悔してくださいますか？」

「懺悔は、この通り十分してゐるぢやありませんか？」

「ぢや、私がお訊ねすること、秘しつこなしに、答へていただけますか？ その娘のことよ」

康子の瞳は、懸命の色に輝いてゐた。

「何でも訊ねなさい。決して隠し立てはしません」

「さう、ほんと？……ぢや、お訊ねしてよ」

康子は言つたが、

「あなたの例の人は、いつか鎌倉で會つたあの人でせう」

「さうです……」

英二が正直に答へると、康子は何と思つたか、

「あなた、あの人の身の上を知つてゐて？」

と、英二の顔を探るやうに覗いた。

「多少は知つてゐますが、しかし……」

康子と暁子の血の繋がりを知る英二は、却つて不審さうに相手を見て、

「あなたも、それを知つてゐて訊ねるのですか？」

康子に訊いた。康子にはつこりともしないで、

「さうよ。ほんとに、あの人の母と、すこし関係のある人の娘なの、それも、あなた御存知でせう」

「知つてゐます……」

「それなら、あの人のお母さんが、何うして、名譽ある實家から逐はれて、寂しく暮してゐるも御存知？」

「それは……」

「それは……」

英二は、嘗て立野夫人から聞かされた暁子の父の秘密を思ひ出したが、さすがに、それは、自分から口に出せなかつた。

「御存知ありません？」

康子は、初めてにつこりと、小意地の悪さうな微笑をたゞへ、

「ほんとは、あの人のお母さん、あの人を生んだために、實家の兄弟達からも義絶されてゐるんです……あの人のお父さんは日本人ぢやないのよ」

「……………」

英二は、とつづくに知り盡してゐる秘密ではあつたが、言はず、康子自身にとつても血をわけた叔母にあたる邦子等の恥を、かうも無難作に大膽に打明ける康子の顔を驚いたやうに見つめた。

「ほつほ、あなたも、そこまで、御存知なかつたんでせう……あの人は一時日本へ渡つてきてゐた支那人ゴロの娘なの。嘘だと思つたら、立野さんの奥さんに伺ふといゝわ」

康子は、かう言つて、今もなほ人の心に巢喰つてゐるであらう敵のとゞめを刺すやうに言つて、悪魔のやうな笑顔で覗いたが、すぐ、

「どうなすつた？ あなた、それでもびつくりなさらないの」

一向反應のない英二の表情を、不満げに見て眉を寄せた。そして、

「いや、決して……………」

「ぢや、あの人を軽蔑しないこと？」

「……………」

しかし、英二が、何うして答へられよう。そのために暁子を思切つて、康子の愛に還つた自分ではないか！ しかしできることなら、そんな秘密は、知らない顔でゐたかつた。知らないでゐて、康子と結婚した——と、さう思はせる方が、康子にとつても幸福であらう。かと言つて、今更、暁子を恥しめるやうなことも、英二は、口にする事ができなかつた。

「ね、あの人、それをあなたに打明けなかつたのね」

「知りません……………」

「ずるいわ」

「しかし、本人も知らないんぢやないですか」

「さうかしら……………」

康子は言つたが、

「ねえ……………」

何を思ひついたかにつこり英二を見上げた。

一方——。

石黒の負傷も、その後治療の経過がよく、五日もすると、飯田町の下宿へ歸つて、養生ができるやうになつた。

その時分には、邦子の體軀も、大分しつかりしてきたし、また入院中の石黒に對しても、休んでおられない義理もあるので、いつものやうに病院へ通つて、婦長としての多忙な事務の隙を縫つては、暁子に代つて、石黒の看護に努めた。

「暁子も大變心配いたしましたして、お見舞に來たがつて諾きませんのですけれど、何しろかういふ際で人目にもつきまますので、御入院中だけは、遠慮させていただきますから、どうぞ悪しからず……」

邦子は看護婦のゐない留守中など、かういつて暁子の氣遣ひを繰返し石黒に傳へた。

「いゝえ、結構ですよ……僕の方も、昂奮の餘りに、ついこんな遣り過ぎたことをしまして、却つて皆さんにお迷惑がかゝりはしないか、そればかり心配してゐます」

石黒は、その度に、申譯なさうに言つた。

いよく石黒が、自宅療養を許された晩、暁子は、その由を邦子から聞かされて、宵から、澁谷の通りへ、お見舞の買物に出た。

「病院では、附添婦さんもいらしつて、お不自由ないだらうけれど下宿へお歸りになると、それこそお一人だから、どんなにお不自由かれないわ……」

暁子は、こんな心遣ひから、食パン、罐詰、果物、バター、紅茶——山のやうに見舞品を買整へて來た。

「まあ、バターから紅茶まで、よく氣がついたわね」

邦子は、一々包を取り上げながら、娘のいちらしい心遣ひに、涙ぐましい微笑を湛へた。

その翌る朝だつた。

暁子は、母を病院へ送り出すと、すぐに、石黒の下宿を見舞ふつもりで、外出の準備にかゝつた。

「洋装にしようかしら、それともお召にしようかしら？」

暁子は、見舞品の包を作り上げると、箆笥の前に立つて、暫く迷つた。何か、優しい兄の病でも、訪ねるやうな氣持だつた。いや、もつと複雑な氣持だつた。母一人子一人——外に誰一人寄邊もない貧しい母と子との立場を守つて、千萬人を敵とする男——その男の激しい熱情は、傷つききつた心の痛手を、十分慰するに足るものがあつた。それは英二に對してすらも嘗て感じたこともない、深い信頼に根ざした感情だつた。

やつと洋装で行くことにきめて暁子は、鏡臺の前に坐つた。

「都合によつたら毎日でも、お食事を作りに通つて差上げても……」
 暁子は、まだ除れきれない繻帯に包まれた石黒の枕邊に、朝夕の食事を整へる自分のいちらしい姿を描いて、何か恥かしく鏡の中の頬を染めた。

「速達……」
 暁子が近所のタクシーを呼びに出かけようとする、その時だ。

ガラリと格子戸が開いて、郵便集配人が一通の手紙を届けて行つた。

「どなたからだらうか……」

水色にバラの模様を配して、細い銀縁をとつた華奢な封筒に、暁子の眼が怪訝に吸ひよせられた。急いで裏を返して、差出人の名を見ると、

熱海にて、牧山康子——。

「あら……」

暁子は思はず息を呑んだ。

「きつと、牧山さんの奥さんだわ……」

鋭い女の直覺は、一瞬にして、それを感じた。

「二人で、熱海へ行つてらつしやるに違ひない」

暁子の眼には、海の青い湯の街に、夢のやうな新婚の日を楽しむ英一と康子の姿が描かれた、瞬

間、身も魂も碎かれるやうな激しい嫉妬で暁子の眼前は眞暗になつた。

「でも、わざ／＼新婚の旅先から、何を私に言つてよこしたのだらう……」

不思議な疑問が、打碎かれたやうな暁子の心を、すぐ立直らせた。

暁子は恐ろしい謎を解くやうに、顫へる指先で、手紙の封を切つた。

暁子さま

いつか鎌倉でお目にかかりましたが、お手紙を差上げるのは、これが最初で恐らくまた最後でせう。憎らしいほど鮮かなペン字の跡だつた。

……私達は、いま睦しく、熱海の宿で、夢のやうに楽しい平和な新婚の幸福を満喫してゐます。あの夜あなた方が、一人の氣狂を唆のかして、私達の大事な披露宴に馬鹿げた妨害をなすつたことも私達兩人の深い愛情や、私達兩家の社会的名譽を傷つけるには全く碎片ほどの効果もなかつたことは、この私達の幸福を御覧になれば十分の御想像のつくことと思ひます。

それにしても、私達の幸福が反對に、あなたの身にとつて、どんなに口惜しく、悲しいことかは敵ながら、御同情申上げずにゐられませんわ。しかし、あなたの今の不幸は、決して私達の罪でなく、實は、あなたのお母さんの、遠い過去の過失に根ざすことを、此際十分御自覺なすつて、二度と他人の幸福を嫉んであんな馬鹿げた氣狂ひ沙汰、人騒がせをなさらないやう切にお勧めいたしますわ。その結果は、毛を吹いて疵を求める——言はず世間に秘されてゐるあなたのお母さんの恥

づべき過去やあなたの血の秘密を、世間に暴露するだけのことですわ。幸ひ、今度は私達の寛大な氣持から、そこまでは世間へ發表を憚りましたが、もしその秘密が世上にでも擴がれば、あなたは永遠に結婚の相手さへ求めることができなくなるでせう。まして、英二のやうな名門の青年を、いつまでも忘れずお慕ひになることは、餘りにも御自分のお身の上に對して、反省を忘れた潜越な望みですわ……。

暁子は、戀の勝利に誇る康子の憎らしい毒筆に、胸も裂けさうな憤りをこらへて、やつとそこま

で讀み進つてきたが、
「お母さんの、恥づべき過去とは何だらう？……もし世上に知れわたつたら、永久に結婚の相手も得られない、私の血の秘密とは何だらう……」

餘りにも恐ろしい手紙の文句に、思はず、蒼ざめて呟いた。

あの優しい母の過去に、そんな恐ろしい秘密があるだらうか——。

「嘘だわ……嘘だわ……この人達は、石黒さんからうけた傷の傷手を、こんな作り事で誤魔化さうと

してゐるのだわ……」

暁子は、心で叫んだが、更に續く康子の手紙は——。

しかし、あなたは、まだあなたの、それほど忌はしい血の秘密を、御承知ないかも知れませんが、こゝで簡單にお知らせしておきませう……。

暁子は、つい引摺られるやうに、手紙の續きに眼を奪はれずにおられなかつた。

……それは、勝利者の私として、或は残酷過ぎる行爲かも知れませんが、それを知らずに何時までも、私達をお恨みになることが、餘りにも脇目に傷々しいことなので、何れは判る秘密をお知らせして、あなたの覺悟と、諦めと、そして長い將來に處する心の用意を促して差し上げたい、一片の眞心と思つていたゞきたいの。そのつもりで冷靜にお讀みください。

先づ、あなたのお父さんは、何者でせう？——あなたはそれを、ご存知でいらしつて？

氣の毒ですが、あなたのお父さんは、私等と同じ血に恵まれた日本人ではないのです。二十年前に支那から逃げて來た革命テロ團の名もない壯士ですわよ。その壯士と、あなたのお母さんがどうした譯か愛し合つて、兩親の目を忍んで生んだ子が、即ちあなたなんですわ。そしてあなたのお母さんは、兩親兄妹にも疎まれて、遂に實家を追はれてしまつたのです……。

「まあ……」

暁子は、餘りの驚きに、息も止まりさうになつた。が、手紙は尙も残酷につゞいて、

それが嘘だと思ひなら、あなたは、一度區役所へ行つて、戸籍の謄本をご覧になるといゝわ。但し、恥を知るお母さんのお實家では、さすがにあなたを支那人の子としては、正眞に届けてありません。しかし、あなたのお母さんを母として届けてない點に、この間の消息が窺はれると思ひます……。

「嘩子は、こゝまで読んでくると、もう恐ろしくて、後が讀めなかつた。」
 「さう云へば、私は一度だつて、自分の戸籍謄本を見たことがない……」
 嘩子は、はつとして、五年前の、今も記憶に残る、不可解な事實を思ひ出した。
 それは、嘩子が小學校を出て、女學校へ入學する時だつた。入學願書には、戸籍謄本を添附して差出す規則なので、母は區役所へ行つて、謄本を取つて來た。その時謄本といふものは何んなものか、嘩子が、小娘の物珍らしさに、何氣なく謄本を展いてみようとする、母の邦子が、いつになく険しい眼で、

「あら、いけません……」

と、慌て、謄本を、嘩子の手から、奪ひ取つてしまつた。嘩子は餘りな母の狼狽に、譯もわからず、びつくりして、眼を睜つたのである。さういへば、嘩子は長い年月、これほど奇怪な母の行動を嘗て見たことがなかつた。しかし、母親を信じきつてゐる嘩子は、そのまゝ今日まで大した疑問も残さず、いつとはなく、忘れてゐたのであるが、康子のこの手紙を見ると、その時の母の激しい狼狽振りが、まさしくと眼前に甦るのだつた。

「でも、あの立派なお母さんが……」

嘩子は、恐ろしい想像を、拂ひ除けるやうに呟いたが、何時訊ねてもはつきりしない、父に關する母の返答や、餘りにも決定的な康子の手紙に溢れた脅威を、彼女は、何う否定することもできなかつ

た。

「ちや、私は、支那人の子だつたのか……」

嘩子は、足許から大地が二つに裂け眞暗な地軸へ一人で落ちてゆくやうな、恐怖と絶望に、わなわな唇を顫はせたが、その時、がらりと格子戸が開いて、

「ごめん下さい……」

誰か訪ねた小聲がした。

三

「はい、誰方……」

嘩子は、急いで臉を拭いて、玄關先へ駆け出したが、

「あら……」

「御無沙汰してゐます……」

土間に立つて、につこり笑みかけたのは、思ひもかけない石黒だつた。

「まあ……でも、お怪我は、あのお宜しいんでございますの？」

嘩子は、物々しく纏帯した石黒の顔を氣遣はしげに眺めた。

「なに、大したことはないんです。昨日退院を許されまして、家で寝ころんでゐましたが、つい退屈

になりましてね、入院中は随分小母さんのお世話様にもなりましたし、あなたもその後何うしていらつしやるだらうかと思つて、御禮かたぐちよつと御挨拶に出てきましたよ」

「済みません、私こそ、お見舞にも出ませんで……」

「いや、そのことは小母さんからも再三伺ひましたが、全くその方がいゝんですよ。それより僕の方こそ、興奮にまかせて、つい、餘計なことをしてしまつて、却つて皆さんに御心配をかけまして……」

石黒は、氣さくに笑ひながら、曄子の顔を見上げたが、ふと、臉に残つた涙の跡や、蒼ざめ果てた顔色に氣づいて、

「何處か、お加減でも悪いんですか」

「いゝえ、あの、別に……」

曄子は慌てゝ打消して、

「さあ、どうぞ……」

石黒を座敷へ招じた。しかし、石黒は、

「いや、今日は、御挨拶だけに上つただけですから、これで失禮いたしますよ」

「でも、折角いらしつて……」

「實は車も、待たせてありますし、やはりこれでも病人ですからね」

「ぢや、あまりお引止めしてもいけませんけど……」

曄子は言つたが、

「ねえ、石黒さん、それぢや、勝手ですけど、私今からお宅へお見舞に、上らうと思つておましたところですよ。一緒にお件できません？」

「結構ですよ。しかし、わざわざ遠方をいらつしやらなくても、こちらから挨拶に出向ける程度の病人ですから、御心配いりませんよ」

石黒は笑つた。

「でも、私そのつもりで、詰らないものですけど、お一人で御不自由ぢやないかと思つて、食料品などお見舞のしるしに、少しばかり、買つてきてございますのよ」

「へえ、それは済みませんね。ぢや、ついでに、それだけ、頂いて歸りませうか……」

「さうお……でも、それぢや悪いわ……私一緒にまゐりますから、ね、ちよつと上つて、待つておてくださいない。急いで二階の方の戸締りをしてきますから」

石黒を茶の間へ招じておいて、曄子は、二階へ上つて行つたが、

「あら……」

戸締りをしながらも、ふと茶の間の火鉢の傍へ置いたまゝの康子の手紙のことを思出して、はつとした。

「あの手紙が、石黒さんの眼に止まつたら……」

封筒にもをさめず、そのまま打捨て、玄關へ飛出した時のことを考へると、暁子は、もう戸締りどころでなく、慌て、階下へ降りてきた。すると、石黒は見るなり、

「暁子さん……」

と、真剣な表情で、呼びかけた。

暁子は、はつとしてその場に立ちつくしたが、ちやうど石黒の坐つた膝の前に、康子の手紙の封筒が、中味に重なつて裏向きに伏さつてゐた。

石黒は、ちらと、その上に視線を注いで、

「中味までは失禮ながら拜見しませんが、今何気なく見ますと、牧山君の夫人から、あなたにお手紙がきてゐますね」

「は……」

暁子の聲は顫へてゐた。

「しかも熱海にてと書いてあるのを見ますと、二人で旅行中でせうが、そんな處から何の必要があつて、あなたに手紙など書いて寄越したのです……」

「……………」

「あなたは、この康子夫人を、前から御存知なんですか」

「いゝえ……」

「失禮ですが、さつき入つてきた時から、僕は、あなたのお顔の色が普通ぢやないと思つたのです……僕などが立入つて伺ふことは、或は失禮かも知れませんが、牧山君とあなたの問題には、僕も最初から多少の關係もありまして、先達つても憤慨の餘り、あんな騒動迄起した人間ですから、この問題でああなたのお氣持が、なほこの上傷つけられるやうなことであれば、僕は黙つて傍觀してはゐられないのです。……殊に僕は、立野夫人を初め、彼等の周囲の人物にも出會つて、底意地の悪いブルジョア根性には、いつも憤慨してゐるのです。それに康子といふ娘だつて、相當我儘で、誇の高い、嫌味な娘であることを薄々聞いてゐるのですが、何かこの手紙なども、そんな意味で、勝ち誇つた高い地位から、なほその上にあなたを苦しめて楽しもうとするやうな残酷な悪戯から出たもんぢやないかと思ふんです。……今更用もない此の女が、何を一體言つて寄越したのですか？」

石黒の語調と、激しい視線は、手紙の中の秘密を見透かすやうに、鋭く暁子の胸を射すくめた。事實、石黒は先刻からの暁子の顔色を疑つてゐた上に、今この封筒に表記された奇怪な差出人の名を見ると、急に眞暗な不安の雲に包まれずにはゐられなかつたのである。それはいつか江島家を訪ねた時、當主直彦の口から洩らされた、邦子の過去に關する秘密の暗示——そしてその後、英二から來た手紙の中に、打ち明けられてある暁子の父の問題だつた。

きつと、披露宴の時の腹いせにそんなことでも手紙に書き立て、この敗殘の敵の心を飽まで致命的な打撃に傷つけようとするのでないか——石黒の想像は的つてゐたのである。

愛する人を奪はれた上に、この悲しい身の秘密を知つたとしたら弱い傷つた處女の心は、何うして、その苦痛に堪へ得よう？……石黒は、その恐ろしい結果を想像するに堪へなかつた。そして、

「暁子さん……たとへ、こんな奴がどんなことをいつてきても、あなたは決して負けちやいけませんよ、いゝですか。斷じて負けちやありませんよ。幸福の對照はこの世の中に牧山一人ちやありませんからね」

石黒は、語氣を勵まして、ぐつと押へつけるやうに諭した。

暁子は一語も答へないで暫く失神したやうに、じつと疊の上を見詰めてゐたが、突然、眞蒼な顔をあげると、

「石黒さん……私、これでも一生のうちに幸福を夢みる資格がありませんか……何うぞ、これを讀んでいたゞきたいわ……」

言ふなり手紙の中味を指して崩れるやうに突つ伏してしまつた。

やがて悲しげな歎歎とともに、切なく波うつ暁子の肩先を、石黒はしばらく我を忘れて、傷々しげに見まもつてゐたが、やつと――。

「讀ませていたゞいてもいゝんですか……」

念を踏んで、暁子に慥めた。

「どうぞ……どうぞ御覽下さいませ……私、こんな悲しいことを、相談する人もないんですもの……」

暁子は、大きく背いてみせると啜り上げながら訴へるやうにいつた。

「ぢや、見せていたゞきますよ……」

と石黒は、封筒の下になつた手紙の中味を取上げて展いた。

何といふ意地悪い女――石黒は最初の一枚を讀み終らないうちにもう怒りに燃えてきた。

……二度と他人の幸福を嫉んであんな馬鹿げた氣狂沙汰や、人騒がせをなさいませぬやう、切にお勧めいたします……。

あのスピーチを、暁子さんに、頼まれてでもしたやうに誤解してゐやがる……」

康子の毒筆に疵を上げてゐた石黒は、それがすべて、自分の演説に對する彼等の報復であることを知ると、尙更、暁子等母子に對して、重い責任を感じずにはゐられなかつた。が更に石黒は讀み進んで、……結局、毛を吹いて疵を求めること、却つて今日まで長らく秘されてゐたあなたの血の忌はしい汚れを、世間に暴露するだけのこと……もしそのことが世上にでも傳はれば、あなたは永遠に結婚の相手さへ求めることができなくなるでせう。まして英二のやうな名門の青年を、いつまでもお慕ひになることは、餘りにも身のほどを忘れた僭越な希望ですわ……。

何といふ、残酷な宣言だらう――石黒は、沸き立つ心を制さへながら、次に暴露さるべき暁子の身の上の秘密に對して、思はず胸をのゝかせた。果して、暫く讀みつけけるうちに、……先づあなたのお父さんが何者か、あなたはそれを御承知でいらしつて？……。

残酷な刃が、紙面に閃めいてゐた。
 「畜生、たうとう暴露しやがつた！」
 石黒は、ぐつと呼吸を呑んだが、

「……あなたのお父さんは、二十年前支那から逃げてきた、革命テロ團の名もない壯士なのよ！」

「……」
 石黒は、そこまで読み來ると、そのまゝ手紙をおいてしまった。
 「何う？……お読みになりましたか？」

いつの間にか、眼を上げて、石黒の表情を見守つてゐた暁子が、蒼ざめた顔を向けた。

しかし、これほどの苛酷に打拉がれて、生涯の誇りも幸福も蹂躪された娘に石黒も、何と言つて慰ます言葉があらう――。

「それでも、私、これから先、幸福を夢みて生きる資格がありませんか……」
 蒼ざめた暁子の頬に、また、涙が、止め度なく流れた。

「母は……母は、どうして、今日まで……私にそれを明かしてくれなかつたのでせう。だつたら、私今日まで、母を苦しめて生きてはこなかつたわ……」
 暁子は溢れる涙も拭はず、たゞわな／＼と唇を顫はせた。

四

「暁子さん……」
 その時石黒が、初めて強く叫んだ。

「あなたまで、そんなことを言つて、お母さんを恥づかしめるのですか」
 「えッ……」

「暁子さん、それであなたは、お母さんに濟みますか……たとへこれが事實であつても、僕は、斷じてあなたのお母さんの、立派な人柄を否定することはできませんよ……」

「わけて、過去二十一年間、あなたといふ愛兒を抱きしめて峻しい荊の道をかきわけながら、かよわい女の手一つで戦つてきた、あのお母さんの愛情を、今更そんな風に呪つていゝのですか……」
 「……」

「まして、この手紙が、何處まで事實か、それも、考へてみなければなりません……僕は、あれほどの美貌をもちながら、二十一年間、あなたの爲に、母性の神聖を貫き通してきた苦難の道を考へただけでも、その高い志操のほどを信ぜずにはゐられないのです。だから、たとへこれが事實にしても、そこにはきつと何か深い事情が、あつたに違ひないと思ひます……」

邦子の人格と、その清純を信じきつてゐる石黒の理解に充ちた言葉は、さしも絶望の底に沈んだ暁

子の心をも和らげずになかつた。いや、たとへ、自分の前途に對する望みの光は取戻せないまでも彼女にとつて、それ以上に辛い、母の過去に對する幻滅感が、いくらか融和されてきたのだ。石黒は聲を勵まして、

「あなたは、誰の中傷よりも、あなたのお母さんを信じなさい。あなたのお母さんほどの婦人は、さう世間に、さらにはあませんよ」

「わかりましたわ……」

暁子も、今日まで自分が見てきた母の尊い努力の姿を思ふと、石黒の言葉がそのまま身に心に沁みて、たとへ僅かの間にしろ、さうした母の愛情を呪つたことが、心から濟まなく悔いられるのだつた。しかし、一方に、名も知らぬ異那人の父を思ふと、押へ切れない悲しみが、また黒雲のやうに長い前途を塞ぐのだつた。

「私母は信じますけど……顔も知らない支那人の父を、何と思へばいゝのでせう……」

「それも、あなたの古い考へ方です」

石黒は、言下にはつきりと答へた。

「なるほど大和民族は、世界に誇るべき民族です。しかし、隣邦中國人を、何故それほど卑しめねばならないのです……民族の誇を口にしながら、昨日までの日本人は何うです。眼色毛色の變つた歐

米人をみると、理由もなく無暗に尊敬し、素直な頭の髪までちぢらせて彼等の容に眞似てゐたぢやありませんか。中國人は彼等よりも、遙かに近い同文同色の兄弟も同じ國民です。まだ泰西文化の輸入されない以前、古い日本の發展は、一體何處の文化に刺戟されてきたのです。みんな支那が先生だつたぢやありませんか……しかも滿洲事變、支那事變以來、日本の輿論も漸く目醒めて、今や、東洋の新しい理想は、日滿支一致協力團結の下に、我等の東洋から横暴極りない、白人勢力を驅逐して、眞に光輝ある新東亞の文化を建設することぢやありませんか。興亞日本、日滿支協同體——これは今日の急務として、今や全日本の津々浦々にも響き渡る聲ではありませんか」

「でも……」

暁子は、悲しげな瞳を上げた。

「それは私、存じてはゐますけど、ほんとうに皆さん、心から、それを自覺していらつしやるでせうか？……現にこのお手紙だつて、支那人の父を持つことを、こんなにも蔑んでゐるぢやありませんか？」

「それは、自分の幸福にばかり酔つて、重大な時代の方向を認識しないからです。そんな連中は、日本人であつて、日本人ぢやありません。此頃の目覺めた國民の中には、そんな奴ばかりゐませんから、その點十分御安心なさい。現に、一部の識者間には、此際日支の離婚を謳歌してゐる人さへ澤山ゐます」

「でも、理論と實際とは、必ずしも……」

「一致しないと仰有るのですか……」

「さうです……凡そ日本の國民ほど、血の問題に、潔癖な國民はありませんわ」

「決してそんなことはありません。日支の提携は理論でなく、今や實踐の時期に入つてゐる筈です」

「ぢや、さう仰有るあなただつて、ほんたうに心から、私達を蔑みませんか？」

「眸子の陰は眞剣に輝いてじつと石黒の表情に注がれた。」

「勿論です……例へこの手紙が全然事實としても、あなたのお母さんに對する私の尊敬は貧乏揃いも
しませんし、あなたに對する僕の信愛に、少しの變化も生じはしません……」

「ほんとうに？……」

「僕は、心にもないことを言つて、あなたの感情を誤魔化さうとはしません。また、そんな必要もありません」

石黒は強く言放つた。眸子の瞳は、みるみる輝いたが、その底から溢れ寄せる、譬へやうのない感動の涙に、彼女は堪へ得ぬやうに眼をしばたくと、

「有難いわ、石黒さん……私、その言葉、いつまでも、いつまでも、忘れませんわ……」

聲を弾ませてこれだけ言ふと、同時に両手で顔を掩うて、小娘のやうにしやくり上げた。

「それでは、僕、歸りますから何でしたら、これから一緒に僕の家までいらつしやいませんか」

石黒は、こんな絶望的な氣持で眸子を一人で残して置くことの、不安に堪へかねて言つた。

「そして、ゆつくり、いろ／＼と、語らうぢやありませんか」

「有難う……お伴いたしますわ。私、何だか、一人では寂しくてゐられません……」

眸子は、急いで臉を拭くと、取絶るやうな眼を見上げた。

二人はすぐ、家を出ると、露路口に待たせてあるタクシーに並んで、飯田町の下宿へ急いだ。

しかし、眸子は車の中でも、何か思ひ沈んだ様子で、一言も口を利かうとしなかつた。

「この人だつて男だもの、何處までほんたうに手頼れるものだか……」

英二の裏切りに打拉がれて、餘りにも深く傷いた眸子の心は、石黒の言葉に對しても、容易に信を置

くことができなかつた。が、やがて車が青山の通りから廣い外苑を抜けきつて、もう富士見町も近くなつた頃、

「ねえ、石黒さん……私決心しましたわ」

突然、眸子が顔を上げて、こんなことを言つた。

「……」

石黒は、びつくりしたやうに眸子を顧みだが、眸子の顔には、今までの、苦惱の影は漸く薄らいで何か思ひ詰めたやうな、覺悟の色が濃く漲つてゐた。そして初めてにつこり笑つてみせたと思ふと、

「私、決心しましたわ……もし、あの手紙のやうなことが眞個で、私の父が支那人だつたら、私

日本を去つて支那へ渡らうと思ひますの」
「支那へ？……」

「そして、さつきもあなたが仰有つた、今の時代の流れに先だつて、支那と日本と兩國民の融和に、小さな自分を捧げたいと思ひますの……支那の人を父に持ち、日本の母に生れた私こそ、今の時代に求められてゐる、この大きな使命を約束づけられてゐるやうに、思はれてならなくなりましたわ。そして、ほんたうに日本の皆様と、支那の國民とが一つの信頼に融けて、平和と信愛に充ちた亞細亞の基礎が固つた日が、私の心を包む深い憫みの晴れる日ぢやないかと思ひますの……」
涙の乾いた暁子の瞳は、幽かな希望の色に、さへうるんで、バラ色のほてつた美しい頬は、嘗て見ない崇高な、そして清純な感情に輝いてゐた。石黒は、この神々しい表情と、悲壯な言葉に、思はず眼を刮つた。そして、

「よく、そこまで考へてくれました。僕は改めて、あなたに敬服しました……」
と感動の眼をうるませた。

「賛成してくださいませ？！」

「勿論です……しかし」

石黒は、口を噤んだ。暁子の志は、壯とすべきであるが、誰にも考へられて、その實何人も、容易に行へないこの難事の前に横たはる數限りない命懸けの障害を、石黒はこのいちらしい處女の前途

に想像せずにおられなかつた。

「誠に、素晴らしい決心ですがしかし、それは容易ならぬ苦難の伴ふ命懸けの仕事ですよ」

「わかつてゐますわ……でも、どうせ、このまゝでは生きてゐて甲斐のある私ぢやありませんものいつでも死んで見せますわ」

暁子にはつこり美しく微笑んだ。何といふ寂しい……しかし何といふ麗はしい微笑だらう。石黒は黙つて暁子を見つめた。

下宿へ着くと、おかみさんが、

「さつき、こんな書留のお手紙がまゐつてゐますよ」

と、一通の封書を、石黒に手渡した。

「社からだな、見舞金かな」

冗談を言ひながら受取つて、暁子を促し、二階の自室に通した。そして、

「さあ、どうぞ……」

病床を離れて、坐布団をすゝめ自分も寢床の上へ胡坐をかいて、

「失禮しますよ」

と件の手紙を展いてみた。

前略、陳者貴殿去る十二日東京會館に舉行の牧山、室井家の結婚披露席上に於て、呆れ果てたる

湖畔の巨人

暴行を敢てし、都下各紙に喧傳されて、自分一個の體面は勿論我社の名譽まで傷け候、段不届至極の事に候、依つて本日限り斷然解雇致し候、間右承知相成度候、

しかし、石黒は驚かなかつた。社長山角圭之介が立野眞平と大學の同窓であることを、石黒は、かねてから知つてゐた。

「馬鹿にしてゐやがる。はつはは」

石黒は一人で吹き出した。

くつきり晴れた五月の大空を區切つて、綿雲を背負つた靈峰富士が、眼近く殿しい姿をそより立つて、鏡のやうな清冽な湖面に、描いたやうな影を投げてゐる。

山麓の高地の湖畔の朝で、深々と盛り上がった杉林の中から、のどかな小鳥の聲が洩れてゐた。

「今日も、上天氣だな……」

杜の蔭に建つ山莊風の、さゝやかな建物の裏手が百坪ばかりの野菜畑になつてゐて、今しも、その裏口から畑の傍の井戸端へ出てきて、眩しげに青空を仰いだのは、年の頃六十過ぎ、何處か冒し

がたい威嚴を湛へた鼻下の半白鬚を除けば、全くそこの百姓爺と何の選ぶところのない野良姿の老爺だつた。

「けふは、一つ、胡瓜やトマトに、ニコチン水でもつけてやるかな……餘り日和が続いて、蟲がつく心配があるでな……」

老人が、家の中へ聲をかける。

「トマトも、大變いゝ色になつてまゐりましたわ……」

細君らしい五十過ぎの婦人が、エプロンがけでニコチン水の壺をもつて現れた。

「靈峰富士を仰いで、自分の作つた、新鮮な野菜を食べて暮すなどは、日本人としては理想的の生活ぢや。はつはつ」

老人は、笑ひながらニコチン水を受取つたが、

「食糧の自給自足といふことは、國家にとつても何よりの強味であると同時に、個人としても、これほど愉快なことはないよ……人間の生活には何よりも重要な、土の尊さといふことを忘れた商工偏重の跋足的な富國主義では、ほんたうの強國は決して成立たない。歐洲列強なども、その點では、いざ戦争といふ時に、必ず弱體を發揮するに違ひないのだ。現に英國が、しきりとバルカンに工作して獨逸を牽制してゐるのも、一つには將來の敵國に、ルーマニヤのやうな豊富な穀物庫を渡すまいとする意圖で、日本など今度の事變でも、長期戦を覺悟すればするほど、食物の自給といふ大策を忘れて

は駄目だ……おやおや、また、百姓が飛んでもない理窟を並べて、肝腎な仕事がお留守になつてゐたわい。はつはは」

老人は、朗らかに笑つて、畑の中に身をかがめ野菜の葉蔭を覗きながら、丹念にニコチン水をつけはじめたが、この老爺、その口をつく冗談の中にも、只の百姓とは思へない高い國策的な經驗が窺はれてゐる。それも道理で、この老人こそは、ついこの春まで中支の戦線に、三軍を叱咤して歴史的大戦果を収めた凱旋將軍大木徹大將で、燦然と輝く勳功を、ボロ／＼の百姓着につましく包んで、昨日の榮譽も忘れたかのやう、この富士山麓河口湖畔の山莊に隠れて、夫人と共に晴耕雨讀の朝夕を樂しんでゐるのであつた。

「まあ、茄子もこんなに色づきましたわ」

傍の茄子畑に如露の水をやつてゐた老夫人は、これも、姐様冠りの手拭の下から、氣品に充ちた笑顔をほころばせて、につこり夫君の顔を顧みた。静かな微風が湖面を渡つて富士の映像がかすかな小波に揺れた。その時だ——。

「ごめんください……」

玄關の方で、誰か客の訪なふ聲がした。

「誰方かお見えになつたやうでございますよ……」

微風にゆらぐ茄子畑の葉の中から、夫人の顔が將軍を顧みた。

「こんな田舎へ引込んでゐても客人は絶えないな……」

將軍は大儀さうに眉を寄せた。

「お會ひになりますか……」

「わざわざ遠くいらつしたのでせう。あまり角ばつた用件でなければ、取次いでもらうか」

將軍が、遠く都塵を離れて、この富士山麓の田舎に籠つてからもやれ何々會とか、やれ何々同盟理事などの、いろ／＼な團體や個人が、將軍の武勳と名聲を擔いで、いろ／＼な目論見のもとに、ひつきりなく訪れてくるのだつた。中には表面だけ時局に當てこんで、随分内容の如何はしいものもあり一々面接することは、將軍としても、煩はしいことだつた。

暫くすると夫人が戻つてきて、

「二十七、八の、會社員風の方でございますが……」

一葉の名刺を將軍に渡した。

「石黒雄吉……知らない方ぢやが……」

將軍は、ちよつと首をかしげたが、

「江島邦子様の件につき、突然ながら、御拜顔の榮を得たく……何ういふことだらう……」
名刺の餘白にペンで走書した添書を讀んで不審げに眉をよせた。

「いかゞいたしませう？」
 「ともかく書齋の方へ、お通ししておくれ……」
 將軍は、命じておいて、井戸の水を汲み、手の土を洗ふと、やをら裏口から、屋内へ入つていつた。

家は小さな百姓家を買受けて、これに山莊風な半洋式の書齋兼應接の一室を加へた、見るから簡素な住居で、臺所と玄關の外には、田舎風の八疊の座敷と、六疊の茶の間、それに今言つた書齋が一株あるきりだ。

書齋は、疊にして八疊あまり、何の裝飾もない丸太作りに、近所の百姓の手製になつた書棚に、當座の讀料の和洋書がつまつて、窓際の古い机に、椅子が一脚と、少し離れて、ニスの剥げた圓卓と古椅子が二脚備へられてゐるだけだつた。

今しも、夫人に案内されて、その一脚の椅子に腰を下ろした石黒は、この武勳赫々たる名將の、餘りにも簡素な、慎ましやかな生活に、驚嘆と尊敬の眼を睜つて、いつか物の本でよんだ名將乃木將軍の那須野の隠棲などを思ひ泛べてゐた。

「やア……」
 軽いノックと共に、背後から底力のある聲が響いて、細かい木綿飛白の單衣に着替へた大木將軍が、こやかな温容を現はした。

石黒は、はつとして、尊いものに打たれたやうに、つと起立し、

「大木閣下でゐられますか。初めてお眼にかゝります。石黒雄吉と申します。突然お騒がせいたしました……」

慇懃に挨拶を述べた。

「遠いところを、よくいらした。さあ、どうぞ、寛いで……」

將軍は、石黒に着席をすゝめながら、自分も卓に向いた椅子を、石黒の方へ向け直して、向ひ合ふやうな位置に腰を下ろした。

そこへ、夫人が現れて、

「粗茶でございますが……」

と、出がらしの溢茶を運んできた。

二

「お名刺には、江島さんのことが書いてあるが、あの方とは、何ういふ關係かな」

夫人が出て行くと、將軍は、すぐかう言つて石黒の來意に話題を向けた。石黒は、いくらか堅くなりながらも、

「江島さんのお勤めの病院が、私の叔父の経営でございますので、古くから御懇意に願つて居りま

す」

「ほう、それはく……で、わしに御用といふのは？」

「實は……」

石黒は、ちよつと口を噤んで、

「國家の大勳功者であられる閣下に、かやうな私事を申し上げることは、甚だ恐縮に存じますが……」

「いや、なに結構……わしもかうして野鶴を友としてゐれば、同じたゞの人間ぢや、わけて、あの江島さんとは、長年親しいお知り合ひで、あのお二人に係ることなら、何なりと遠慮なく聞かせて貰つていゝのです」

「恐れ入ります」

「江島さんとは、歸還直後に、一度お目にかゝつたきりだが、その後お變りもありませんか」

將軍の方から訊ねた。石黒は、やつと寛いだ氣持で、

「はア、別にお變りもありませんが、最近少し取り込んだことがございまして暫くお休みになりました」

「御病氣ですか」

「いえ、それも、今ではすつかりお元氣になられました……」

「む、で、その取込みといふのは、何か御心配ごとでもできて……」

「お嬢様の御縁談のことからでございます……」

「なるほど……」

「それでは、お言葉に甘えまして、詳しく事情を申し上げますが……」

「あゝ、どうぞ……」

「實は、私の友人に牧山英二と申す青年がございます。本年東大の經濟學部を出ました相當な秀才でございますが、その男が今から六年前、初めて上京しました時でございます。元來眞面目な青年ですから、都會風なアパートとか、商賣下宿の混雑を嫌つて何處かしつかりした家庭の一室でも借りて勉強したい、と申して、私か相談を受けたのでございます。それで、私は、豫て御懇意な江島さんにお願ひいたしましたして、一時その二階を借りてやつたのでございます。そこで牧山は、何事もなく一年ばかりお世話になりましたして、他に移つたのでありましたが、今度大學を出ますと、何を思ひ出したか、突然、私を訪ねてきました。江島さんのお嬢さんを買つてくれないかと申しますのです……」

「うむ……」

「私も、最初は眞にうけなかつたのですが、本人は、十分の見處のある青年でありますし、眸子さん

「お娘さんでございます。——嘩子さんにもこれは御良縁かと存じまして、早速、小母さんにそれを通じたのです……」

「なるほど……」

「ところが、この牧山といふ青年は、御承知でもございませうが、北九州の炭礦王とまで言はれる牧山蓮藏翁のためには、一人しかない甥でございます……」

石黒が、こゝまで言つた時だ。

「ちよつと、お待ちなさい……」

急に將軍が、眉をひそめて、石黒の言葉を遮つた。

「牧山さんの甥御といへば、つい此間、御結婚なすつて、東京會館で披露をなすつた、その方ちやありませんか」

何うして、將軍が英二の結婚を知つてゐたのか、かう言つて急に石黒に反問した。その英二の披露の宴を、時ならぬ爆彈演説で、めちやめちやに打ち毀してしまつた石黒だけに、ちよつとどきまぎしながら、

「さうであります……」

じつと將軍の顔色を覗いた。

「やつぱりさうでしたか……」

將軍は、さうした石黒の表情を、にやりと幽かな微笑をもつて眺めたが、その柔和な笑顔の中にも何か刺すやうな兩眼の鋭さだけは、石黒の胸を貫くもののやうに見えた。石黒は、無氣味になつて、

「閣下は、どうして、牧山のことを、さう詳しく御存知でいらつしやるのでございますか？」

恐る／＼將軍に訊ねた。

「いや、別に理由といつてはないが、時の流行とでもいふか、實は何の關係もないわしに、懇意な或筋から話があつて、是非あの披露宴に出席して、席上を賑はしてもらひたいといふ、言はゞマネキン來賓としての、招待を受けてゐたのですよ。しかし、この非常時に、つまらぬ話だと思つて、斷つておいたが、翌日、何氣なく新聞を見ると、その披露宴の大亂闘が報ぜられてゐたので、思はず苦笑したまでですよ。はつはつ」

將軍は、愉快げに爆笑を響かせてゐたが、

「何でも、その牧山といふ青年の蔭に、不幸な處女の犠牲がひそんでゐるといふやうな、思ひきつた暴露演説から火がついたやうに憶えてゐるが、さういへば、その時の演説は失禮ぢやが、あんたぢやなかつたのか」

「えッ……」

石黒は、將軍の圖星に、はつとして眼を瞠つたが、將軍は無造作に笑つて、

「はつはは……間違つてゐたら失禮しますぞ」

「いや、實は、その私でありました……」
石黒は、振くなりながら、正直に告白した。

「さうですか……何だか話を聞いてゐるうちに、そんなやうに思へてきたんぢやが、では、その蔭の犠牲といふのが、江島のお嬢さんかな」

「さうであります」

「何うしてまた、その青年は、江島さんの娘御を裏切るやうになつたのです？」

將軍は急に眞剣な表情で、石黒に問ひかけた。石黒もそれを見ると、嚴肅な態度になつて、
「實は、閣下、私は今日、そのことで、閣下の御静居を騒がせたのです……」
「牧山は、その理由として、

「うむ……」

霜を交へた將軍の濃い眉が、何か暗く翳つたやうであつた。石黒は續けて、

「しかし、私は、何も知らない暉子さんには、さすがに打明けなかつたのです。ところが、牧山の新夫人が、新婚の旅先から、この祕密を手紙に書いて、身の程を知つて諦めると、暉子さんの許へ送つて寄越したのです。實に残酷極まる話なんです……」

將軍は、熱い眼で石黒を見守つた。

「しかも、その手紙には、牧山のやうな身分のある青年はおるか、恐らくあなたの一生を通じて、結婚の相手すら得られないだらうと、さうした致命的な毒筆まで振つて、暉子さんを悲觀させてしまつたのです……しかし、私は、あの方のお父さんが、たとへ異國の人でありませうと、あのお母さんの人柄だけは何處までも信じて疑ひませんから、さう簡單にあの方の前途を悲觀させたくなかつたのです……そこで、二人で、思ひ切つて、あの方のお母さんに、面と向つて、事情をお訊ねしたので

「そしたら、あの方は何と仰有つたな」

「あの方は、仰有いました。もし、私を信じられなくて世間的な地位や、名聲を信じるのなら、私のことをよく御存知の、大木將軍にお訊ねするがいゝ、——はつきり、さう仰有つたのであります……」
閣下、何うか不幸なお嬢様のために、眞實をお洩らし願ひたいのです。私は、何處までもあのお母さんの人格を信じてゐますから……」

「さうでしたか」

大木將軍は、唸るやうに呟いて暫くじつと瞑目してゐた。石黒は巨人の像を仰ぐ様に、さうした將軍の冥想を仰ぎ見てゐたが間もなく、將軍が、深い吐息とともに、靜かに瞼を開いた。それは、この武勳に輝く世紀の英雄としてあまりにも物柔かな、人の世の哀傷を湛へた眼眸だつた。そして、やを

ら石黒に語るのだつた。

『わしは、此處で一切を打明けて、そのお嬢さんにも安心させて上げたいが、事情あつて、こゝ當分の人の名だけは、明かにできないのぢや……しかし、これだけは申してよからう。江島邦子の當時の行爲は、凡庸の眼に何う映らうと、わしの眼には燦然と輝いてゐる。その相手も、中國人ではあるが、今の生温い我國の政界などでは、容易に得られる人物はでないのぢや、もし今様の言葉で申さうなら、二人の戀愛は、日支の共榮と新しい東亞の建設を目指す、當時の若い理想に咲いた花ぢやよ。……二十年前の、さうした女丈夫が、愛兒のために慎ましい母となつて、當時彼等が身をもつて運動した日支協同興亞主義が、漸く實踐に入つた今、尙且つそれほどの侮蔑をもつて、虐げられねばならないやうでは、東亞の協同も心細いことぢやよ……思へばもう二十二年前、若い中國建設の熱情は、我が東京の一隅に胎動し、當時の新支那を代表する若いエキスパート達は、心ある日本の有志と共にどんなに熱い手を取り合つて、中國の更生に盡瘁したであらう。その中には、孫文もゐた。黃興もゐた。蔣介石もゐた。汪精衛もゐれば、陳樞銘もゐる。もしあの當時の運動が、そのまゝ妨げもなく順調に育つてゐたら、或は今次の戦ひを俟つまでもなく、東亞の夜はとつくに明けてゐたらう。それがさまざまの妨害に合ひ、その間に乗ずる第三國の介入となり、我れ誤れば、彼も誤り遂に今日の状態になつたのぢやが、要するに江島邦子の良人は、さうした志士中の志士ぢやつた。これだけ申せば心ある人なら、十分理解はつくこゝと思ふ。それとも中國人なるが故に、一も二もなく侮る人があれば

それは、それは、今時、われらの齡するに足りない、全くの盲人ぢやよ』
將軍は、かう言つて、語り終ると、冷めた澁茶をぐつと飲み干した。

謎の紹介状

—

石黒が、その日、東京へ歸りついたのは、まだ日の高い四時半頃だつた。

富士山麓の清らかな湖畔に、一介の田夫となつて土と親しむ、時代の英雄大木將軍の床しい心事と
柔和な慈顔は、多感な青年石黒の胸中に、偉人の銅像のやうに刻まれて、永遠に消ゆべくもない感銘
を残したのであつた。

いや、そればかりでなく、その將軍が、飾らず、偽らず、咄々と説いた江島夫人の、高い志操と、
感激の過去は、大木將軍の巨像と並んで、これは神々しい女神の崇高さをもつて汚れなき麗花一輪の
影を石黒の腦裏に匂はせずにはおかなかつた。それはひいて、嗚子の存在までが、何か香高い夢を籠
めた、ロマンチックなものに思はれてくるのだつた。

新宿驛の構内を出た石黒は、自分の下宿へ歸るのも忘れて、何かときめく感動にそゝられながら、
澁谷大山の嗚子の家へ急いだ。

「何といふ牧山の馬鹿野郎……あの美しい暁子さんの存在こそ、素晴らしい興亜の理想を鏤めた、民族協和の象徴ではないか……これほどの麗玉を擲つて、好んで自から糞土を抱きしめる、何といふ牧山の盲目！」

石黒は英二の愚を憐れんで、こんなことまで心に叫んだ。

「あら、お歸りなさい……」

暁子は、やはり待ち兼ねたやうに迎へた。

「お母さんは？」

「病院ですわ……まだ五時前ですもの」

「ぢや、暫く、上つて、待たせて貰ひませう」

「どうぞ……」

暁子は、石黒を座敷へ迎へたが、何か不安なものを覺えて、すぐには石黒の報告を、進んで訊ねる氣にはなれなかつた。

「しかし、昨夜は、あんな思ひ切つた質問をして、お母さんは、お氣を悪くしていらつしやらなかつたですか？」

石黒は、何よりもそれを恐れてゐた。いくら暁子のためとは言へ、また、どれほど相手を信じてゐるとは言へ、娘を誘つて、その母に、過去の秘密の告白まで強いた自分達の無様な行爲を顧みると、

石黒は何か聖女の清純を冒瀆したやうな、言ひやうない苛責に堪へないのだつた。

それは、暁子も同じ思ひだつた。今朝も母は、いつに變らない平靜な微笑に愛情を罩めて、一緒に食事をし、共に後かたづけもして、いつもどほり、

「ぢや、行つてきますからね……」

やさしく言ひ残して家を出ていつたのであるが、いかに我身の重大事にせよ、とりわけ大恩ある母に、親子の禮も辨へないで、あれほど無様な質問を重ね、母の悲しい秘事を暴かうとした自分の無情を母は恨んでゐないだらうか。無禮な、恩知らずな、娘の我儘に、母は愛想をつかしてはゐないだらうか——暁子は、朝からそればかりを、一人で悔い且つ詫びてゐた。

「いつもとすこしも變つた様子もなく、機嫌よく病院へは出て行きましたけど……」

暁子は、石黒の懸念に答へたが、昨夜康子の手紙を見せて、泣いて母に訴へた時の、邦子の苦しい顔を思ひ出すと、暁子は、母の心の切なさか思はれて、胸も裂けさうな傷はしさに責められるのだつた。

「それぢや、いつもの時間には、歸つていらつしやるでせうね」

石黒も、つい不安げに訊ねた。さうなると、暁子も、ます／＼氣がかりになつて、

「まさか、怒つて歸らないやうな、そんな母ぢやないと思ひますけど……」

「さうですとも、小母さんには、これつぼちも、疚ましい過去はないんですから……」

「將軍は、やはり、さう仰有いましたか？」
 曄子は、石黒のその一言に、取纏るやうに眼を睜つた。
 「勿論です……いや、むしろ、僕は今日まで抱いてゐた、小母さんに對する尊敬に、更に一段の拍車を加へましたよ」

「まあ……大木將軍は、それほどまで母の過去を辯護してくだすつたのですか？」
 「辯護どころぢやありませんよ……將軍は、百萬の大敵を睥睨した、あの、鋭い瞳をうるまして仰有いましたよ。江島邦子さんの當時の行爲は凡庸の眼には何う映らうと、わしの眼には燦然と輝いてゐる。その相手は、中國人ではあるが、今の生温かい我國の政界などでは容易に得られる人物ではないのぢや。もし、今様な言葉で言はうなら、小母さんの戀愛は、日支共榮と、新東亞の建設を目指す、當時の若い理想に咲いた花ぢやよ……」

「將軍は、そんなにまで……」
 曄子の聲は思はず顫へた。石黒も新たな感動に胸を弾ませて、
 「言ひましたとも。尙、その上に、將軍はしみく、當時を回顧される風で、聲まで濕らせて仰有いました……二十年前のさうした女丈夫が、愛兒のために慎ましい母となつて、當時彼等が身を以て叫んだ日支協同、東亞の再建が、今や實踐に入らうとする今日、尙且つそれほど蔑まれ辱げられてゐるやうでは日本の輿論も心細いものぢや、と……」

「まあ將軍は、それまでに……そして母は、それほどまで、高い理想と、熱情で私の父を……」
 「さうです。その頃、當時の新支那を代表する中華の志士はみな東京へ来て、祖國の更生に暗躍してゐたのです。孫文、黃興、汪兆銘、みんな當時の亡命の志士だつたのです」

「ぢや、私のお父さんも、やはりさうした熱誠に溢れた愛國の志士だつたでせうね」
 「勿論です。今も將軍のお言葉で申し上げたやうに、得難い人物だつたといふのです」
 「名は何といふのでせう？　そして、今も生きてゐるのでせうか？」

曄子の頬は歡喜に輝いて、その瞳は熱い涙に濡れてきた。しかし、石黒は、
 「その點だけは、將軍も、こゝ當分聞かないでくれ。はつきり打明けてお嬢さんに安心させたいのは山々だが、今日は事情あつて、その時期でないと仰有るのです」
 曄子は瞬間、がっかりした風だつたが、

「ぢや、生きてはいらつしやるのですか？」
 「僕は將軍が名を明かさないとところを見ると、或は、何か我が國策のために、當分秘密を要するやうな重大な仕事をしていらつしやるのぢやないか、そんな想像さへされるのですよ……だからあなたのお母さんも、全て將軍に訊けと、仰有つたのぢやないでせうか……しかし、僕はそれについて少し思ひ當る筋があるんですよ」
 「まあ、何ういふことを……」

暁子が膝を乗り出した時、ガラリと表の格子戸が開いた。邦子が歸つたのである。

「あら、お歸りなさいませ」

待ち兼ねたやうに玄關へ驅出した暁子の、ほつとした挨拶とともに。

「只今歸りましたよ」

物靜かな愛情をたゞへた邦子の優しい聲を聞くと、石黒も安心してすぐ、玄關へ出迎へた。そして、

「お歸りなさい。お留守中にお邪魔してをります」

そつと邦子の顔色を覗いた。

「あら、いらつしやいませ」

いつもと、少しも變りない、和やかな微笑をこぼした。

昨夜のことなどはまるで忘れてしまつたやうな邦子のおだやかな會釋だつた。石黒は、まだ耳朶に残る大木將軍の讃辭を思出し、いかなる嵐にも傷つけられない、何か氣高い名花を仰ぐやうに、邦子の顔を見守つた。

「ちよつと御免あそばせ」

邦子は、石黒にこたへておいて、洗面所へ行き、口をすすぎ、手を洗つて、座敷へ歸ると、

「いらつしやいませ」

改めて、しとやかに手をついた。

「昨晚は、とんだ失禮なことを申し上げまして……」

石黒は、何よりも、それが氣がかりで、先づ詫び入るやうに頭を搔いた。

「ほつほほ。まだそんなことをお氣にかけていらつしやいますの」

邦子は打消すやうに笑つて、

「石黒さんも見えていらつしやるのに、何か御馳走でもできてゐるの？」

臺所へ入つて、食卓の支度をしてゐる暁子の方へ呼びかけて、につこり石黒の方を見た。石黒は恐縮して、

「いや、私は、もうすぐ歸りますから、御心配くたさいませんように」

「だつて、どのみち歸つて召上るんでせう……ちや、ついでに何もございませんけど……」

「しかし、恐縮ですわね……」

石黒は、へどもどしながら、先づ何よりも、何ういふ風に、大木將軍訪問の事を傳へて、この稀なる烈女に對し、今までの無禮と、認識の不足を、詫び入るべきかに迷つてゐた。そして、間もなく、

「實は、小母さん……僕は今日、改めて、小母さんに、謝罪に上つたんですよ」

「あら、私に、何を謝罪してくださいますの……」

邦子は、冗談に受流して、取合はなかつた。しかし、石黒は、眞剣に、

「いや、實は僕早速今日河口湖畔まで出かけてまして、大木將軍にお目にかゝつてきたのです」
 「まあ、さうでございましたか、閣下は、お變りなく、御機嫌よくいらつしやいまして？」
 「はア、小母さんにも、宜しくと申されてゐました」
 石黒は、そこで、ちよつと口を噤んだが、
 「そして、昨日の問題について將軍から詳しく伺つてまいりました。全く想像もしなかつた小母さんの偉大な過去の物語りに、今も僕の胸中は感動の高鳴りが止まないくらゐです。僕は始めて、生ける聖女の姿を、大木將軍のお言葉を通じて眺めることができました。實は、それを語られる將軍のお眼にも熱い涙がうるんでゐました」
 石黒の聲は、われ知らず顫へた。

二

しかし、邦子は何とも答へなかつた。
 石黒は、更に續けて何か言はうとしたが、餘りにも靜かな邦子の様子に、ふと怪訝の眼を注いだ。そこには、黙々と端坐したまふ、何か深い思ひの影を凝視するやうに、じつと疊の一點に、かすかに潤んだ瞳を落して、塑像の如く動かない、邦子の澄み渡つた相貌を見たのである。それは、あらゆる忍苦の底に涅槃の寂光を見つめる菩薩のやうに、また名ある名畫の聖母のやうに、この世のものと思

へない、美しくも氣高いものだつた。
 「……………」
 一瞬、石黒の眼は、我を忘れて、打たれたやうに、邦子に見惚れてゐた。その時、これも茶の間の六疊で、食事の用意に餘念のなかつた暁子が、ふと手を止めて、さうした母の、靜かな横顔を凝視めてゐたが、突然、その前へ驅寄るなり、
 「お母さん、赦して頂戴……………」
 と、手を突いた。
 「私の恩知らずを赦して頂戴……………こんな立派なお母さんをもちながら……………自分の氣儘や他人の言葉に動かされて、たとへ一時でも、お母さんを疑つて……………ほんとに私、濟、濟みませんわ……………」
 はら／＼と涙をこぼした。石黒も、居堪らないやうに、
 「いゝえ、僕がいけなかつたのです。暁子さんをそゝのかして、あんな失禮なことまでお訊ねしたのは僕の……………僕の發案です……………僕の失禮を赦してください」
 感動の聲を濡らせた。しかし邦子は、答へないで、靜かに、
 「それから閣下は、何と仰有られましたか」
 石黒に訊ねた。石黒は促されて、
 「それでも、なほ、私は進んで暁子さんのお父さんのお名前から現在のご様子まで、悉く伺はうと

しました。しかし、閣下は、ある事情のもとに、それは當分聞いてくれるかと仰有りましたが、とにかく今の日本の世界などでは、容易に得られる方ではない、それだけ知つておればいゝぢやらうと、はつきり、仰有りました……」

「さうですか……」

依然として、磨いた大理石のやうな、冴え返つた冷たい感情だつた。が、暫くして、

「暁子さん……」

邦子は、おもむろに娘の名を呼んだ。

「はい……」

「それぢや、こんなに不幸なあんたを生んだ、あんたのお父さんや、お母さんを信じて、赦してくれませぬ」

澄み切つた瞳が、かすかな潤みに曇つた。

「お母さん……そんなこと、もう仰有らないで……赦すも赦さないも、こんな立派なお父さんや、お母さんを持つてゐることを、私、今は、どんなに喜んでゐますか……」

「いゝえ、それは、石黒さんや、あんた達だけの、最負目の感情に過ぎません。だからと言つて世間は決して、あなたの生來を蔑んだり、お母さんの行爲を罵つたりする長い習慣は捨てませんよ。それに負けたり、僻んだりしないで、どこまでも強く闘つて行く、その強い意志がなかつたら、いつまた

再び昨日のやうに、お母さんの過去を悲しむ日が、ないとも決して限らないと思ふのです」

「お母さん、もう私、決して、そ、そんな……」

暁子は感動に噁り上げながら、大きく首を振りつゞけた。

すると、石黒も、その傍から、

「さうです。世間の馬鹿が何と言はうと、もうそんな古い因習は過去の時代の夢となりました。現に閣下も仰有いました。日支の提携、東亞の協同は現代日本の新しい目標だ。そんなつまらぬ差別觀念に捕はれてゐる輩は、共に齡するに足りない奴だと……」

「勿論、私も、さう信じてゐます」

邦子は、はじめて、はつきり言放つた。

「しかし、それは理想でありまして、それを知識の上に信じながらも、感情の上に行へないところに日支の親善はいつも破れるのです。最早既に何十年、たゞそのために東亞の建設は、失敗の歴史を繰返してきたのです……」

「さうです……大木閣下も、それは仰有いました。子供にキヤラメルを興へて頭を撫でるぐらゐで、支那の宣撫ができると思へば、大間違ひだ。今度の事變處理についても、一番面倒なのは、その一點——真に中國民を理解し同情してその真心を實踐に移すことだ。それが立派に行はれないでは、興亞聖戰の意味が何處にあるのかと……」

「全くでございます。けれどもまた、これほど實行の難かしいことはありません。しかし、もう、本氣にそれが行はれなければならない時期が來てゐるのです」

邦子は、しみく洩らした。
と、石黒が、

「小母さん……」

何か突然意氣込んで、邦子に呼びかけた。

「僕、そのことについて、御相談があるのです」

「何ういふことでございますか」

「實は、僕、四、五日前に、突然今の會社を誠になつたのです」

「まあ……」

「しかし、別に惜しいほどの處でもないのです。一向痛痒を感じませんが、それで、この際思ひ切つて、支那へ飛び出して行かうと思つてゐるのです……御承知の通り、僕には両親も兄弟もありません。たゞ一人病院の叔父があるきりで、この上ない身輕な人間で何處で骨を埋めようと、敢て心にかかるものではないのです。今日も大木閣下のお話を承り小母さんの當時の熱情や、そしてあの麗はしい物語、それにも拘らず日本の國民に、今なほ牧山一門のやうな古い迷妄の夢から醒めない人間の多々あることを考へますと、新しい東亞の建設も、容易な業ぢやないと思ふのです。そこで、僕、この機

に支那へ渡つて、日支民族の提携に、一身を擲つて働いてみたいと思ふのです……その點、外人は豪いさうですね、どんな奥地の田舎へ行つても、教會と病院があつて、二十年、三十年支那人の宣撫につとめてゐる牧師や醫者が數へきれないほどあるといふことです。さういふ意味で、能もない僕ですが、たゞ命を的にして働いてみたいと思ふのです。いかゞでせうか」

石黒は、腫を輝かして、邦子の方を見つめた。邦子は、につこりして、

「それは、大變結構なことではございますが、容易な仕事ではございませんよ」

「それは勿論覺悟の前で、閣下も繰返し仰有いました」

「ぢや、もう、閣下には、そのご相談をなすつたのですか」

「申上げました。幸ひ繰返してお願ひするうちに、閣下も僕の氣持をお認めくださいましたか、紹介狀を一通お書きくださいました。それも、日本人宛でなく或る隠れた勢力を有する支那人ださうですよ」

邦子は、何かはつとした風で石黒の顔を見返した。

石黒は續けて、

「その人は大變日本にも理解のある立派な政治家ださうですが、俺は華やかな名利に啖くよりも、祖國の礎石となつて、地下の力となるんだ——いつもさういふ信念のもとに、表面だつた仕事はしないものですから、日本でも名前を知つてゐる人は少いが、眞實、本氣で日支の運動に、深く入つてゐる

人なら、必ず、その人の隠れた勢力を知つて、それを利用しない人はないといふほど、變つた意味の有力者ださうですよ……」

石黒は得意で、これだけ説明すると、

「それから閣下が、その添書を下さる時に、付け加へて仰有つたことは、一度それは江島さんにも御相談して、よく腰を決めてからかゝるがよからう。今から既に二十年前、日支親善の理想の前には、世を捨て、身を以つて熱情を捧げた江島さんこそ、本當の意味で我等の先輩だから、よく本氣で相談をし、十分覺悟をきめた上で、實行してもらひたいと、くれぐれも仰有いましたよ」

石黒は、ポケットの中から、一通の手紙を、大事さうに取出し、封書の表書を見ながら、

「さうです。その有力な無名の支那政客といふのは、黄邦思といふ人ですよ」

「黄邦思！」

邦子は、石黒の説明で、もしやと、氣になつてゐたが、やはりはつきりその人と聞くと、覺えず息を弾ませずにゐられなかつた。

「御覽下さい……」

石黒が示した將軍の紹介狀に、風格のある達筆で認められたその宛名こそ、
「黄邦思大人」

大木將軍が凱旋後間もなく、邦子が訪ねて行つた時、懐しき良人楊大偉が、國事のために世を忍ぶ

假の名として、將軍から示された、その名刺の名は、たしか「黄邦思」のそれだつた。

「これは彼の匿名らしいが、邦子さん、わしはこの匿名に、邦を思ふとすぐ讀んで、あなたを忘れぬ記念ぢやなと、木念仁のわしにもピンと來ましたぞ……」

その時、かう言つて笑ひながら語つた將軍の聲は、今もなほ、邦子の耳にはつきり残つてゐた。すると、嘩子が、

「まあ、石黒さんも、氣がお早いね、支那へいらつしやるなんて、初めて伺ふわ」

びつくりしながら、母の見つめる紹介狀を覗き見た。そして、

「黄邦思——あんまり新聞なんか、出ない人ね、でも、偉い人なのね」

父とも知らず嘩子は言つた。

「今も言ふ通り、表面に出るのが嫌ひなんださうですから……しかし大木將軍が、特に信頼して、紹介狀を書いてくださる人物だから、相當勢力のある大物に違ひないですよ」

邦子は、さうした嘩子と石黒の會話を、嬉しくまた忙しく、聞かずにゐられなかつた。

「それにしても、將軍は、何といふおつもりで、あの人を殊更この人に紹介なすつたのであらう」

手紙は嚴封して、内容は知る術もなかつたが、その時だ。嘩子が、

「お母さん……それぢや私達も支那へ行きませんか？ 私も何だか支那へ行つて、日支の親善に一身を

さゝげたくなりました。それが私達に課せられた、偉大な宿命的な、使命かも知れませんわ」

突然、熱い瞳を上て、邦子の方を顧みた。
「ねえ、石黒さんが、いらした都合で、私達も將軍にお願ひして、この黄邦思といふお方に紹介していただいて、いつそ支那へまわりませうよ。そして、日本と支那との間に、これまで幾度か繰返された悲劇の根を一生懸命、刈り取ることにつとめませうよ」

新歸朝者

一

牧山英二と康子の新居は、室井家に近い代々木山谷にあつた。
瀟洒な生垣に圍まれた二階建て階下が八疊の座敷と六疊の茶の間玄關が四疊半で、その脇に洋風の瀟洒な應接室、別に座敷から鍵型の縁傳ひに、京風の六疊の離れがぐつと突き出て、築山を背景に、可なり贅澤に擬つた廣い庭の風致に、描いたやうな雅趣を添へてゐる。これは康子の居間に宛られてゐた。
その他にも、臺所に續いた三疊の女中部屋と、茶の間の側に、お納戸までついてゐる。八疊と六疊の二階は、英一の書齋になつて、そのバルコンからは、神宮一帯の杜が、萌えるやうな新緑の影を盛上げ、日が暮れると、新宿邊のネオンが窓近く、都會の夜空を彩つてゐる。

新婚の英二夫婦——それと、もう十年も室井家にゐて、長らく康子の面倒を見てきたお仲といふ小
中年の女中を交へて、靜かな三人暮らしには、贅澤すぎるほど整つた住宅だつた。

一時は、石黒の爆弾演説でちよつと水をさされた英二夫妻だつたが、その後、新婚旅行の途次、熱海の宿で仲直りの條件として、あの残酷な身分暴露の手紙を、暁子の許へ送ることを、英二に黙認させたことによつて、やつと機嫌を取戻した康子は、すつかり氣を好くして、

「これで、あなたも、二度とあの女と、交渉の撚りを戻すことが出来なくなつたわよ」

相手の息の根まで止め得たやうな、嬉しさと勝利感に、初めて英二の兩手を握つて、毒々しい微笑をこぼした。英二もそこまで苛酷の手段を弄しても、暁子を苦しめねば已まない康子の行爲には、軽い反感を覚え、それが暁子の心に及ぼす容易ならぬ打撃などを思ふと、何か濟まない氣持に責められるのだつたが、

「當然ですよ。……石黒の演説だつて、奴一人の意志ぢやありませんからね」

あの石黒の演説の蔭に、強ても暁子母子の意思を結びつけることに依つて、幾らかでも良心の呵責を紛らせた。

「二度と、あんなことをなすつたら、承知しないから、いゝこと」

「勿論、しろといはれても、御免ですよ」

「ほんと、誓つて?……」

康子は、豊かな身体をくねらせて、色つぼく英二の顔を睨んだ。今まで尖り切つた不満の中に押しつ
つんでゐた、さうした康子の蒸れるやうな媚態は、何か得難い幸福でも掴み得たやうな、不思議な錯
覚に英二の心を蕩けさせて、彼は、思はず、迸る熱情のまゝに、夢中で康子の肩を抱きしめた。

「そんなに、私が可愛ゆくて……」
康子は、夫の腕に身を任せて、満足さうに眼を細め、につこり英二を見上げた。
そして、二人の間は、初めて新婚の夫婦らしい、甘やかな感情に溶け合つた。
それから二月餘り——梅雨も霽れて、二人の新居にも、爽やかな初夏を迎へたのである。

その日は、土曜日だつた。
康子は、居間の縁側で流行雑誌などを展いてゐたが、
「もうお歸りになる時間だわ」

何か愉しさに、そゝられるやうに、飾棚の置時計を見た。その時——
「お電話でございます……」

女中のお仲が知らせてきた。
「旦那様？……」

康子は、もし英二が土曜日を利用して、会社からすぐに、銀座へでも出て、そこから誘ひ出しの電
話でもかひてきたのかと思つたが、

「いえ、あの、お實家の奥様からでございますよ」

「あら、お母さんから……」

康子は、拍子抜けのしたやうな苦笑を洩らしながら、茶の間の廊下にある電話口へ出た。

「お母さま？」

「康子かね……英二さんは、まだ？」

「え、もうすぐ歸つて見えると思ひますのよ」

「お歸りになつたら、二人で来てもらひたいんだけど……」

「何か御馳走でもございます？」

「まあ、奥様になつてまで、まだあなたは食ひしん坊ね」

「あら、ひどいわ……だつて、お母さまの御用つて、そんなことでせう」

「今日はね、珍らしいお客様なのよ」

「誰方？……」

康子は、怪訝に眉を寄せた。

「ほつほ、當てごらんなさーい」

母の懐しい含み笑ひの聲だつた。
「まあ、氣を持たせて、誰方ですよ」

『ほつほほ、平瀬の晴彦さんが歸つていらしたのよ』

『あら、フランスから？』

康子は思はず聲を弾ませた。

『急に、歸りたくなつたので、思立つて歸つていらしたんですつて。あの人らしいぢやないの』

『やつぱり藝術家ね。ほつほほ』

『それで、是非あなたにも會ひたいし、あなたの旦那様にも紹介してもらひたいと言つていらつしやるのよ』

『然う、ぢや、英二が歸りましたらすぐにお伺ひしますわ』

電話を切つて、居間へ歸つたが、康子の顔は若々しく輝いてゐた。

『あれから六年……晴彦兄さんも、どんなに變つていらつしやるだらう……』

康子は、懐しさうに私語したが、すぐ、ひとりで顔を赧らめて、

『でも、私の旦那様にも紹介して欲しいなんて、晴彦兄さんは、私を調戲つてゐるんだわ……自分も黙つて、あちらの娘なんかを奥さんに貰つてゐる癖に……』

康子は、長らく感情の外に押し除けてゐた秀麗な青年の面影を浮かべた。そして、

『その奥さんも御一緒かしら？ それを訊くのをお忘れなわ……、でも、フランス人のお嫁さんつてどんな方せう。やつぱり金髪の眼に碧みを帯びた、西洋物の映畫に出てくるやうな、濃艶な表情の持

主に違ひないわ……さうだわ、両親や親戚にも相談しないで置いてそんな外国人のお嫁さんなんか件れて歸つた晴彦兄さんこそ、うんと冷かして上げるわ』

康子はそんなことを考へてゐると、不思議と一刻も早く晴彦に會ひ、またその妻であるフランス婦人の顔が見てみたくてたまらなくなつた。そして、

『まあ、どうしたんでせう。もういつもなら、とつと歸つてきてゐる時刻なのに……』

漸く、十二時半を廻つた置時計を見上げて、待遠しげに呟いたが、

『さうだわ……英二が歸つたらすぐに實家へ来るやうに、お仲に言つておいて行けばいゝわ』

さう思ふと晴彦の前へ、女房らしく良人を同行することまでが何か氣に咎められてくるのだつた。

それは、しかし、久し振りで會ふ若い男性の前へ、良人を同伴するといふやうな、一種の世帯じみた趣味が、彼女の華やかな性格に合はないといふ單純な理由からばかりでなかつた。

その一つの大きな理由は、今も康子の記憶の底に、憎いほど美しく描かれてゐる晴彦の稀な美貌だつた。

勿論、英二も康子に取つて、自ら愛して無理にも嫁いだ大切な良人には違ひなかつたが、それ

ほどの英二の容貌も、康子の批判眼を以てすれば、晴彦の美貌の前には、物の數でもなかつた。

女にもしまほしい白晝の刻んだやうな端正な顔に、房々とした漆黒の長髪が、廣い額の上に波うち熱情を包んだ澄み切つた瞳が濃い眉の下に微笑して、いかにも藝術家らしい氣品と優美を具備した、

美術學生時代の晴彦の容姿は、少女時代の康子の眼にも、うつとりと眺められたものであつた。

父室井誠之助の實妹の子で、始終室井家へも出入し、まだその頃は、女學校も下級生であつた康子を、妹のやうに可愛がつてくれたが、平瀬家は室井家以上の資産家であり、晴彦はその次男といふ、金銭にも自由にも恵まれた境遇だつたから、中學を出ると好きな美術に志し、上野の美術學校を卒業すると、すぐにフランスへ留學した。それは、康子が女學校の二年の春で、それから六年、晴彦は一度も内地へは歸らず裕かな學資に恵まれながら、パリ其他で勝手な生活を續けてゐたが、今から三年前、向ふの下宿の娘と結婚して、一時實家や親戚間で物議を醸したことはあつたが、何しろパリと言へば、親の意見もとどかぬ遠隔の地であり、何時とはなく黙認の形で、過ぎてゐたのであつた。

その晴彦の結婚が、内地へ傳はつたのは康子が女學校も四年の頃で、漸く此世の夢心を知りそめた彼女は、何か恨めしく、嫉ましさを感じて、しばらく人知れぬ失望に鬱ぎ込んでゐたのであるが、彼女の持前の、負け嫌ひな性格が、無理にも、さうした晴彦を蔑むやうになり、

「ふん、下宿の娘と一緒にゐるやうな下等な人なんか、歸つてきても知らないわ」と、淡いながらも心に残る傷みを自ら反抗心で壓さへつけ、いつともなく遠い世界の縁なき人として、晴彦のことを忘れ去つてゐたのである。

しかし、今その晴彦が、突然歸朝して實家を訪れ、是非自分に會ひたがつてゐると聞くと、若い有閑夫人の氣紛れな心は、つい古い玩具を出して懐しんでみるやうな淡い興味から、長らく忘れてゐた

少女時代の見殘した夢を、ちよつと弄んでみたい氣持になるのだつた。

「何より、その金髪の奥さんが見たいわ」

康子は、そんな風に、自分の氣持を紛らせてゐたが、しかし、やはり晴彦と比べては、多少なりとも容貌に負け目のある英二を伴れて、その妻として、晴彦の前へ出ることは、何となく恥しく思はれるのであつた。

彼女は、英二の歸りの遅いのを幸ひに、ちよつとお仲に言傳を残したきり、すぐ急いで化粧を直して着てゆく着物にも暫らくは、簞笥の前に迷つた揚句、外人の妻を持つ晴彦を意識して、殊更好みの洋装を避け、群青の地に白く竹の意匠を抜いた、處女々々しい華やかな和服を選んで出かけた。

二

康子等の新居から、室井家までは、一町と距たない、すぐ近くだつたが、急ぎ足に、大門をくゞつて、玄關の前に立つた時には、康子の肌は、しつとり汗ばんでゐた。

「あら、英二さんは？」

母の俊子夫人は、迎へるなり、康子に訊ねた。

「まだですよ……それにあの、あまり、知らない人を紹介されるの、好きぢやない性質でせう。ですから、自由にしてもらふつもりで、お仲にだけは、言ひ置いて出てきましたのよ……」

「さうお……ぢや……お上り」

康子は、母に従つて、長い廊下を奥へ急いだが、

「ね、お母さん……」

後から訊ねた。

「晴彦兄さんは、奥さんも御一緒？」

「奥さん？……あゝ、いつか問題になつた西洋人？」

「いらつしやらないの？」

「別れてしまつたんですつて」

「ほんと？……」

「さうらしいよ……どうせ、お前、留學生と下宿の娘の戀なんて日本でだつて、長続きのするものぢやないよ。お金でもやつて切れたんだらうよ」

「まあ、可憐ね」

「それに晴彦だつて、一時の情熱だよ。藝術家なんて、さういふもんぢやないかしら」

「さうかしら……でも、その娘が可哀想だわ」

憐むやうに康子は言つたが、心の中では、可哀想とも何とも思はなかつた。寧ろ何かしら、すつとした晴々した氣持だつた。

「あら……」

襖を開けた瞬間、振向いた晴彦の視線にぶつかると、康子は我れにもなく胸が弾んだ。

「よう、これは……」

晴彦は、びつくりしたやうに眼を瞠つたが、

「素晴らしい、美人になつたぢやありませんか」

美しく成熟した康子の姿を、うつとりしたやうに見守つた。

「あら、あんな……」

「しかし、お變りもなく何よりですね」

晴彦は如才なく笑ひながら、ビールのコップをおいたが俊子夫人が、席を離れ去ると、

「僕が、フランスへ出發した時には、まだお河童のセーラー服だつたのに、もうこんなに立派に麗人になつちやつて……」

急に馴れなくしく感慨めいた口調で、なほもしみじみ康子に見惚れた。康子は、さうした晴彦の瞳

に、何か熱いやうなものさへ感じて、彼女らしくもなく頬を染めながら、

「まあ、可憐だわ。私だつて、もう二十歳よ」

「二十歳……さうだつたな。驚く僕がどうかしてゐるかも知れない。まして、もう令夫人だからな。

新婚二ヶ月といへば、肉體的にも精神的にも、あらゆる點で女性の美が、幸福の刺戟に促されて、伸

びてゆく盛りだからな。はつはは」

晴彦は昔のまゝの親しみを交へて、無遠慮に笑つた。

「あら、ひどいわ……御自分だつて、金髪の麗人と御結婚なすつた癖に」

康子は、思はず、かう言つて、晴彦の方を睨んだが、その熱い瞳の底に、われ知らず恨みに似た、ほのかな感情が湧き上つてゐた。

晴彦はさうした康子の視線を、漁色家らしい敏感さで讀みとると、

「はつはは、そいつは、お生憎とあまりに舊聞ですね。あれは留學生の郷愁を慰める、誰にも必ず一應はありがちなパリーの秋夕夢ですよ。ご覽の通り相變らず昔のまゝ、氣樂な獨身者で、今の康子さんのやうな幸福はまだ知らないですよ」

にやりと、康子を顧みた。

「まあ、随分勝手ですわ……それぢや、私のも東京の秋夕夢かも知れないわ」

「おや、さう御謙遜なさらないでも、お家庭の圓滿は、伯母さんから聞いて、少々羨んでゐるく

らゐですよ。はつはは……それで、旦那様は、御紹介してくださいませんか」

「主人なんか、連れてきませんわ」

「何うして、獨身者の手前、遠慮しようといふのですか」

「まあ、憎らしいわ、主人は、晴彦さんのやうな藝術家と違つて、思想も容貌も、平凡な事務家ですわよ」

六年振り康子の見た、晴彦の最初の印象は、長い月日の刻む自然の衰れか、それとも留學中に盡くした放縱な生活の陰翳か、顔の皮膚にも何處か着みを帯びた暗さに似たものを感じずにはゐられなかつたが、かうして昔のまゝの親しみに返つて冗談口などを叩いてゐるうちに、やはり持前の美しい眼や眉や、憎らしいほど整つた顔や、殊に、魅力に富んだ微笑する口許などに、昔のまゝの晴彦が甦つてきて、最初氣になつた一種の翳にも、却つて藝術家らしい風采の深さを加へたやうにさへ見えて、英二の平凡な事務家的な容貌に、ますます負け目を覺えずにゐられなかつた。

間もなく、俊子夫人も現れて、話はフランス婦人の思想、趣味、流行——それから美術、演劇、キネマと康子のやうな有閑婦人の好きさうな豊富な土産話が、晴彦の巧な話術で次々と續けられた。

康子は、つきない興味にそゝられて、夢中で聽いてゐたが、話題はチロル邊の避暑客の生活などから、その年の避暑の話に移つた。

「ところで、東京の夏も相當に暑いでせうが、康子さんは、今年も海へですか、山ですか」

晴彦は、再び俊子夫人が所用で出てゆくと、突然、こんなことを訊いた。

「さあ、こんな御時節ですから主人にも暑中休暇あるかどうかかわかりませんが、まだ何處とも決つてゐませんの。やつぱり未婚時代の自由な生活が懐しいわ」

「さうでもないでせうがね……」

「お兄さんは、何處かへて豫定は決つていらつしやいますか？」

「秋のシーズンに、あちらで制作したものを集めて、歸朝記念の個人展をやることになつてゐますから、その時に、少し歸朝後の作品も加へたいので、志賀高原か、上高地へでも畫題を探しに行かうと思つてゐますがね……」

晴彦は、言つたが、すぐ、

「どうです、あなたも旦那様を誘つて、山へ行きませんか……もし、旦那様の御諒解さへ得られたらひとつ康子さんをモデルにして、一枚力作をさせてもらひたいですね」

「あら、私なんか」

「いや、これは、さつき、康子さんを見た時から、眞剣に湧上つてきた考へですが、康子さんの見事な肢體の均整、それと豊かな線の柔かさは、日本人にちよつと稀らしいですからね。殊に新婚時代の生活から發散する、女性美の逞ましい發展の過程は、全く詭へ向きの畫題ですからね。ぜひ、僕の歸朝第一回作品を、康子さんの美しさで飾らせてもらひたいですね」
急に熱を帯びてくる晴彦の言葉に、康子の瞳もいつしか燃えてゐた。
その時だつた。

「若奥様に、旦那様からお電話でございます」

女中が知らせてきた。

「あら……」

康子は、晴彦との話に夢中で、うつかり心に置き忘れてゐた良人の電話と聞くと、はつとして我に返つた。

「旦那様が心配して、お電話ですか」

「また、可憐……」

康子は小娘のやうな甘えた眼で晴彦を睨んで立上つたが、

「是非、康子夫人のやうな美しい奥様に恵まれた旦那様に拜顔の榮を得て、その幸福にあやかりたいものです」

「いやだわよ、そんなに冷かすの……」

「いや、冗談でなく、モデルの話も、僕から折入つてお願ひしたいし……」

「そんなこと言つたつて、あの人ぢや駄目ですわ」

康子はちら／＼本心を覗かれるやうな晴彦の甘い冗談に酔ひながら、廊下つゞきの電話室へ入つたが、面倒臭さうに、

「もし／＼、私よ」

「今歸つたよ。誰方が、お客さんだつて」

英二の聲が訊ねた。

「父の親戚の方ですの……」

康子は、簡単にかけたづけて、

「今日は、遅かつたわね」

「ちよつと會社に用事があつてね……と言ふのは、今年は駄目かと思つてゐた暑中休暇を、矢張りやることになつてね。今まで日取りの相談をしてゐたんだよ。最初から抽籤にでもすれば、もつと早くかたづいたんだのに、誰もが七月の下旬から八月上旬を規つてね、なか／＼譲らないんだからこた／＼して、一時間の餘も暇取つてしまつたよ」

英二は、釋明するやうに言つたが、

「そんな譯で、結局、纏まらなくなるので、抽籤の結果が、僕に七月の二十日から三十日までといふ一番いゝ時期が當つたんだよ」

「まあ、よかつたわ……ちや十日間ね」

「さうさ……歸つたら、それをどういふ風に享樂するか、いろいろ相談したいと思つてね、樂んでゐるんだよ。すぐ歸つてくるよ」

妻の歡びを期待する幸福に弾んだ英二の聲だつたが、

「さうね……私、今日は、夕方になるかも知れませんのよ。お客様は子供の時から親しくしてゐた方

で、フランスへ繪の勉強にいらしてゐた方ですの、今年で、六年振りの歸朝でせう。母も歡迎の意味で、晩のお食事だけ一緒にして歸れといひますのよ……ね。濟みませんが、お仲にさう言つて、何か作らせて、お一人で召上つてくださいませんの」

「さうかね……」

喜びの出鼻を打挫かれたやうな英二の寂しい返事だつた。

「ぢや、濟みませんが……」

康子は冷淡に電話を切つてしまつた。

「いらつしやいますか、御主人は？」

座敷へ歸ると半ば冗談のやうに晴彦が訊ねた。

「いゝえ、いづれまたお目にかかる機会があるだらうから、今日は遠慮させていたゞきたいと言ひますのよ。あまり社交的な人ぢやないんですから」

「家にゐて、奥さん大事に守る一方ですね」

「あら、また、可嫌」

「結構ぢやありませんか……しかし、いくら大事な奥さんでも、美術のモデルになるくらゐ反對はなさらないでせうね。これは、僕最近の野心作として、心膽を傾けてかゝりますよ。一週間くらゐ、何とかして、旦那様を説いて一緒に志賀高原へいらしつてくれませんか。僕からもお母さんを通じて頼

みませんが、それくらゐお暇はとれませんでせうか。背景には七月下旬頃の山の光線が最も理想的なんですか……」

「七月下旬なら、何とかかなりますわ。でも、私なんか……」

康子は、さつきの英二の電話を思ひ出して、につこり晴彦の方へ笑みかけた。

三

その夕、英二は、新婚以來初めて、一人で食べる土曜日の佗しい夕飯も、我慢して済ませると、暫く退屈さうに寝ころんで、夕刊を展いてゐたが、康子は、八時になつても、八時半になつても、一向歸つてきさうもなかつた。

いつもなら、二人で早目に入浴もすませ、銀座へ買物に出るか、新宿へキネマを見に行くか、或は明日の日曜日をかけて、箱根、熱海あたりへ週末の一日旅行に出かけるか、とにかく、新婚時代の書入れ日である土曜日の夕を、妻の顔も見えず、また、妻の歸りが遅くなると見ると、風呂の湯さへ沸かしてくれない奥様本位のお仲は部屋へ籠つて顔も出さず、英二はまるで安下宿の客か、養子婿にでも来た人間のやうな、味気ない氣持を欠伸に吐き出しては時計の針ばかり眺めてゐた。

「折角儲けた新婚最初の夏休みの十日を、何う二人で愉しく暮すか……」
わけて今日は、この楽しい話題を土産に、康子と二人、さまざまなプランを闘はせて興する愉しさ

に、英二の心は弾み切つてゐたがそれさへひどく裏切られたやうな、英二は不満を感じずにはゐられなかつた。

「親しくしてゐた新歸朝の畫家つて、一體何ういふ關係の人だらう……」

英二は、室井夫妻からも、ついぞ聞いたこともない今夜の客に對しても、次第と疑問を覺えずにゐられなかつた。

「もう一度、室井へ電話をかけてみようかな……」

英二は考へたが、それも主人の權威を傷けるやうに思へて、會社から歸つたきりぬる／＼汗ばんでゐる、遣り場のない體軀を起すと、

「仲！ かう暑くちややり切れないから、錢湯へでも入つてくるよ。タオルと石鹸を出しておくれ」

英二は、一人で洗面場で、湯を使つてゐるお仲の方へ、冷淡を咎めるやうに言つて、錢湯にゆく支度を命じた。

「あら、お湯にいらつしやいますの……」

さすがに、お仲も、どきまぎして言つたが、

「もう夏だからね、外へ働きに行つて歸つた者には、お湯が無しちややり切れないよ」

英二は、つ／＼げんごに言つた。

「済みません、旦那様も、やつぱりあちらへいらつしやつて、御一緒に、あちらのお湯をお召しにな

るかと思ひまして、御時節柄ガスの節約をいたしましたのですが、悪うございました……あの、何でしたら、只今すぐに沸かしますから、ちよつとお待ち願へませんでせうか」

「いや、もう澤山だよ……ガスの節約はいゝことを考へたね。はつはは」

「あら、そんなに仰有られると、私何だか、悪くて……」

室井家の傍近く住んで萬事室井家の指圖で暮してゐる二人の生活を見てゐるお仲だけに、英二の存在など、養子婿ぐらゐにしか映らず、自分までも室井家の威光を笠にして、英二の言葉尻を詰るやうに言つた。

「悪いといふ事が、今気がついたのかね」

英二は、康子に對する不満をも交せて、こんな皮肉を浴びせたまま、一人で錢湯に出ていつた。しかし、附近は、裕福な邸宅街で、錢湯など何處にあるのか、まるで見當がつかなくなつた。

英二は、界限の街を當てもなくさがしてゐるうちに、いつしかその足は室井家の方へ向いてゐた。その時だつた！

「あら、また、そんなこと可嫌……」

甘たれた女の聲が、ふと十間ばかりの先の宵闇の中から響いてきた。

「……？」

瞬間、英二は、聞き馴れた女の聲に、はつとして素早く物蔭に身を寄せると、宵闇の街を、一歩一

歩近づいてくる若い男女の姿に眼を凝らした。

「おや、まだ僕の言ふことを、あなたは冗談だと思つていらつしやるんですか、困りましたね」

他に通行人もない、静かな邸宅街を、二人はもう英二の眼近に迫つて、男の聲も手に取るやうに聴き取れた。

「實は恥かしい話ですが、僕、今度歸朝してきましたほんたうの目的は、康子さん、あなたに逢ふことだつたのですよ……」

「また、あんなこと」

「いや、全く冗談ごとぢやないんです……たしか、この三月でしたよ、パリにゐる友人の細君が持つてゐた『女性の友』の新年號の口繪で、僕は偶然六年振りに、あなたの美しい御成長振りを見たのです。今まで歸朝のことなど思ひもしなかつた僕が、それ以來歸心矢の如くとも言ひますか、もう一日もパリに居堪らなくなつたのです。祖國に残してきた得難い至寶——僕は、その憧れ一つを抱いてわざ／＼海を渡つて歸つてきたのです……これだけ申上げて、まだあなたには僕の眞實が理解していただけませんか。さうでなくて今年の新年の雑誌に出てゐたあなたの寫眞を、どうして昨日まで旅にゐた僕が知りませう。これだけでも僕の話の眞實性がわかりだと思ひますが何うです……」

女は何か言つたやうだつたが、低聲で、英二には聞きとれなかつた。

「この僕の氣持、わかつて頂けますか……」

女は、かすかに肯いたやうだつた。

「わかつてくれますね」

「嬉しいと思ひますわ……」

ちやうど、英二のすぐ前を行き過ぎようとする女の聲は、あやしく顔へを帯びてゐた。

「ところが、さうして歸つて見ると、あなたは、結婚してゐられる……いや、これ以上は、紳士として、口にすべきことではありませんから、もう何も言ひませんが、たゞ、これほどの僕の氣持が、あなたに知つていただけないとすると、僕自身の描いてきた夢が、あまりにもはかなく、佗びし過ぎるのですよ」

「濟みません、でも……」

女の聲が、かすかにかすれて、

「でも、私だつて、あなたをお恨みしてゐましたわよ」

「何うしてです？」

「だつて、パリでは、あんなことをなすつたんですもの……」

「しかし、それは、さつきも言つたやうに……」

「でも、私、口惜しくつて、一時はどんなに……」

「ほんたうですか、康子さん」

男の聲が、急に弾んだ。それぎり、次第に遠ざかる男女の聲は、英二の位置からは、聞き取れなくなつたが、さうした二人の會話に含まれる、容易ならぬ感情の激動は、更に激しい狂爛怒濤となつて英二の胸を襲はずにはゐなかつた。

たしかに康子だ！

「あの男か、歸朝者に違ひない……」

甘い男の囁きに取り亂れ、宵暗の中に妖しく顫へてゐた淫らな花のやうな康子の白い横顔——それは却つて、不思議なほどの、狂ほしい魅惑を湛へて、英二の胸を嫉みにゆすり廻した。

四

英二はまるで打拉がれたやうに、暫くは、ぼんやり其場に立ちつくしたまゝ、二人の後姿を見送つてゐたが、

「さうだ……」

何かもつと深く突込んで、二人の間を究めずにはおけない、激しい嫉妬と、焦慮と、混亂に驅られて、思はず二人の後を追うた。そして、晴彦と康子の、五六間傍まで近づくと、街路樹の蔭を選んで身を隠しながら足音を忍ばせ後をつけた。

「それぢや、こゝで失禮しますわ……」

突然、康子が歩を停めた。

「もう、お家なんですか」

「あの家よ……」

康子が指さすすぐ傍に、英二は初めて、我家を發見した。

「これですか。いゝ家ですね……ここで康子さんの幸福な生活が営まれてゐる譯ですね」

「あら、それほど幸福な生活かしら」

康子は、それに媚びるやうに打消した。

「しかし、まさか、不幸な生活でもないでせう。はつはは」

「何とでも仰有い」

「ぢや、とにかく、こゝでお別れませう……」

「では、またお目にかゝりますわ」

「それでは、今日の約束、お忘れなく」

晴彦はかう言つて、片方の手を出した。

「え、きつと……」

康子も軽く、その手を受けて握りしめた。

「失禮しますわ」

「どうぞ……」

晴彦は、立つたまゝ、門前に近づく康子を見送つた。

「ごめんなさい……」

康子は、につこり晴彦の方を、もう一度振り返つて、門内へ消えた。英二の眼には、さうした様子がまるで戀人同志のやうに見えた。

男は、暫く立つたまゝ、門を覗いたり、二階を仰いだりしてゐたが、間もなく、家の前を通り過ぎて、停留所の方へ消えていつた。

暫く見送つてゐた英二は、初めてほつとしたやうに、深い吐息をついた。

「あれが良人を愛する妻の行爲だらうか」

英二は、さうも考へたが、それは何の意志をも含まない、單純な嫉妬に過ぎなかつた。いやそればかりでなく、彼は、そのまゝすぐに家へ入ることすら、何か心に憚られて、暫らくあたりを一巡してから、やつと門を入つて行つた。そして、おづく玄關のベルを押すと、ぱつと内部から光線が射して、誰か黒い影が動いた。

「康子かな……」

英二は、自分にあんな姿を見せた、妻を見るのが、急に怖くさへなつた。

「あら、お歸りなさいまし……」

お仲ではなく、やはり康子だつた。

「私も、いま歸りましたの。遅くなつて済みません……」
 康子は酒啞々々として、何喰はぬ顔で迎へた。

「お仲は、お風呂も沸かさなかつたんですつてね、ほんとに悪かつたわ」
 茶の間へ入つてゆく英二の手から、康子は、かう言つて、タオルと石鹼箱を受取らうとしたが、

「あら、お風呂には、いらつしやらなかつたのですの？」
 ちつとも濡れてないタオルを見て、不審さうに訊ねた。

「そこらを歩いて見たが、湯屋が見當らなくてね」

英二は、はつとして、寧ろ辯解するやうにいつた。

「ほつほ、さういへば、さうですわね。すつと向ふの通りへ出なければ、この邊にお湯屋なんかありませんわ。ほんとに済みません……今すぐお仲に沸かさせますから」

「いや、もういゝよ、水でゝも洗つて置くよ」

「だつて、今夜は、あなたを寂しがらせた上に、お湯にも入れないぢや、私、済まないわ」
 康子は、いつもと、ちつとも變らなく、甘えた表情で英二を見上げ、

「ねえ、ちよつと待つて……」

すぐに女中部屋の方へ出ていつた。英二は、それを止め立てするのも物憂く、さうした妻の後姿を

不思議な氣持で眺めてゐた。すると康子は、すぐ引返してきて、

「あの、月末のいゝ時期に、お休みがとれるんですつてね。……早く歸つてきて、その相談がしたかつたんですけど、遅くなつていけなかつたわ、待遠しかつた？」

媚びを湛へて英二の手を取つた。そして英二が呆れて挨拶に困つてゐると、

「どうなすつたの、怒つていらつしやるの」

「別に……」
 「だつて、何だか變よ。……ねえ機嫌を直して。私あやまるわ」

「あやまらなかつたつて……」
 「ほんと？ 許して下さいさ。こんなに待ぼけさせて……悪かつたわ。折角、あなた、楽しんで歸つて

いらしたのに。さうでせう。夏休みのプランについて、二人でいろんな楽しい相談をしようと思つて……」

英二は、あれから半時とたゝない今、平氣でこんなことが、良人にいへる康子の圖太さに呆れながらも、あまりにも白々しいその豹變に、或は先刻路上で見たこと、また聞いたことが、全部自分の錯覺ではないかといふやうな、不思議な混亂をさへ覚えてくるのであつた。康子は、につこりして、

「ねえ、まだ九時半よ。それに土曜日ですもの、これから素晴らしいプランを樹てませうよ。……ねえ、あなた、山になさいます？ それとも海がよくつて？」

「お前は、どつちがいゝんだね」

英二は、心を妬みに燃やしながらもつい詰問のきつかけもなく、一方眞實を知る恐怖に妨げられてまごまごしてゐるうちに、さうした康子の變らない媚態にいつとはなく安易に紛らせられて、寧ろ餘計なことなどいひ出し、現在のこの幸福を、拔差しならない混乱に陥れることを恐るやうな氣持にまで妥協してきた。

「ねえ……」

康子が甘えるやうに、

「私……志賀高原へ行つて見たいと思ひますの。賛成してくださらないこと」

「志賀高原……」

「今日来た從兄も、秋の個展の制作に志賀高原のホテルへ行きますのよ。ね、是非あなたとも近づきになりたいといつてゐますの。とても氣のいゝ、朗らかな青年よ。二人きりでも飽きますから、その方が賑か、よくありません？」

はつとして瞳つた英二の眼前には、先刻の路上の光景が、フィルムのやうに鮮かに甦つたのである。

「どうなすつたの？」

康子は、暫く呆然として自分の顔に見入つてゐる英二の異様な表情に氣付くと、怪訝に眉を寄せて、

「いけません？」

駄々つ子らしく、甘えた顔を傾げた。

「もうそんな約束を、してきたのかね」

英二も思はず聲を弾ませたが、

「あら、約束なんかしませんわ。私、あなたの御意見も訊かないで、そんな約束なんかしませんけどその人は、ちつとも氣の措ける人ぢやありませんの。一度會つていたゞくとわかるわ……でも、いけなかつたら、何處でもいゝのよ。あなたの行つてみたいとこ、何處でもいゝのよ」

案外あつさり康子に折れて出られると英二も、つい鋒先が鈍つて、

「僕は、この夏は、お前を九州へ連れて行つて、長らく世話になつてゐる博多の伯父に、見舞かたがた引合せておきたいと思ふんだよ。それから、別府、雲仙と、北九州の勝地を廻つて歸つたらと思ふんだがね」

「九州？……聞いたゞけでも暑さうね」

康子は、飛びついて來なかつた。

「可憐かね……九州だつて別府や、雲仙を歩いてくれば、悪い旅ぢやないと思ふよ……」

「それや、さうだけど……それぢや、かうしませうか」

「何ういふ風に？」

「博多の伯父様のお宅だけは私一緒に子供しますわ。それから東京へ歸つて、後は上高地か、やつぱり信州方面へ行きたいと思ひますの……飛行機なら三日あれば、伯父様をお見舞して、こちらへ歸れませう」

「馬鹿に忙がしいんだね」
英二は苦笑して、

「どうして、そんなにまでしてその人と同行しなければならなんだね」
にやりと探るやうに、康子の顔を覗いた。これは康子にも應へたらしく、

「あら、私何も、そんな意味で言ふんぢやありませんわよ。あなた、變な風に、とつていらつしやのね」

「取れば取れないことはないからね」

「まあひどいわ……私、そんな女かしら」

「お前は、さうでなくても、先方の氣持はわからないよ。パリでも艶聞を流した人らしいからね」
康子はびつくりして、

「あら、何うしてそんなこと御存知ですの」

「さあ、何うしてか知らないが」
英二の聲は、顔へを帯びて、顔色まで蒼ざめてゐた。

「いゝわ、そんな風に仰有るのなら、私と一緒に九州へまゐりますわ……晴彦兄さんにも近づきませんわ。そんなに信用していたぢやないんでしたら」

「なるべくさういふ風にして貰ひたいね」

「その代り、今日晴彦兄さんと約束したことを、一つだけ許していただきますよ」
「何ういふ約束を」

「あの人が秋の展覧會に出す、制作のモデルになつてあげてを。これは實家の母も賛成してくれましたのよ。それくらゐのことお許し願へませう。この夏一週間あなたがおいやなら、母にでも頼んで一緒に行つてもらひますわ」

英二は呆れて、返す言葉もなかつた。が、何と思つたか、

「お前とお前のお母さんで決めたことなら、僕は何も言はないことにしよう。そのかはり飛行機で翌日歸りでもいゝから、博多へだけは、附合つてもらふよ。いゝかね」

英二の言葉は静かだったが、沸き返るやうな激しい感情を、何か思惑あつて、一生懸命に、耐へてゐるやうな聲だつた。

二つの旅

いくら獨り者の、身輕な石黒でも、身邊の過去を一切整理して、今後の生涯を大陸に移しかへるには、やはり一月以上の準備期間を要した。

第一には、長らく厄介になつた伯父の賛成も得なければならず、一應は郷里へ歸つて、代々の墓前にも告別をしなければならず、その他、その筋の手續にも、相當の時日を要するので、彼が一切の準備を完了して、東京南京間の飛行機の切符を手に入れたのは、七月の半ばを過ぎてからだつた。

羽田出發は、二十一日の午前六時ときまつた。その前々日の夕方、邦子は、石黒を家に招いて、さゝやかながらも母娘が心盡しの手料理で、彼の新出發を祝ふ送別の宴を開いた。

その日は恰度日曜でもあり、邦子と暁子は、半日がかりで、石黒の好きな支那料理を作つた。

「お母さんの支那料理は、ほんとにお手のものですわ」
邦子の鮮やかな支那料理の手續には、いつも暁子は敬服してゐた。それも思へば、若かりし頃、楊大偉との新居時代に朝夕賑かに集ひ來ては、祖國の建設に熱血をたぎらせて語り合つた多くの同志が

すべてみな、郷里の料理を好む、支那の青年だつたからである。

それから二十年後、今また、日支親善に身を賭して、遠く支那大陸に向ふこのたのもし青年を送るに、當時覚えの料理の腕を揮ふかと思ふと、邦子の胸には感慨深いものがあつた。

すつかり準備も終へて、待つ間もなく、石黒は、元氣な顔を出した。

「今日は、わざわざお招きにあつかりまして」

「さあ、どうぞ」

母娘は、朝から綺麗に形付けておいた二階の暁子の書齋へ通した。

「ほう、これはいゝ見晴らしですね……」

そこらは丘續きの高臺なので開け放された縁側からは、深い瑠璃色に暮れてゆく澄みきつた夏の夕空を背景にして、青々と繋がる駒場あたりの深みの中に、帝大航空研究所の時計臺や、一高の建物などが、夕映えに染つて繪のやうにながめられた。

「どうぞ、今夜はごゆつくりなすつて……」

邦子は、心から石黒に言つた。

「今度、お目にかゝるのは何時でせう……」

暁子も、瞳をうるませた。

「では、お目出度うございます」

邦子は、慇懃に一禮すると、鏡子を取上げて、石黒にすゝめた。

「戴きます……」

石黒は受けた盃をおくと、

「今夜のこの、お心盡しのお送別は、恐らく生涯忘れることができないでせう」
早く両親に死別れて、他に兄妹もない石黒には、母や妹に別れるやうな、深い感傷をそゝられるのだつた。

「必ず朝夕私達は、御初志のご貫徹を、お祈りしてゐます」
邦子の聲もかすかに顫へた。

良人の許に、この青年を送る——何といふ不思議な縁だらう。口にくそは洩らさなかつたが、今日までのこの青年の厚意を思ひ、明日からのこの青年の生活を思ふと、邦子は、此世に初めて授かつた若き日の理想を引繼ぐ一人息子のやうな頼母しさをさへ覚えるのだつた。

その夜は、石黒を中心として、邦子、暁子等三人の間に、心置きなない歡談がつゞけられた。

邦子も、誰に憚ることもなく、遠い昔の追憶に還つて、當時出入した亡命の支那青年達——今は東亞の近世史に、いづれも輝かしい名を傳へてゐる黃興、陳其美、張群、岑春煊など面識の人々について、明日の新支那を建設に向ふ石黒のために語りつゞけた。

その中には、現在の支那を、代表する汪兆銘や蔣介石の逸話なども出て、石黒にとつても、その一

つ一つが、盡きせぬ興味をそゝるのであつた。

わけて、邦子が話材の間に挿むさうした人物に對する細かい觀察や、憚るところのない鋭い批評には、所謂支那通の著書などに見られない、高い見識さへが窺はれて、石黒の眼を瞳らせずにおかなかつた。

「なるほど、小母さんは、稀らしい支那通ですね。大木將軍も、今の支那を知らうと思へば、先づ、江島さんのお話を聴け、今の支那は、あの當時、江島さんのお宅でやり合つてゐた議論から生れたのだ——こんなことを仰つたが、全く驚きましたね」

石黒は感嘆の聲を洩らした。邦子は笑つて、
「あら、御冗談を……私のは、はしたない昔話でございますよ」

さすがに若々しい血の色が、邦子の顔に美しく輝くのだつた。

「しかし、東亞の新建設といふことが、これほど重大化した時代に、小母さんのやうな眞個の支那通が、巷に隠れてゐるのは惜しいやうな氣がしますね」

「何を有仰います……私は、平凡な母親で澤山でございますわ」

軽く打消した母の寂しい笑顔に、暁子は胸に沁み入るやうな、深い愛情を感じずにはゐられなかつた。

しかし石黒は、熱心に、
「是非、近い將來には、小母さんにも、暁子さんにも、支那へ來ていただきたいですね。いや、僕な

んかより、小母さんのやうな方こそ、進んで興亞の大業のために、支那へ乗出して活躍していただき
たいものです。僕はその日を楽しみにして、何か立派な仕事をして、待つてゐますよ」
「さうよ……いづれはお母さんだつて、私だつて、さういふ時がきつと來ると思ひますわ……日支の
提携と新東亞の建設、さういふ意味で、私なんかの境遇も、今の時世には却つて生き甲斐があるやう
に思ひますのよ」
輝く暁子の瞳の中にも、遠い大陸の山河が描かれてゐた。
「まあ、よく考へて決心いたしませう。とにかく、しつかりおやり遊ばせ。心からお祈り申し上げて
をりますわ」
邦子も眞剣に、洩らすのだつた。

その夜、石黒が、邦子の家を辭したのは、もう十一時近い頃だつた。

石黒は、まだ興奮に火照る頬を、冷たい夜風に吹かれながら、澄みきつた夜の大空を仰いだ。

大陸へ——もう今夜と、明日限りの東京の街の灯が、石黒の眼には、別れゆく愛人の瞳のやうに寂
しかつた。

人間到る處青山あり——思はず口ずさんだ石黒の眼前を、今別れてきたばかりの邦子母娘の懐かし
い姿が、想像に泛かぶ大陸の天地と共に、この人だけが、何か永遠の道連れのやうに愛しく描かれる
のだつた。

二

翌々二十一日——。

羽田の空港は、澄みきつた紫紺の色に明けそめてゐた。

風も微弱で、雲の影もない、絶好の航空日和だ。

邦子と暁子と、たつた二人きりの見送りで、石黒の車が、飛行場の入口に着いた時は、出發の定刻
六時には、十五、六分の餘裕があつた。

太陽はまだ地平の影にかくれてゐたが、ほの暗い待合室の中にもう二、三十人の見送人や乗客の
影が賑かにうごめてゐた。中には前線へ急行するらしい將官級の殿しい軍服の姿なども見えた。

「この天気なら大丈夫ですよ」

「しかし、昨晚は遅くなつて、よく休んでいらつしやらないんでせう」

「なに、福岡から先は、海ばかりですから、そこらで、ゆつくり午睡でもしますよ」

「大した勇氣ですね」

「いや、飛行機も、馴れれば、こんな樂なものはありませんからね」

「何しろ、朝乗つて午過ぎには上海だといふんですから大したものですよ」

こんな會話が、至る處で、きまつたやうに交されてゐた。

間もなく、爽快なエンジンの爆音がして、ほのかに、広い場内に流れそめた朝日の薔薇色の光の中に、ダグラス機「櫻」の雄姿が、長い銀翼を輝かせて、勇ましいプロペラの唸りを立てはじめた。

「あれね、あなたがお乗りになるの」

暁子は、ちよつと石黒の方を顧ると、不思議なものを見るやうに「櫻」の巨體に眺め入った。

「今日の四時には、南京ですからね」

石黒は、輝く頬を微笑ませて、機體の上から外した眼を、にっこり邦子の方へ向けた。

さうだ！ もう今日の夕景には、この青年は、南京に着いて、二十年來音信も許されなかつた、あの人の許に、造作もなく着いてゐるのだ——。

邦子は何かこの世の中の、異常な奇蹟でも仰ぐやうに、石黒の顔をしみく見守つた。

何といふ希望に充ちた顔！ あの人も、當時は、この通りだつた——邦子は、今も臉に残る二十年前の若々しい楊大偉の面影を懐しく描くのだつた。

その時だつた。

事務所の入口の方から、控室の方へ、慌しく駆けつけてきた一群の男女があつた。

「やつと間に合ひましたわよ」

「どうも女の支度は長いんですね」

「だつて、まだ、十二分もあつてよ。ほら、まだ誰方も乗つちやみせんわよ」

若い夫婦者らしい押問答に、石黒は、何気なく振り返つたが、

「おや……」

思はず驚きの聲を立てた。それは思ひもかけぬ牧山英二夫妻と、立野夫人、室井夫人、いづれも石黒には敵のやうな顔ばかりだつた。

相手の夫人連も、はつとして眼を瞠つた。石黒は、その中で挨拶に迷つてゐる英二の顔に眼をやる、すぐにつこり調戲ふやうに、

「空の新婚旅行かね」

と、その聲に振り返つた暁子が、ぱつたり康子と視線を合はせた。

暁子は、遠て、眼を外したが、その視線は、ちやうどすぐ傍で、石黒の浴せた皮肉に堪へずどぎまぎした英二の眼と、ぱつたり出會つた。

「あ……」

暁子も驚いたが、英二の狼狽は、一そう甚だしかつた。さうした二人を、康子の眼が、蛇のやうに睨んでゐた。

眼と眼、顔と顔が、息詰まるやうな沈黙の中に、あらゆる空間で見えない火花を散らし合ふやうな瞬間だつた。

だが、それにも増して、もつと深刻な、肉親の悲劇が、その眞只中に捲き起つてゐたのである。

邦子と俊子——またも皮肉な、姉妹の対面である。同じ血を分けた姉妹は、二十年といふ長年月の義絶の果に、戀敵として對立する二人の娘の母として對立せねばならない奇しくも悲しい運命であつた。

しかし、次の瞬間、俊子はちらりと、さも汚れたものでも見るやうに邦子の顔へ冷めたい一瞥をくれて、すぐ蔑みの面を外らした。

瞬間、邦子は、

「……あの娘も血筋を考へないで身に過ぎた縁を掴まうたつて、それは無理よ。私、兄さんに代つて江島家の名譽のために注意しておきますよ」

——恥も外聞も忘れて可愛い、娘のために實家を訪れたあの日、二十年目で顔を合せながら、冷罵を残して奥へ消えて行つた姉の後姿を思ひうかべながらじつとその横顔を見つめたが、それは悲憤や、反抗としてみるには餘りに深い寂しさを罩めた瞳だつた。同じ両親の膝下に育ち、机を並べて勉強して肩を並べて通學した頃の、あの姉の幼時の面影を、邦子は姉の横顔に、靜かに捜し求めてみたのである。

やはり、それは、邦子にとつて、懐しい姉に違ひなかつた。が、それにしては餘りに儂い肉親の縁であり、呪はしい宿命である！

邦子は、かうした峻しい對峙のまゝで、肉親の娘を黙視し去るに忍びなくなつてきた。

そこへ、つか／＼入つて來た航空會社の事務員が、

「御乗客の方だけ、ぼつ／＼お乗りを願ひます……」

極めて事務的な一言がこの混亂した感情の大渦巻をびたりと停止させてしまつた。

「ぢや、行つてきます……」

「どうぞお大事に……」

八方から別れの挨拶の聲が湧起つて、石黒も、邦子に、

「では、うんとやりますから、きつとあなた方も、いらしつて下さい……」

「御奮闘をお祈りしてゐますわ」

「暁子さんも、御機嫌よくね」

「どうぞ、お大事に……」

石黒が挨拶を終つて、一步退がつた時である。つい眼近く、立野夫人と挨拶を交してゐる英二の傍に立つた康子が、室井夫人俊子と並んですぐ横に立つてゐる若い男と、そつと握手するのを見た。それは俊子等と一緒に康子を送つてきた平瀬春彦だつたが、石黒は春彦を知らなかつた。

石黒は、そのまゝ、邦子等と別れて、旅客機の方へ歩き出したが、直ぐ後から來る英二夫妻を見ると急に何と思つたか振返つて、

「何うだね、久し振りぢやないか、一緒に乗らう」

と英二に聲をかけて、わざと、康子と二人の間へ割込んでいった。康子は、むつとして顔を外らしたが、石黒は笑ひながら、

「あれは、奥さんの男友達ですか。今別れ際に握手していらしたのは」

「あら……」

康子は飛上るやうに驚いたが、

「いや、失禮しました。とんだ處を見てしまひまして。はつはは」

石黒は、笑聲を立てながら、蒼ざめ果てゝゐる英二の方を振り返つた。

暁子は母の邦子と並んで、さうした石黒の動作だけを、遠くから怪訝に眺めてゐた。と、すぐ眼近に陣取つてゐた俊子等の間から、

「あら、また、あの男が、英二さんの傍へ近寄つてゆきますわよ」

「康子を押しのけて、何か言つてゐますわ」

「折角の旅行に、とんでもない男と一緒になつてしまひましたわね。また飛行機の中で、何を言ひ出すか知れたもんぢやありませんわ」

「ほんとに、なんて可憐な男でせう」

俊子と立野夫人が眉をひそめて、囁き合つた。いや、囁き合つたといふよりも、半ば、傍にゐる邦子母子の方へ、厭味を聞かせようとするやうに呟いたのだつた。

邦子は、はつとして息を呑んだが、そのうちに旅客機「櫻」號の巨體は、英二夫妻も、石黒も、全ての乗客を呑み盡して、再びエンジンの唸りを立て始めると、銀色の兩翼を朝日にきらめかせて、海岸の方へ滑走し出した。そして、渚の間近まで来ると、巨鳥のやうな重さうな機體を、見る／＼輕るがると浮き上らせて、蒼々と廣がる朝の海上へ出た。それも束の間で、海上遙かに半圓を描いて、ぐん／＼機體を上に向けたと思ふと、コースを西にとつて、見る間に高く、遠く、小さく大空の中に消えていつた。暁子は、その不思議な邂逅を載せた皮肉な旅客機の行方を、夢中で追つてゐた。

「はや、もう見えなくなりました……」

ほつとしたやうなざわめきとともに、見送りの群衆は解け始めた。

「ちや、ぼつ／＼歸りませう……」

邦子も我に返つて、暁子を促した。そして、群衆に交つて出口の方に歩き出したが、すぐ傍を並んで歩いてゐる俊子の視線と、また、ばつたりぶつかつた。

だがその時、邦子は、もうこれ以上、素知らぬ顔で素通りするに堪へられない不思議な感情の痛みに責められてきたのである。しかし、それは邦子の心が、一時の感傷に敗れたのではなかつた。その複雑な心の動きは、簡単に説明はできないのであるが、さうした、餘りにも淺ましい姉妹の姿を、邦子はつく／＼良心に恥ぢたのであつた。

彼女は、俊子の後に廻り、構内から出ると、すぐ靜かに、

「まあ……」

と、俊子の傍へ近づいていった。いくらか頬の硬ばるやうな、不自然な氣持を感じながらも、邦子は、極めて穏やかな微笑を作つて、姉の顔に笑みかけたのだ。

「……………」

瞬間、俊子の傲つた面上に、激しい狼狽の色が亂れた。同時に立野夫人も、暁子も、驚いて歩を停めた。

「御無沙汰ばかりいたしましたして。お變りもございません……」

こゝまで言ふと、初めて姉妹の感情が、ぐつと熱く、邦子の胸に湧立つてきた。そして覺えず潤んでくる眼で、じつと俊子の返答を待った。だが、俊子の表情は、蒼ざめて、

「一向私存じませんが誰方様でございますか……」

つん、とつめたく脇を見てしまつた。邦子は、はつとしながらも、

「あら、邦子でございますわ……」

俊子の顔を覗いたが、

「存じませんよ、そんな方は……」

俊子は吐出すやうに言つたなり、見向きもせず、

「さあ、どうぞ……」

立野夫人を促して、ドアを開けて待つてゐる自家用車の中へ消えていった。

「お母さん……」

暁子が、見兼ねたやうに、茫然と立ちつくす母の手を握りしめた。

三

一方——旅客機「櫻」號は、瞬間に横濱、大船の上空を一過しもうその時分は伊豆半島の山々を見下ろして、沼津あたりの空高く飛翔してゐた。

ダグラス機二十四人乗「櫻」號の内部は、中央右手寄りに、縦の通路が通つて、左側に二列、右側に一列、各八臺づつの客席が、縦に長く並んでゐる。英二は左側の前から五列目あたりのところで、康子に眺望のいゝ窓際の席を譲り自分はこれに並んで通路に沿うた中央の列の席に掛けてゐた。石黒は、少し離れて、通路を隔て、英二の前方斜めの位置に席を占めてゐた。

英二は、石黒が客室へ入ると、氣を利かせて席を離れてくれたので、いくらかほつとしながら、エア・ーガールが配つて來た朝食のサンドウキツチを摘んでゐたが、さつき搭乗の間際、からかはれた皮肉な石黒の一言がまだ黒い雲のやうに、彼の心を憂鬱に包んでゐた。

「康子が出發間際に、そつと手を握つた若い男——それは、たしかに晴彦にちがひない。しかも自分の眼を盗んで。そのまた醜態を人もあらうに、石黒の眼に見咎められようとは……」

英二は、拭ききれない恥辱を感じながら、サスドウキツチの箱をしまった。

「どうなすつたの……」

やつと暫らくして、康子が窓際の方から、振返つた。

「何うもしないよ」

「何だか、ぼんやりしていらつしやるぢやないの、お氣持が悪いんぢやない」

「別に……」

「ね、こちらへ顔を出してごらんさい。もう静岡よ。三保の松原が、まるで、盆栽のやうよ」

窓を指したが、英二は、腰を上げようとしなかつた。

「どうなすつたの？ あの人の出鱈目を信用して、氣にしていraftしやるの」

康子は、それと氣がつくと、英二の顔を覗くやうにみた。

「ひどい人だわ。私が晴彦兄さんと握手したなんて、随分ひどい嘘つきだわ。まだあの男、私達の幸福を、どうかして邪魔しようと思つてゐるのよ。蛇のやうな奴！ 悪魔のやうな男！」

康子は、眉を逆立て、石黒の方へ口汚く罵り立てたが、勿論、その聲は爆音に掻消されて、石黒

の耳にとゞく筈がなかつた。康子はなほも呪ふやうに、

「折角の旅行に、とんだ奴に會つちやつたわ！ だから私、博多行は、初めから賛成しなかつたのよ」

うつかり本心を滑らせた。途端に、

「さうだらう……だから博多へ着いて、伯父に面會したら、君はすぐに一人で、上高地へ行けばいいぢやないか」

英二も、先刻から、耐へ兼ねてゐた不満を吐き出した。

「あら、またそんな……私そんなつもりで言つたのぢやないのにひどいわ」

「さうかな……」

「まあ、何が、さうかなでせう……さういふあなたこそ、さつきあの娘を見た時、何といふ顔をなすつたの。ちゃんと見てゐましたわ、さうよ。あの人を見てから、きつとまた私がお可嫌になつて、それで、そんなこと仰有るんでせう。いゝわ」

康子は却つて、英二に對して、心にもない逆襲を試みた。しかし事實、英二の眼には、今日三月目に、偶然にも見た、誇らぬ花のやうな暁子の慎ましやかな姿を、うつかり紛失した寶石のやうに、心惜しげにも思ひ泛かべてゐたのであつた。

旅客機「櫻」號が、東海道から近畿の上空を横断し、霧地に瀬戸内海に沿うて、四國の空を背に、九州の北端の炭山區を跨いで、福岡飛行場に着いたのは、まだ午前の九時半頃だつた。

立花山の上空あたりから、急に降下しはじめた機の窓から、香椎潟の静かな波や、名島の丘の田畑が手にとるやうに見えてくると機體は、間もなく、滑るやうに、鮮かに飛行場の地上を走つてゐた。

「さあ、着いた……」

どつと、安堵に似た囁きが、一部の人の口々から洩れて、機は事務所の前方三、四メートルの位置にびたりと滑走を停止した。

石黒が立上つて、出口の方へ歩き出した時には、英二は、彼を厭ふ康子に追ひ立てられるやうに、とつくに席を立つて、早くも出口のステップに片足をかけてゐた。石黒が苦笑しながら三、四名おいて後から、地上に降りた時には、英二夫妻は、待合所の方から驅出してきた従兄の忠雄や、家の若者らしい詰襟の男に迎へられて、何か頻りに挨拶を交してゐた。

「あッ……」

忠雄は、何気なく顔を動かしたが、につこりと英二の方へ目禮を興へながら通り過ぎようとする石黒の顔を見て、びつくりしたやうな聲を立てた。

「あれは、披露宴を打つ毀したお前の友人ぢやないか」

「さうです……」

「ほんとに可憐でしたわよ、お従兄さん。たまの旅行にあんな男と一緒に……」

康子は眉を寄せて訴へるやうに告げた。

「それで、あの男は何處へ行くんだ。お前達について、わざわざ何かしに、福岡まで来たんぢやないか」

忠雄は氣味悪げに訊ねた。

「何でも機上で、支那へ行くとかいつてましたよ」

「あんな馬鹿なことをしたために、會社を減にされて、行く先がないんでせう」

康子は、待合室の方へ入つてゆく石黒の背に嘲笑を送つたが、すぐ思出したやうに、

「あの、荷物は、まだ出ないのでせうか」

「待合室の前へ運んでくれますから、暫くあちらでお待ちくださいませ」

「困つたね、わしもあんな男の傍で待つてゐるのはかなはんど」

「ほんとですわ……」

康子も吐き出すやうに言つた。

石黒は、こゝで一時間半ばかり待つて、十一時に出發する上海行の旅客機に乗り換へるのだつた。

「それぢや、荷物は、お前受取つてくれ。俺達は車の中で待つてゐるから」

忠雄はかう言つて、待合室の入口に待たせた自家用のキヤデラツクの方へ歩き出した。

そして、康子を中央に、英二の三人が、車中のクツシヨンに腰を下ろすと、
「休みは一週間だつたね」

忠雄が言った。

「實は、昨夜も、その一週間の何ういふ日程で見物すれば一ばん効果的か、いろいろ研究してみたんだが、あんたは、別府も、雲仙も初めてだらうな」

康子に訊ねたが、彼女は、すぐ、

「あの私、少しあちらに用事がございますので、今度は伯父様をお見舞ひしましたら、飛行機の席が
あり次第、すぐにも歸りたいと思つてをります。今すぐに申込めば、明日の席の都合がつかますか
しら」

「そんなに急な用事があるのかい」

忠雄は、がっかりしたやうに、英二の方を顧みた。

英二は困つて、

「いや、別に、僕は急がないんですが、康子が、何か、上高地の方へ行きたいと言ふんですよ」

「上高地……上高地なら、東京からは直ぐだから、何も、そんなに慌てなくても、いつでも遊びに行けるぢやないか。ねえ。折角来たんだから、福岡、博多の市中や郊外の名所や舊蹟もゆつくり見物して、別府、雲仙、何なら序でに、長崎の街なども見物して歸りなさい。なア、英二」

「僕も、さう思つてゐるんですけど……」

ちらと、康子の顔を見たが、康子は、自分の意志を庇つてくれない、英二の期待を恨むやうに睨んでみせた。忠雄は、そんなことには氣づかず、

「それに、うちの鑛山も、いづれは英二も經營の責任に當るんだから、康子にも、一應見ておいて貰ひたいぢやないか。父も、そのつもりで、鑛山の方や、別府の龜の井旅館などへ、今朝もしきりに電話をかけさせてゐたよ」

「でも、私、困つたわ、お従兄さん」

いかにも當惑さうに康子が遮つた。

「さうかね……」

さすがに忠雄も顔を曇らせて、英二の方を振り返つた。

「お前も、こゝまで一緒に来るのなら、それくらゐの心つもりをしておいて、康子にも差支へのないやうにしてくればいゝのに、伯父さんだつて、がっかりなさるよ」

びりつと、康子に響くやうな、辛い皮肉を洩らした。そして、

「俺達が行して氣兼ねなら、二人きりで行けばいゝぢやないか」

英二も、中に入つて、返答のしようがなく、

「何うだ、折角あんなに仰有るんだよ」

康子に言ったが、

「でも、私、お約束したんですもの」

ふんと膨れてしまった。忠雄も、ちよつと呆れた様子だったが、そこへ若い者と運轉手が、荷物を
持つて駆けつけてきた。その時だ。

「ぢや、牧山君……」

突然、車窓へ近づいて、顔を覗かせた男がある。それは石黒だった。

「あら……」

康子は、飛上るやうな聲をかけたが、石黒は真剣な表情で、英二の方へ、

「それでは、こゝでお別れする。恐らく五年や、十年は會へないかも知れないが、どうぞしつかりや
つてくれ。僕も大陸で骨を埋める氣でやるから。君の健康を祈つてゐるよ」

それは以前の石黒と、すこしも變らない友情に充ちた態度だった。英二も、その、熱く潤んだ眼を
見ると、昔の懐しさをそゝられて、

「有難う……」

と、思はず進み寄り、窓の外へ片手を差伸べようとしたが、

「いけません……」

と、咄嗟に、その手を康子が遮つた。石黒は、それを見ると、

「ぢや、失禮……」

につこり笑つて一歩退がつた。

「では、出しますよ」

運轉手の聲に、車は走り出した。しかし、石黒は動かなかつた。そしていつまでも、炎天の下に立
つて、英二を送つてゐた。

「ふッ、今更あんなセンチなことを言つて妥協しようたつて、私は忘れないわ。さうでせう従兄さ
ん……」

康子は、同意を強ひるやうに、忠雄の方へ呼びかけた。英二は、この妻と替へるには、餘りにも惜
しい石黒の人物を偲んでゐた。

黄邦思大人

—

一方——

英二の車を見送つた石黒は、それから税關の檢閲を受けたり、持金の兩替をしたりして、暫くは時
を費したが、尙一時間餘りも、退屈なベンチで過した。

福岡飛行場を出発したのは所定の十一時をすこし廻つてからだつた。間もなく眼界一面は、たゞ海と空ばかりになり、やつと右手に濟州島を見る頃から、次第と、空の上下四方に、練絹のやうな雲影を加へてきた。それが、廣袤一碧の海上に、模様やうな斑らな陰影を散らし、下方の雲は、機上から見て、ほんの海面から一、二尺の上を掠めてゐるやうに、恐ろしく低く眺められるのも、初めて味はふ空の旅の珍らしい錯覚だつた。

午後二時、大場鎮の飛行場に着いたが、そこらは市中を遠く離れてゐるので、初渡航者の石黒にも上海らしい物の感じは、すこしも味はふことができなかった。

そこで、また一時間近くも待つて、南京行の機上に落着く頃には、空はますます曇り勝になつて、雲の隙間から見えつ隠れつする揚子江の大濁流の外は、初めて見る支那大陸らしい、心を惹くほどの景観にも接しなかつた。

しかし、それも暫らくで、再び雲が切れそめて附近の山や、かすかな日影などが見え出すと、

「さあ、南京ですよ。あれが、例の中山陵ですよ」

後方の客席で囁く聲がした。石黒はすぐ振返つて、客の指す向ふ側の窓に眼を放つた。そこには、窓外や、遙かに、既に寫眞などで馴染深い紫金山の高雅な姿が、薄日の下に柔かく盛上り、その中腹から山麓にかけて、近代風な白堊の樓門や、眞白い帯のやうな長い階段が、くつきり山の緑を區切つて清らかな偉觀を呈してゐる。

中山陵——石黒の心は激しく躍つたのである。彼は出發の前々夜にも、孫文亡命中の逸話についても、直接邦子の見聞した事をいろいろ興味深く聴かされてゐた。當時の孫文は、まだ時を得ぬ一介の青年政客だつた。その孫文が、今は早や、近代支那の生みの父として、あの帝王のそれにも勝る陵墓の中に眠つてゐるのだ。それは言ふまでもなく最近二、三十年間の支那の飛躍を物語るものでなくて何であらう。そして、その若い支那も、革命の成就するにつれて、自力を誤算し、他國の巧言に乗ぜられて、大東亞の平和をすら度外視するほど己惚れてきたのだ。その間、祖國日本の青年は、一體何をしてゐたのだ。日露の大捷に酔ひ、歐洲大戰の利得に麻痺して、徒らに逸樂の日を重ね、この隣國支那の動きすら、些かも眞剣に顧みなかつたのではないか！

「さうだ、今度の事變がなかつたら、日本は何處までも惰眠を食ひまた支那は革命の餘力に任せて何んな無軌道を駈け續けてゐたか知れないのだ。俺達の責務は、重しぞ！」

石黒は、心で強く叫んだ。

「さあ、着いた……」

客席のどよめきに、石黒が、我に返へると機體は既に飛行場に着いて、滑走を停止したところだつた。

石黒は、他の乗客達に交つてとにかくも地上に降り立つたがはたと迷つた。

そこには、二、三臺の自動車を見るきりで、それも定まつた客の出迎ひらしく、何う行けば、訪ね

る黄邦思の宿へ行くのか、まるで勝手のわからぬ異國の地上へ、突然天降つてきたやうな石黒は、さすがに暫く茫然として、廣々とした飛行場の一角に立ち迷つた。が彼は、間もなく何かの事務所らしいバラックの建物を見ると、そこで訊ねてみるつもりで、二、三步歩き出したが、その時、

「あゝ、もし……」
同乗してきた一人の紳士が、突然、背後から呼び止めた。

「……」

石黒が怪訝に振り返つてみると、
「失禮ですが、こちらは初めてのやうですが、どちらへいらつしやるおつもりですか」

紳士は、にこやかな微笑で訊ねた。四十二、三歳のがっちりした逞ましい體軀にリンネルの夏服とヘルメット帽が颯爽と似合つて、髭の美事な、色の淺黒い、微笑に綻びたふくよかな童眼には、何も言へぬ人懐っこさが溢れてゐたが、深い帽子の鍔から覗く濃い眉と輝く兩眼だけは、何か犯しがたい鋭さを示してゐた。石黒は、さうした男の威容に、ちらと一瞥を與へたが、
「中山路の興亞俱樂部へ行きたいと思つてゐます」
正直に答へたと、紳士は、

「ほう、それは偶然です。私もこれから興亞俱樂部へ歸るところですから、一緒にお送りして差上げませう」

「さうですか」

「どうぞ……」

紳士は、すぐ先に立つて、傍に待たせた自動車に近づき、

「さあ……」

石黒に乗車をすゝめた。石黒は、初めての南京でもあり、餘りに偶然に行方の一致した、しかも馴馴しい、不思議な紳士の好意に、いくらか疑問を感じながらも思ひ切つて、

「ぢや、お言葉に甘えますから、どうぞ、あなたから……」

「さうですか、では……」

紳士は、ドアを引いて先に乗つた。續いて石黒が並んで腰を下すと、車は、すぐ、前方に見える城壁の方へ走り出した。

生々しい砲彈の跡をとどめて、無残に壊れた城門の通路には、まだ頑丈な木柵が残つて、歩哨す兵士が、往復の車を、嚴重に見守つてゐる光景なども、すべて、戦後らしい緊迫した空氣で、石黒の心を引緊めた。

「やはり東京からお越しですか」

車が城門を通過して、次第に賑やかな街の方へ入つてゆくと、紳士は、石黒の足許に置いたトランクを見て、振返つた。

「はア、あなたもやはり内地から？」
石黒が訊ねると、

「いや、私は、ずっと南京にゐるものです。ちよつと上海へ用事がありまして、その歸りですよ」
紳士は答へたが、

「いかゞです。内地の銃後生活には、いろ／＼面白からぬ噂も聞きますが大丈夫ですかね」
「大丈夫ですよ……それは恐らく二、三の例外が、多少誇張されて、傳はつてきてゐるのでせうが、全般の國民は非常に張切つてゐて、いかなる不自由と闘つても、事變の目的を完遂せずには、置かない熱意に燃えてゐます」

石黒は、一部の不正實業家、商人、有閑婦人や、職工、學生達の、可成り鞏固すべき見聞には接してゐたが、南京といふ土地柄も考へて、昂然として、かう答へた。

「さうですか……いや、それを承はつて安心しました」

紳士は、にやり微笑みながらも、刺すやうな眼で、じろりと石黒を眺めると、

「失禮ですが、南京へは、何か會社の用務でも？」

「いや、實は微力な人間ですが、日支兩國の新しい提携のために、こちらで骨を埋める覺悟でまゐりました」
凜として言放つた。

「ほう、それは……」

紳士も、につこり笑つたが、間もなく、びたりと車が停まつた。

「さあ、参りましたよ」

紳士は立ち上りながら、石黒に告げた。車は大きい商舖が軒を並べた股販街を曲つて、いつしか諸官衙らしい建物の並んだ大通へ出てゐた。そこには赤煉瓦造りの宏壯な三階建の洋館が聳えて、豪華な玄關が、彼を待つてゐた。

「こんな處に人が住んでゐるのだらうか」

石黒は、役所か大會社のやうな、その建物を不審に眺めながら、車を降りると、紳士は、先に立つて、二、三步、玄關の石段を上つたが、急に歩を停めて、

「失禮ですが、誰方を訪ねていらしたのです」

石黒に訊ねた。

「黄邦思さんといふ方ですが……」

「黄邦思！」

紳士は、瞬間、軽い驚きの表情で、石黒の顔を見守つたが、

「さうですか……私が、その黄邦思ですか」

「えッ……」

石黒は、相手の凛とした偉容や、また流暢な日本語に、今の今まで日本人とのみ思込んでゐた紳士が、自分の訪ねる黄邦思と知ると、驚かすにゐられなかつた。

黄邦思——だが、しかしこの男が、あの邦子の良人であり、暁子の父楊大偉であらうとは、石黒も何うして想像することができよう。彼はたゞ大木將軍と相知るこの男に訊けば、或は、暁子の父の名も、所在も捜り出せるだらうかと、いつかも暁子に話したことであつた。

黄邦思は、さうした石黒の驚きを、瞬間、捜るやうな眼で凝視してゐたが、

「しかし、あなたは、この南京にも、澤山な御同胞がゐられるのに、言はゞ日影者の私を、どうして殊更選んで訪ねていらしたのです」

怪訝な顔で訊ねた。

「實は大木閣下から、特に御紹介状をいたゞいてきましたのです」

「大木閣下から……」

黄邦思も、ちよつと意外な表情で、石黒がポケットから出して示した、紹介状を受取つて、封筒を返してみたが、

「いや、わかりました。さあどうぞ……」

再び、につこりすると、中央階段の傍に立つてゐる護衛らしい二人の巨漢の敬禮に答へて、すたすた先になつて階段に上つていつた。そして、

「實は、この建物は、蔣政府時代には、外交クラブになつてゐまして、歐米方面から来る國賓格の人物は、皆こゝへ泊めて優遇してゐたのですが、今では、ある運動の本部になつてゐましてね、私がかゝる此處にゐることすら、世間へは秘密になつてゐるのです。だから、あなたが、此家へ私を訪ねていらしたのが、實は不思議に思つたものですから、玄關先で失禮なことをお訊きして、飛んだ非禮を致しました」

「いゝえ、とんでもないことです」

石黒は、さつき階段口でみた、警護の巨漢の屈強な相貌を描いて、黄邦思の語る説明と思ひ比べ、今自分のゐるところが、この南京でも、どんなに重要な秘密境であるかと思つて、ます／＼心の緊張を覺えずにゐられなかつた。

「暫くお待ちください……」

黄は、三階へ上ると、左に折れ、長い廊下の突當りにある一室の前に立つと、かう言つて、ポケットから出した鍵でドアを開き、

「さあ、どうぞ……」

と、石黒を室内に招じた。

室は、日本のホテルにも稀らしいほど、立派な調度に輝いて、豪華なカーテンを絞つた窓からは、附近の市街と木立の繁みが、暑さうに照りつける西日に燃えて、機上で見た紫金山の雅姿が、夕暮近い澄みきつた蒼空に、なだらかな線の稜線を浮かべてゐた。

「さあ、お掛けなさい」

黄邦思は、石黒に椅子をすゝめ卓に向ひ會ふと、

「ちよつと失禮します」

かう言つて、先刻石黒の手から渡された大木將軍の添書を取出して讀んだ。そして鄭重に、封筒に收めると、

「よくいらつしやいました。石黒雄吉さんと仰有るのですね」

「はい、突然、御厄介をお願ひに上りました」

「いゝえ、閣下のお手紙であらまはしは判りました。よく御決心くださいました」

黄邦思は、につこりと、その精悍な顔に、人懐こい微笑を湛へたが、

「學校は早稻田の御出身ださうですね……私達の同志の中にもお國へ留學中、早稻田で學んだ者も可成りありますよ」

「全く大陸の様子は、何もわからないのですが、どうぞよろしくお引廻しを願ひます」

石黒は、改めて慇懃に頭を下げた。

「では、別に、これといつて、御希望のお仕事も、また他に、御相談をなさる先輩知己の方も、こちらには全然いらつしやらないんですね」

黄邦思は、何故か念を押すやうに訊いた。

「はい、何もございません……たゞ、この一命を興亞の大業の一つの捨石に使つていただけば――さう申しまして大木閣下に、萬事をお任せしたのでございます」

「それで、こんなお手紙をつけて、私の許へお差向けくださつたのですね」

黄邦思は、やゝ會心の笑みに似たにこやかな微笑で、石黒の豊かな體軀を頼もしさうに見守つた。

「何分、よろしくお願ひ申し上げます」

「お引受けいたしました……」

黄邦思は、言下に、はつきり答へたが、

「そこで、もう一つお訊ねしますが、あなたは大木將軍と、何ういふ動機からお知合ひになられたのですか」

「たつた一度の御面識です。それもつい最近で、御紹介の手紙も、その時にいただいたのです」

「ほう……」

黄邦思も、さすがに意外の面持で、石黒の顔を凝視した。石黒は續けて、

「その動機も、極く單純で、私の古い知合ひの人で、江島邦子さんといふ御婦人があります」

言ひも終らず、

『江島邦子……』

黄邦思の顔は、さつと色めいた。しかし、それが邦子の良人、暉子の父であらうとは想像もしない石黒の眼には映らう筈がなかつた。

『その方の一身上に關すること、ちよつと閣下に伺ひたいことがあつて、お訪ねしたのです。それが動機で、不肖な私のやうなものを、即座に御信頼くだすつたやうな譯で、全く感激に堪へない次第であります』

『なるほど……』

黄邦思は、唸るやうに言つたが、暫くして、

『そこで、甚だ立入つたことを伺ひますが……只今仰有つた御婦人といふのは、あなたと何ういふ御關係のお知合ですか』

かう言つて訊ねたその暉は、熱く燃えてゐた。

『それはかういふ譯です。私の伯父に醫者がありまして、小さな病院を経営してゐます。江島さんは、もう長らく、その病院で看護婦長をなすつてゐられます。そんな關係で、いつともなく私も顔馴染になりましたところへ、ちやうど私の友人が、地方から上京して高等學校へ入りました。その男が、大へん潔癖な男で、アパートだとか商賣下宿だとか、さうした家に住むのを嫌ひまして、

なるだけ眞面目な家庭の一室を借りてみつちり勉強したいと申しますので、江島さんに心當りを尋ねましたら、ちやうどその方のお宅もお嬢さんを女學校へお出しになるので、いくらか生活の負擔も軽くなるから、間違ひのない立派な方なら、お世話させて頂きたいといふことで、その友人を世話しました。そんな關係で、私も始終友人を訪ねるうちに、江島さんとも、すつかり懇意になりました。それが意外にも、今度かうして、支那で一生を過さうと決心する動機になつたやうな次第です』

『なるほど……それで、その方が、大木將軍を御存知だつたといふ譯ですね』

『さうでございます。江島さんは、貞淑を誇る日本婦人の中でも、わけて、稀らしい貞淑な方でありまして、母としても、その強さ、優しさ、大木將軍ほどの方が、口を極めて稱揚してゐられる婦人でございます』

『なるほどね……』

黄邦思の感嘆の聲は、熱い溜息のやうに震へた。そして、

『それぢや、その御婦人には、お連合はゐられないんですね』

『今から二十年前に、別れたきり消息がないさうでございます……さうです。その方の御主人様も、實は中國の方なんださうですが……』

石黒は、そこまで言ふと、何か思付いた風で黄邦思の顔を見た。

『そこで、私も、支那で働く間に、できれば餘暇を利用して、その御主人の所在を捜して上げたいと

思つてゐるんです。何でもその頃、日本に亡命してゐた中國の若い志士ださうです。大木將軍のお話では、現に今でも健在ださうですが、名利を喜ばぬその方は、今も時局の底流に潜んで、新東亞の建設のために、何か重大な運動をしてゐられるらしいのです。さういふ意味で、閣下も江島さんも、その名前だけは明かしてくれませんでした」

「さうですか。いや、初めて伺ふ面白いお話です」

黄邦思は、興味深さうに、につこり笑顔を作つてみせた。

「しかし、その御婦人は、夫君を訪ねて、こちらへ来るほどの意向はもつちやゐらないのですか」

他人事のやうに訊ねたが、その眼は熱い詮索の色に燃えてゐた。

「いや、お嬢さんは一日も早く支那へ渡つてお父さんを捜し、自分の體内に融合する日支の血を傾けて、東亞協同の理想に身を捧げたいと望んでゐられますが、お母様の方が、急ぐことはありません、母さんにはいつでも、それだけの覺悟と準備はありますから、時期がくれば必ず行きませう。しかし今はその時期ぢやありません——さう申して落着いてゐられます」

「なるほど……いや、なか／＼興味深いお話でした……」

黄邦思は、話を打切るやうに言ふと、

「では、あなたのお體軀は、この黄邦思がお預りしますよ」

かう言つて、立ち上ると、つか／＼と近づいて、石黒の手を握りしめた。その手は熱く顫へてさへ

ゐた。

亂 雲

それから、四、五日目の朝——

英二は、一人で寂しく東京へ歸つてきた。

本来ならば牧山家でも、新婦康子の初の訪問なので、英二の休暇の許す限り夫婦を留めて、附近の名所舊跡はもとより、重だつた鑛山にも案内して、牧山資本の盛觀も見せて置くつもりで、最大限度の歡待準備を整へてゐたのであるが、肝腎な康子が博多へ着くときからもう歸りを急いで蓮藏翁との初對面の挨拶も済むか濟まない間に、明日の飛行機のことなどいひ出し、誰が何と引留めても諾かないで、周囲の好意を蹴散らすやうに、翌朝の旅客機で歸京してしまつたのだつた。

「何か、機嫌でも損ねてゐたのか」

さすがに忠雄も眉を擡めて呆れたやうに英二に訊ねた。

「これで大抵、おわかりになつたでせう」

英二は冷やかな苦笑で答へた。彼はあの夜の康子の口吻で、かうなる結果を豫想しながら、それを

博多の連中に見せておいて、一切を處断する覺悟の上、康子を伴つてきたのであつた。忠雄は、怪訝

に、
「上高地で待つてゐる友達といふのは、同窓生か、何か、ね」

「さあ、よくは知りませんがね」

「どんな親しい友人にしろ、こちらは初めて訪ねる良人の實家だよ。親爺の手前だけでも、三日や四日は落着いてゐるのが道ぢやないか。おまけに、一緒にきた良人のお前まで打つちやつて、一體、上高地に、何があるといふんだね」

「それぢや、申しませうか」

「言つてみるよ。わしも一應は聽いておかんと……」

「あれを待つてゐる男がゐるんですよ」

「男？……ほんたうか」

忠雄は、思はず聲を弾ませた。

「あれの實家の親戚の者で、パリ邊をうろつてきた繪描きですがね、一緒に上高地へ行つてモデルになつて描いてもらふんださうですよ」

「馬鹿な！……それをお前も、黙つて許したのか」

「許すも、許さんも、實家の兩親が許したといつて諾かないんですから……また、たとへ僕が喧しく

言つて止めることが出来たにしろです。一旦男とさういふ約束をして、あれほど熱中してゐる女を、傍に引止めて置いてもつまらないぢやないですか」

「それもさうだが、しかし……」

「とにかく、みんなが僕を信じないで、立野に一ぱい食はされたのですよ。既に實物は御覽の通りで康子といふ女の性格は、僕は、知り抜いでゐたんですから……」

忠雄も困つて、

「まあ、さういはれると、俺も返事のしようがないが、しかし、お前が主張した支那人の娘でも困るからのう……」

英二は、瞬間、羽田の飛行場で出會つた瞳子のつゝましやかな姿を、失つた寶石のやうに思ひ返すのだった。

「とにかく、歸京した上で、僕も決斷をいたしますから、今度はもう何といつてきても、立野の口に乘らないで下さい」

英二は、吐き出すやうにいつて念を押した。そして、三日ばかり博多に滞在して歸京したのであつた。

「奥さんは？」

英二は、家へ歸り着くと、不在と知り乍ら女中のお仲に訊いた。

「はい、お里の奥様と御一緒に、信州の方へお出でになりましたが……」

「お母さんと一緒に？」

英二は、不審に問返した。

「はい、御一緒にでございますよ」

康子最負のお仲は、

「それなら文句はないでせう」

といった風な、小馬鹿にした薄笑ひで答へた。

「ふん、一つ穴の狐が、何を言ふかわかるものか」

英二は、さう考へながら、一人で自室に落着いたが、康子のぬない家の中は、沙漠のやうに寂しかった。

その晩、英二は、一人で家に寝たが、男と二人で旅に出てゐる康子を思ふと、さすが、眠れなかつた。電燈を消した暗の中から、ホテルの一室を背景に、あの生白い晴彦の顔と、康子の艶やかな媚笑とが、妖しい雲のやうに入り亂れて、英二の心を掻き立て、止まなかつた。

英二は、寝苦しい、一夜を明かすと、早速旅の用意をした。

「しかし、待てよ」

彼は考へた。果して二人は、上高地にゐるのだらうか？……もし二人に、深い思惑があれば、あれ

ほど豫告しておいた上高地へは、正直に行つてゐない筈である——。

英二は、そつと康子の居室へ入つて、彼女の机の抽斗から、本の間、紙屑籠——手あたり次第に調べてみたが、二人の旅先を暗示するやうな物がかりになるものは、何一つ見出せなかつた。

「うっかり上高地まで、だまされて行つてもつまらないし……」

英二は、仕方なく茶の間に坐つたまゝ、ぼんやり煙草をくゆらしてゐた。

すると、そこへ、廊下の方から電話の呼鈴が、けたましく響いてきた。お仲は臺所で働いてゐたが、相手が英二だと思つて替つてゐるのか、電話の方へは見向かうともしなかつた。英二はむつとしながらも、仕方なく立ち上つて室を出た。

「もし……」

受話機を外して呼びかけると、

「大下さんですか」

女の聲が訊ねた。

「違ひます、牧山ですよ」

「あら、芝の×××番ぢやございません？」

「いゝえ、こちらは遊谷ですよ」

英二が邪慳に受話機を掛けたその時だ。

「おや……」

英二は、電話機の傍にかゝつたメモの黒板に残る不思議な文字が眼についた。ガマゴホリ三二―黒板の片隅に走り書したチョトクの跡に、英二の眼が烙きつけられた。

「ガマゴホリ三二……康子の筆蹟だ……」

英二は、深く背くと、まだ博多から歸つたまゝになつてゐるトランクを引寄せて開いた。そして旅行案内を取出すと、急がしく、最後の旅館案内のところを繰つた。

「やつぱりさうだ。蒲郡ホテルだ！ とんでもないところへ、方向をくらましやがつた」

英二は、怒りに狂ひさうな胸を制しながら、朝飯を済ますと、お仲に、

「僕も、これから奥さんのゐるところへ行つてくるが、たしかに信州の上高地ホテルだね」

わざととぼけて訊ねてみた。

「はア、たしかにさうと承つてゐますが」

「ぢや、今からすぐに出かけるから、後をたのむよ」

「承知いたしました」

平氣で答へたお仲の顔が、英二には、ペロツと舌でも出しさうに見えた。

二

英二はその日、午後一時三十分東京驛發の東海道線下り急行で蒲郡へ急いだ。

近頃は二等車も溢れるやうな満員で、日中の車内は、蒸れるやうな暑さだつた。福岡―東京間を三時間で一気に翔破する空の旅から歸つた英二は、急行列車の速度までが、何かのろくさくて仕方がなかつた。まして、自分を欺いて、人知れず海邊のホテルの一室に、誰憚らず寛ぎ合つてゐる康子と晴彦の姿を浮べると、英二は狂ほしいほどの焦慮に驅られて、列車の進行が一層もどかしかつた。

やつと六時過ぎに、豊橋に着き、そこで下車して半時間餘りも、寂しくホームで待たされ、普通列車に乗り換へて、蒲郡に着いた時には、山も海も蒼茫とした暮色に包まれて、殿堂のやうな丘上のホテルの窓々には、美しい灯影が煌めいてゐた。

英二は、玄關前で車を降りると、思はず、二階の窓の灯を仰いだ。そして、二、三步、玄關へ入つてゆくと、

「いらつしやいませ……」

美しい女中が近づいてきた。

「誰方様でございませう」

「何んな部屋でもいゝんだが、空いてゐないかね」

「あの御申込みがございませんと、夏場のごとで、いかゞでございませうか……」

女は、帳場の方へ近づいて、何か二言三言、事務員らしい男と囁き合つてゐたが、

「誠に申兼ねますが、生憎、すつと満員でございますが」
氣の毒さうに答へた。

「それは困つたな……」

英二は、ちよつと戸迷つたが、

「それちや、つい二、三日前から平瀬晴彦といふお客が見えてゐる筈だが……」
帳場の男に訊ねてみた。

「平瀬さんですね……」

事務員は、ちよつと宿帳を繰つてゐたが、

「はい、いらつしやいます……」

「ちや、そのお部屋へ案内してもらへないか」

事務員は、怪訝に英二を見たが、

「あなた様のお名前は？」

「僕かね……」

英二は、咄嗟の返事に困つたが、すぐ、

「東京から室井の使が見えたといつてくれたまへ」
康子の實家の名を告げた。

「ちよつとお待ちくださいませ……」

事務員は、女中に命じて、あかあかと装飾燈の光りが溢れた玄關脇のロビーへ、英二を案内した。

英二は、わざと中央の階段や、エレヴェーターの降口から見透されぬやうに、圓柱の蔭に小さく身を縮めてゐた。

間もなく、エレヴェーターの昇降口が、さつと開いた。

「……」

英二の眼は焰を包んで、焼きつくやうに昇降口に注がれた。

その瞬間――

浴衣にくつろいだ、晴彦の長身と、その蔭に寄りそふやうにして康子の若やいだ着物の姿とが、連れ合ふやうにして吐き出されてきた。

「何處にゐるんでせう……」

二人は、すぐにロビーの方を見て囁きながら入つて來た。英二は全身が顫ひ立つやうな、嫉妬と憤りを懸命に押へて、

騒いではならない……」

と、自分に言ひきかされると、

「こゝだよ……」

にやりと、二人の前へ立ち上つて行つた。

「あッ……」

さすがに康子も晴彦も、色を變へて立ちつくした。

「上高地かと思つてゐたら、とんでもない處へ方向轉換だね……」

英二は、調戲ふやうに笑つたが、その顔色は激怒に蒼ざめ、憤りに燃える火のやうな瞳は、恐ろしくと狼狽に迷ふ二人の顔を射すくめるやうに見据ゑてゐた。そして、

「さあ、部屋へ案内したまへ……」

晴彦の手を取つて、促しながら、じろりと康子を見て、つかつか先に歩き出したが、その時である。

「あなた……」

初めて、康子が、後から呼びかけた。

「何だ……」

「私の部屋へいつでも案内いたします。しかしその前にお訊ねしたいことがございます……」

突然、猫に喰ひかゝる窮鼠のやうな必死の表情で、康子が、英二を睨んだ。英二も爆發しやうな怒りを押へて、

「何を訊ねようといふんだね」

英二の唇もわな／＼顫へた。

「私を訪ねていらつしやるのに、良人なら、何故良人らしく、堂々と名前を仰有つて取次がせませんの……まるで刑事か何かのやうなさういふ態度を改めていただきます」

「お前にそんなことを言ふ権利がどこにあるんだ」

「何ですつて」

「この態は何だ。これが貞淑な妻の行爲かね」

「それはあなたの御觀察次第でございます……」

「何？……」

康子はもう捨鉢で、太々しく英二に逆襲した。英二は、もう應酬の餘裕もない。怒りと嫉みに混亂して、言葉もなく拳を顫はせた。

「御用がございましたら、改めて、本名を名乗つて、取次がせていらつしやい……私達は、そんな卑劣な手段で探られるほど疚ましいことはしてゐませんわ。……部屋も別々でございますし、ただ繪を書いていたゞいてゐるきりでございますわ、帳場でお調べくださいませ……」

「さうか……それなら勝手にするがよい」

英二は、ほつと息づく、顫へる兩の拳をポケットに入れて、吐き出すやうに言つた。

秋更けて

それから、一年半の月日が、水のやうに流れ去つた。年も明けて、秋も深くなつてゐた。

けれども、血の祕密に呪はれた、暁子には熟する縁談もなく、よしまた話があつたにしろ、英二の時に懲り果てた母娘は、いづれも態よく断り通して、二人の上には、今年の秋も、佗しく暮れようとしてゐるのである。

殊に、不思議なのは、あれほど約束して出かけた石黒までが、何うした譯か、南京へ着いたとも訪ねる人に會つたとも、あれきり何の音沙汰もないのであつた。

東京を出發した翌朝、たつた一枚、上海飛行場から出した飛行便の繪ハガキだけが届いた。

今朝は、わざ／＼羽田までお見送りいたゞき、何彼と厚き御懇情の段、永久に銘じて忘れません。只今渺茫果てしなき、東支那海の眞つ只中、二千メートルの上空で、遙かに思ひは雲に馳せて、このハガキを認めてゐます。感慨何に譬へませう。一日も早く目的の基地に辿つて、御來支の日を樂しみに暮すのみでございます。どうぞ御機嫌よく。

機上にて

石黒生

と、溢れるやうな交情を盛つた、石黒らしい感激に充ちたものだつた。

ところが、このハガキが最後で、その後一年半、生きてゐるのか、それとも何うしたか、一本の手紙も來ないのである。

「ほんとに、何うなすつたのでせう」

「可訝しいわね」

「何か間違ひでもあつたのぢやないでせうか。随分今でも、便衣隊などが入り込んでゐて、テロが横行してゐるんぢやありませんか？」

暁子は美しい眉をひそめて、心配さうに訊ねた。

「だつて、もう南京は、すつかり治まつてゐる筈ですよ」

「でも、あれきりお便りが無いのを見ると、心配ですわ。ねえ、お母さん、その黄邦思つて方、間違ひのない方でせうか」

「まあ……」

邦子は、懐しい良人の別名に思はず聲を弾ませるのであつた。しかし、何か、これには譯があるにちがひない——邦子は、大木將軍の、いつかの言葉を思ひ出して石黒の現状も想像はされるのだが、それはまだ暁子に打明けて語る時期でないことを、これも大木將軍の言葉から察して、口を噤んでゐ

るほかはなかつた。

「こんなにお便りが無いなんて、どうせ無事ではいらつしやらないのよ」
 暁子のいぢらしい溜息が、邦子の胸を刺すやうに響くこともあつた。
 しかし、それも、半年あまりで、この正月あたりからは、暁子も遂に諦めたのか、石黒の噂も餘り出さなくなつた。そして、

「ねえ、お母さん、どうせ私一生獨立して行くのでしたら、お母さんのやうに看護婦さんでも覺えて一生を不幸な病人のためにささげたいと思ひますの」
 去年の暮頃から、暁子がしきりに言ひ出した。

「あんたは、そんな心配しないで、お嬢さんらしくして、お嫁入りの支度をすればいいのよ」
 前にはかう言つて、娘の嫁ぐ日を、楽しみ暮してゐた邦子ではあつたが、今はそれさへ叶はぬ望みと諦めて、暁子の望み通り、この四月から、東京看護婦學校へ通はせてゐた。

その晩、柏木博士の衛生學の講義が終つて、暁子が、神田の學校を出たのは午後九時をすこし廻つたばかりの時刻だつた。

夜の大通りには冬近い風が流れて、店舗の灯影も何かしら、晩秋らしい佗びしさに沈んで見えてゐた。

「さやうなら」

「また、明日ね」

愆意になつた四、五人の級友と神保町の交叉點までくると、そこから四方に別れる友達を送り、暁子は、たうとう最後になつて、青山遊谷行の電車を迎へた。

車内は、殆ど満員で、暁子は、後部の車掌臺の方から乗り込み、車内へ二、三步入つた時だつた。

「おや、おかけなさい……」

斜め後方の座席から、暁子の顔をじろく眺めてゐた若い紳士が突然立上りさま、物懐しげに暁子に呼びかけた。暁子は何氣なく振返つたが、

「あら……」

思はず進む驚きの聲に、われから顔を赧くした。

その紳士は思ひもかけぬ牧山英二だつたからだ。

「さあ、どうぞ……全くおめづらしいですね。どうぞ……」

英二も、いくらか照れながらも、かう言つて頻りに座席をすゝめた。

「はあ、あの……」

暁子は、しばらくためらつたが、周囲の人も考へて、そのまま、

「済みません」

と、簡単に、座席についた。が、英二は、すぐ傍の吊革を握つて、暁子の眼前に立ち、

「ほんとに、お久し振りでしたね。お母様も、その後お變りもなく……」
 馴れ／＼しく話しかけてきた。

「はい……」

「一度、あの節のお詫びに上らうと思ひながら、失禮ばかりしてゐまして……」
 「いゝえ……」

「やはり、澁谷の、以前のお家ですか」

「はい……」

「暁子は、英一から訊かれるだけを簡単な言葉で受け流してゐたが、この一言への返事だけは、
 「まだお嫁にも行かないのだらう」

と搜られてゐるやうな氣持がして、ぐつと熱く胸に詰つた。が、英二はなほも續けて、

「石黒君は、あれからずつと、まだ支那の方ですか」

「はあ、あの……」

「暁子は、そこでも返事につまつたが、
 「始終便りはありませんか」

「……」

「暁子は、もう答へる氣がしなかつた。石黒さんが支那にゐようとゐまいと、自分がまだ澁谷にゐよ

うと、何處にゐようと、この人に何の係りがあるだらう——。

「暁子は、次の停留所でこの電車を降りてしまはうと思ひ、窓の外を顧みると、ちやうど電車は、閑
 院宮邸前から赤坂見附の方へ坂を下り、停車するところだつた。
 暁子はそれを見ると、

「あの、有難うございました」

冷やかに言つて座席を立つた。

英二は、それを見て、

「おやお降りですか……」

驚いて訊ねた。

「はい、ちよつと……」

「暁子は、冷たく言ひ残したまゝ急いで、車掌臺の方へ出た。すると英二も、

「それぢや、僕も、こゝで降りませう……」
 慌て、暁子の後に従つた。

「ぶツ……」

「英二のその泡食つた後姿に、一人の客が吹出すと、どつと周囲の客が笑ひ出した。
 「お降りですか」

暁子を降ろして、信號のベルの紐をもつた車掌も、

「お早く願ひます」

と、毒づくやうに言った。

その時、暁子は、安全地帯に立つたまゝ、ちよつと行手の方向に迷つたが、後から降りてくる英二の氣配を感じると、すぐ、當てもなく薄暗い三叉路の廣場を、ずんずん濠端の方へ歩いた。

「もし、暁子さん……」

その後から、英二が、呼びかけながら、近づいて来た。

「……………」

暁子は、思ひ出しても顛へさうになるほど、口惜しい去年のことを思ひ泛べ、燃え立つ憤りをこらへながら、返事もせずにしたすた歩いた。

「どうしました。暁子さん……」

英二は、追ひ続けるやうに近づいてくると、

「ねえ、これから、どちらか、お立寄りですか……」

横から暁子の顔を覗いた。しかし、暁子は答へないで、きつと唇を結んだまゝ、前方の夜空に黒々と擴がる木立の一點を見つめて歩いた。その蒼ざめた怒りの表情は、秋の夜の街燈の冷たいほの明りに、凄じばかりの美しさに冴えて、一旦失つた男の心を、掻き立てるやうな後悔に疼かせるのだつ

た。

「暁子さん……」

焦立たしげに英二の聲は熱情に震へてゐた。

「……………」

「何うしたのです。暁子さん……僕が、あんな失禮なことをしたので、まだ、怒つていらつしやるんですか……」

「……………」

「いや、勿論、それは當然なことではどんなお咎めに對しても、僕は最早やあなたに對して何等辯解する資格のない人間です。……しかし、僕は一口だけ、あなたに聞いていたどきたいことがあつて今日まであなたにお目にかゝる機会を、どんなに憧れ求めてゐたでせう。……僕は、それさへ聞いていただけば他に何の望みもないので、何の面目あつて再び、あなたの、愛情を求める勇氣がありません。ねえ、暁子さん、僕のこの心中にわだかまる苦しい告白を、せめて、一言でも、聞いていただけないでせうか」

英二は、訴へるやうに言つて、ちらと、反應を探るやうに、暁子の顔を覗き上げた。

「いかゞでせう、そこまで歩きながらでも、僕の話をお聞き願へませんか」
しかし、暁子は見向きもせずに、

「存じません……」
水のやうな一言を浴せた。

二

英二は、はつと弾かれたやうに立ちつくした。が、すぐ續けて、
「有難うございます。その一言でもあなたのお返辭を聞いたことは、僕として何といふ幸福でせう……それぢや、曄子さん……せめて次の停留所まででも結構です。僕がこれから語らうとする告白だけを黙つて聞いてくださいませんか。それを、あなたが、空吹く風とお聞流しにならうと、また、愚かな懺悔とお笑ひにならうと、それを兎に角お願ひのできる僕でないことも、よく承知してゐます。ただ、あなたの前に涙を垂れて、懺悔さへできれば、結果はどうあらうと、僕の心の苦しみは薄らぐのです」

「……………」

「曄子さん……」

英二の聲が熱情につまつたと思ふと、

「あなたを欺いた僕は、あれからものの三月とたないうちに、見事に妻に欺かれて、逃げられてしまつたのですよ」

「……………」
瞬間、曄子も、はつとして危ふく滑り出さうとした驚きの聲をぐつと咄嗟の思ひで堪へた。しかし石黒の出發する朝、あの誇らかに肩を並べて、今こゝにゐる英二とともに、颯爽として旅客機の中に消えた、康子の姿を、曄子は、思はず心に描いたのであつた。英二は、そこでも、曄子の表情に現はれる自分の言葉の反應を探ぐるやうに見たが、塑像のやうに動かない相手の顔色を見て、軽い吐息をついた。そして、

「あれは、去年の七月下旬でした。羽田の飛行場で私達は、偶然、石黒を見送つていらしたあなたの方のお目にかゝりましたね……實は、もうあの時から、康子の心は僕から離れてゐたのです……勿論、それは自業自得で、誰を恨む筋合もありませんが、しかし、僕は、僕として、今尙遺憾に堪へなかつたのは、あなたを芝のアパートにお待ちしてゐたあの最後の日の成行です。これは、恐らくあなたもまだ、御存知ないことと思ひます。僕はあの日に決心して、すつかり旅の準備も整へ、お約束の午後一時から、一時間も遅くまで、獨りで待ち兼ねてゐたのです。そこへ誰が訪ねて來たと思ひます折もあらうに九州の従兄が來たのですよ」

「僕は、こゝで一口だけ、僕の愚痴を許していただければ、これだけ申し上げたいのです。曄子さん、もしあなたが、その五分前にでも、あのアパートへお見えになつてゐたら……」
英二が、そこまで言つた時だ。

「牧山さん……」

初めて、暁子が、英二の名を呼んだ。

「あなたは、たゞそれだけの理由で、あなたの行動が赦されるとお思ひになりますの」
「えッ……」

「あなたが、私をお捨てになつたのは、そんな偶然からではない筈です。いゝえ、たとへその時あなたは私と約束通り新京へ行つておましても、あなたは、私の身分をお聞きになれば、直ぐにも手の裏をお返しになる人だつたのです……」

暁子の言葉は刺すやうに、厳しく英二の胸に響いた。

が——英二は、すぐ、

「それは、先程も申したやうにあなたの御批判にお委せするのみです。或は僕といふ男は、さういふ意志の弱い人間かも知れません……しかし、僕の今夜の目的は、其後胸中に蟠まつてゐる悔恨や、愚痴を、かうして、あなたに聴いていただければ、それでいゝのです。それで、もう僕の心は満足してゐるのです……實は僕もこんなに憂鬱な記憶ばかりをとどめる東京には、住んでゐたくないのです。正直に申し上げますと、昨年の八月、康子と別れた直後から、早く大陸へ行つて、一切を清算して新生活に入りたいと、そればかり望んでゐるのです……それについて今も忘れないのは、福岡飛行場で別れた時の、石黒の懐かしい印象です……石黒からも、何かそのことについて、お手紙に書いてはなかつ

たでせうか」

「いゝえ、存じませんわ……」

暁子は、すげなく答へたが、あれきり行方も知れぬ石黒の噂に、何かかすかな期待をそそられて、次の英二の言葉が待たれた。

「さうですか……ぢや、もう少しですから、聴いていただきます。實はあの日も、羽田から福岡へ着くまで、石黒君と僕達とは、一つ座席の列を隔てたまゝ、まるで他人のやうに——いや、或は敵同志のやうな、険しい氣持で對峙し合つてゐた形でした。それから、福岡の飛行場につきましても、二人は尙ほ黙々として別れ、私達は出迎への従兄達と一緒に自動車に乗りまして、今しも出發しようとしたその時です……」

英二は、かう言つて、その時石黒が、突如、一切の蟠りをかなぐり捨ててゐるやうに、英二の車の窓へ駆けつけてきて、永別の握手を求めた時のことを、目に見るやうに詳しく暁子に告げた。

「全くその時は、僕も驚きましたよ……いや、僕ばかりでなく、康子や従兄などは、石黒が何を仕出かすかと、いささか怯え上つたくらゐですよ。何しろそれまで睨み合つてゐた相手が、突然車の窓へ駈寄つてきたんですからね、ところが、今言つたやうな譯でせう。僕は今もその時の石黒の言葉——それでは此處でお別れする。恐らく五年や十年は會へないかも知れん、どうぞしつかりやつてくれ——泌みんぐと言ひ残されたこの一言と、友情にうるんだその眼眸とは、恐らく生涯忘れることができ

ないでせう……やつぱり舊い友ほど有難いものはない、僕も何か胸の底から、熱くなるのを覺えずに
ゐられなかつたのです……」

英二の聲は、打濕つてゐた。暁子の眼にも、その人らしい石黒の姿がまざざと描かれて、それき
り今日まで音沙汰もない、その行方を悲しく思ひ遣られずにおられなかつた。

「僕が再び大陸へと思ひ立つたのは、實はその時からなのです。もう既にその時、康子の愛情にはす
つかり鯀が入つてゐまして、彼女の心の秘密まで、ほど察してゐた僕だけに、それほどの友を裏切つ
てまで、娶つた妻の價値の低さを顧みて、僕は涙もこぼれさうな深い寂しさを味はつたのでした。そ
して、いつそ、俺も妻と別れてあの石黒と一緒に——初めて僕の心がさういふ方向に動き出したので
す。それから間もなく、康子とも最後の日がやつてきました。再びもとの一人に還つた僕は、直ちに
支那行を決心したのです……」

英二は、そこで深い溜息をついたが、

「しかし、それまでに僕として、是非内地に果しておかなければならない二つの仕事があつたのです
それは他でもありません……」

かう云つて、ちらと、暁子を顧みた。

「一つは、かうして、一度あなたにお會ひして、心に蟠る一切の懺悔と、愚痴を聞いていただきた
いこと。今一つは、これもあなたにお目にかゝつて、石黒の所在を知りたかつたことす……これだ

け果せば、僕は、明日でも何の心置きなく、大陸へ飛んでゆけるのです……しかし、たゞ困つたこと
は、あなたにお目にかゝることです。今更僕がどうしておめく〜と澁谷のお宅を訪ねてゆけませう。
たうとう今日まで一年餘り、僕は内地に就職口も探さず、たゞかうした偶然の邂逅を心に祈りながら
待ち設けて暮してゐたのです……そして漸く今夜、今、かうして僕の希望は遂げられ、思ふ存分聽い
て頂けた譯で、これで僕も、この東京に心残りのない人間になつたのです……折角お急ぎのところを
いろ〜聞いていたゞいて有難うございました。どうぞお歸りになつたら、お母さんにもよろしく仰
有つてください……」

英二は、心からほつとしたやうに言つたが、何か自分でも胸の迫るやうな思ひだつた。暁子も、妙
に悲しい氣持になつたが、英二が続けて、

「そこで、ついでにお伺ひしたいのは、石黒の只今の住所です。支那の何處でせう。只今御記憶ござ
いませんか……」

暁子は、はつとして息を呑んだ。その石黒の居處さへわかれば、自分の周囲も何んなに賑やかであ
らう。訊ねたいのはむしろ暁子の方だつた。

「ねえ、僕の不信の罪は罪として、それくらゐ打明けていただけませんか。現に今も申上げたやうに
石黒は、僕のやうな不信な友に對して、まだ友情を捨てないでくれたのです。石黒に代つて教へてく
ださいませんか。それさへわかれば、僕は明日でも彼の後を追つて出發するつもりです。決して邪魔

などしませんよ。きつと昔の二人に返り、身を以て石黒の仕事を助けますよ……やはり今も南京ですか、何處です……」

石黒に對する英二の眞情は、曄子にも、一概に嘘とは思へなかつた。

「何うしました。詳細な御記憶がないのですか」

曄子も困つたが、正直に、

「私、存じ上げないのです……」

答へたが、

「御承知ない？ 冗談でせう……」

英二は、ほんとにしなかつた。そして、

「何故、それだけのことも打明けて、教へていただけないのです？」

恨めしげに曄子に訴へた。

「だつて……私……」

曄子の聲も顫へた。

「ほんとに存じ上げませんの」

「ほうたうですか……」

英二も怪訝に訊ねた。

「そんなこと、嘘など申しません。あの時、途中上海から、飛行便のハガキがまわりましたきり、南京へ着いたとも、つかないとも、それきりでございますわ……」

切なげに迫る曄子の言葉に英二も驚いて、

「そ、それは、眞實ですか」

「何うしたのでございますか、母も心配してゐますけど」

「をかしいですね……石黒に限つて、居を移したからとて音信を絶つやうな不信心な男ぢやありませんが、それは、何うした譯でせう？……」

英二の聲も弾んだ。

そこへ、飯田橋行の電車が、路面を顫はせて走り去つた。英二はそれを見ると、

「しかし、あなたも、お歸りをお急ぎでせう」

我に返つて言つたが、

「それぢや、僕、一日も早く、支那へ渡つて石黒の消息を探しませうか」

眞剣な表情で、曄子を見た。

「私達も、そればかり心配してゐますのですが、何しろ、遠く隔てた處で、調べやうもないものでございませうから」

「御尤もです……それでは、僕とにかくも至急に、南京へ行つて心當りを探してみませう。たしかに

南京でしたね」

「はア、たしかに南京へ、人を頼つていらしたのですが」

「嘩子も、英二の熱心な態度を見て、隠さずに答へた。」

「さうですか。そして、その石黒君が頼つていつた相手は、何といふ方です」

「何でも支那人で、黄邦思といふ人ださうですよ」

「支那人ですか……その人には問ひ合せて御覧になりましたか」

「私から、一度お手紙を差上げてみましたが、宛先には、左様な人物はゐないと申しまして、手紙はそのまゝかへつてまゐりましたの」

「可怪しいですね……それで、その支那人といふのは、石黒が最初から知つてゐた人ですか、それとも誰か紹介者でもあつたのでせうか」

「それが……」

嘩子も、口籠らずにゐられなかつた。

黄邦思を石黒に紹介したのは外ならぬ大木將軍だつた。しかし、それを英二に打明けることは、英二に將軍を訪問する機会を與へることである。嘩子は、瞬間、英二と新婚旅行中の康子が、熱海から寄越したあの侮辱の手紙の文句をまさしくと思ひ泛べたのである。將軍こそは、母と自分の父の、昔の關係を誰よりもよく知つてゐる人である以上、この上英二を將軍に近づけてまで、自分等母子の秘

密を裏付ける機会を與へたくなかつたからだ。

いや、そればかりでなく、石黒の行方について、大木將軍にも既に邦子から、問合せの手紙を出したのである。が、その時も將軍の返事は、

……既に一身を國事に捧げたる以上、消息の有無は問ふところに非ず。男子の本懐は、寧ろ地下の礎石となることにこそ有之可く、この事は御身の最も深く御體驗なされしことと存じ候

と言ふ、謎のやうな返事だつた。況して今頃、一面識もない英二などが訊ねて行つたとて、明答を得られる筈がなかつた。そこで嘩子は、

「私、よくは存じませんがやはりどなたかの御紹介ぢやございませんでせうか」

「さうですか……然し、とにかく至急、僕も渡支の準備を急ぎませう……そのうちに、何か、消息があらましたら、こゝへお知らせ願ひます……」

英二は、住所を刷り込んだ名刺を出して、嘩子に渡した。

「では、歸りませうか……やはり澁谷へ眞直にお歸りでせう。とんだお邪魔をして、お母さんも心配なすつていらつしやるでせう。濟みませんでした」

英二は、かう言つて、踵を返し赤坂見附の方へ歩き出した。

和平聲明の夜

その年も暮れて、大陸の山野も、漸く春の氣に芽ぐみそめた、三月十二日の夜だった。春めきそめたのは、山野の草木ばかりではなかつた。

前年來、既に抗戦亡國の愚に氣付いて、日支の和平、新東亞建設——この重大急務に目覺めて、決然蹶起した汪精衛一派はその後幾多の困難を排撃して、着々新政權樹立の準備を進め、この年一月下旬、青島會議の決議と相俟つて、いよ／＼新中央政權の陣容も整備を加へてきたが、今日——三月十日、孫總理逝去十五周年記念日を卜して、汪精衛は、和平建國の歴史的宣言を發したのであつた。平和の春が来る！

新支那が誕生する！

支那大陸の天地が、新しき希望と、歡喜に輝くその夜であつた。

南京中山路にある南京ホテル三階の一室へ、今しも慌しげな足どりで行つてきた二人の男があつた。一人は、五十前後の大柄な偉丈夫、人懐っこい柔和な童顔のうちに、どこか精悍の氣をたへた一

癖あり氣な中年紳士、今一人は三十前の、これもがっちりした男らしい青年だつた。

二人は、可成りな疲勞の様子だつたが、何か快い興興に頬をほてらせて、室の卓を圍んで座にいついた。

間もなくボーイの運んでくる支那茶を啜つて、ほつと吐息をつくと、

「お目出度う……」

中年の方が、につこりして、青年の手を握つた。

「これで、東亞の天地にも、漸く和平の曙光がさしはじめたのだ。日本と中國の新しい協力は、もう夢ではなくなつたのだよ」

「全く、御同慶の至りでございます」

「南京市中も希望に燃えて、まづ今夜も、あの通り、和平の歡びに充ち溢れてゐる。多少は氣づかされた抗日分子の陰謀も影をひそめて、乗ずる暇もない有様だ。勿論まだ／＼安心どころか、苦勞はこれからであるが、しかし時世は遂に向ふべき方向に、轍を向けてきたことは事實だ。これで僕達と君達の友情は、國と國との絶えざる交誼にまで進んでゆくのだよ」

「僕も、この一年、先生の指導の下に苦勞をした甲斐がありましたよ」

「いや、全く君にも、幾度生死の境をさまよはせたか知れなかつた。しかし君、東京の銀座あたりを歩いて、安いサラリーの範圍内で洋服の流行なんか氣にしたりしてゐる連中とは、生活の値打も感激

も違ふだらう」

「ほんたうです。僕も、おかげで日本の男子に生れた生甲斐を感じましたよ」

「しかし、よく、僕のやうな男——地位も名譽も資産もない異國人を信じて、尊い生命を預けてくれたよ……有難う、改めて禮を言ひます」

中年の男は、再び手をのべて、青年の手をしつかりと握つた。青年も、その感激に燃えた中年紳士の顔を見つめ、同じ感動に眼をうるませて、

「僕こそ、何と、先生にお禮を申し上げたらいか、言葉もないくらゐですよ」

「有難う……」

中年紳士は、繰返したが、

「ところで、石君……私は、今日の吉日を卜して、改めて君に話したいことがあるのです」

何か眞剣な眼眸で、膝をすゝめた。

「……」

青年は、改まつた相手の様子に、自分も緊張の表情で答へたが、中年の紳士は靜かに卓上の茶をすすつて、

「實は、今まで遠慮を願つてゐた、内地への通信を、今日からお許ししたいと思ふのです……」

「はア……」

青年は驚いた風で、相手を見たが、

「もはや、新政府の準備運動も、こゝまで基礎を固めてくれば、君の存在ぐらゐのことは、一部の人に限つてお知らせしてもいゝと思ふのです……長い間、交友知己とも絶つて、異國に孤獨の身を潜めてゐた君の寂寞は深くお察しします。しかし、これも國家の爲と思つて、悪しからず御有願ひたいです……」

「いゝえ……僕はもうあなたに出遇つて、あなたと生死を誓つた瞬間から、既に過去の石黒雄吉ではなく、新しい支那名前の日本人石雄仁に生れ代つたつもりです。従つて、過去も、舊知との關係も、一切昔の夢として心に絶つて暮してきたのです」

「しかし、もうその必要は、ある點まで無くなりました。相手によつては無事息災ぐらゐ、知らせて上げていゝでせう。しかし石雄仁といふ名で、このホテルに直接に返事を受けることは、まだ當分遠慮をねがひたいのです。日本陸軍中支情報總本部宇井大尉の氣付にして、石黒雄吉の本名で文通なさるなら、月に一本ぐらゐの返信が来るくらゐのことはいゝでせう。宇井大尉なら、我々のことをあの通りよく御存知ですから私からそのことを、よく頼んでおきました。尤も、君の仕事の内容、結社の顔觸れ、石雄仁の假名などは、まだまだ當分誰にも祕密ですが……」

「よくわかつてゐます」

「但し……」

中年紳士は言葉を切つて、

「甚だ失禮だが、その手紙も、こゝ暫くは、中味を見せてもらひたいのです。検閲めいて、いかにも君を疑ひ、君の自由を奪ふやうだが、これも目的遂行の手段として、已むを得ないことと思ひます。わけて君を信じる點では、黄邦思他の何人にも譲らないつもりでゐますが、しかし、これは現在の僕の立場上の責任ですから」

「よくわかつてゐます」

「ぢや、今日は疲れたらうから、ゆつくりお休みなさい」

「有難うございます」

青年は室を辭し去つて、すぐ續く隣室へ入つた。

言ふまでもなく、この二人は、黄邦思と、石黒だつた。

信書の自由が許されたのだ！ここ一年八ヶ月、絶對嚴禁の手紙が書ける――。

石黒は、何か夢のやうだつた。

しかし、今更、何處へ手紙を書かう。親も兄弟もない孤兒――。

さうだ、あの人達は、まだ無事であらうか……。

石黒の眼に先づ描かれたのは、あの日、わが子を送るやうに羽田の空港に首途を送つてくれた邦子と、その不幸な娘、暁子の姿だつた。

二

その翌晩、石黒は、疲勞を忘れて、邦子母子のために、約二年振りの手紙を書いた。突然のことで、さぞ吃驚なさるでせう。

皆様の厚意に送られて、南京に立つた石黒が、そのまゝ杳として消息を絶ち、今殆ど二年振りに、初めて書く祖國への音信は、懐かしきお二人様のお許です。思へば、上海から、航空便で機上の感想を書き送つたまゝ、お互にもう二度の正月を迎へました。實は、今もあの時の澁谷のお家にもらして、此の手紙がお手許へ届くか何うか、それさへも心許ない氣持です。

さて、その後御兩人様には、相變らずお變りもなく、昔のまゝの平和な、つゝまじやかな、水入らずの御生活をお続けでございませうか。それとも暁子様には、御良縁あつて、他にお縁付きでございませうか。

石黒は、こゝまで書き續けると、あの當時の英二との問題が、昨日のやうに思ひ描かれて、世に誣ひられた寂しい母と子の、恐らくその後も變りないであらう心もとなひ朝夕を、傷ましく思遣らずにゐられなかつた。

「いや、それよりも先づ二人は、今も丈夫に暮してゐるだらうか……」

石黒は妙に悲しい氣持がして、

いや、何よりも心にかゝつてゐるのは、お二人様の御健康でございます。もう長いことでございますから、これだけは、電報でも、一刻も早くお知らせ願ひたいのです。もつとも、あれだけの御厚意に反いて、今日まで一枚のハガキも出さなかつたが、そんなことを申すと滑稽でせうがそれにはまだ申上げられない事情の伏在することですから、これは暫く不問に附して、石黒の心を信じて頂きたいのであります。

次に申上げたいことは、暁子様のお父様楊大偉といふ方のことです。あれ以来も暇あることにその人の所在を探し廻つて居りますが、どうした譯か今もなほ素線がなく、何よりの御希望に副へないことを残念至極に存じてゐます。

次に小生も、今日まで殆ど病氣一つせず、達者に頑張つて暮してゐます。只今の仕事も、こゝ當分は申上げられないのですが石黒の健在と、性來の熱情とを思ひ合せてくだされば、おぼろげながらも御想像のつくことゝ自ら慰め得るのであります。

では、今日の音信はこれだけで失禮します。至急御近況お知らせ願ひます。先は、健在のお知らせまで。頓首。

石黒は、これだけ書き終ると、もう一度讀返してみた。そして、

「これは飛行便で送らう」
一刻も早く、邦子等に讀ませて、無事の返事を見たかつた。

その翌日だつた。

「大人……」

石黒は、先づ黄邦思の室をノックした。

「お入り……」

「早速ですが、この手紙を出したいと思ひますが……」

「どうれ……」

黄邦思は、邦子、暁子宛の石黒の手紙を見ると、貪るやうに、中味に眼を走らせたが、讀み終つて、

「石君……」

熱く潤んだ瞳を上げて、じつと石黒の顔を凝視した。

石黒は、餘りにも急激に改まつた黄の眞剣な表情に、或はこの手紙が、まだ、何處かいけないのであらうか——と、不審の瞳を睜つたが黄は靜かに、言葉をつづけた。

「この手紙に、もう一つ、付添へてもらひたいことがあります……」

「何ういふことでございませう」

石黒はますく怪訝に訊ねた。

「他でもありませんが、この手紙中にある楊大偉といふ人物です。今こそ言ひますが、事情あつて、私だけはその男を、よく知つてゐるのですよ」

「あなたが、楊大偉さんを……」

石黒は思はず黄を見つめたが、黄は續けて、

「しかも、現在の住所まで、はつきり承知してゐるのです」

「……」

「そこで、この日本の妻と子を楊大偉に會はせてやりたいと思ふのですよ」

「大人！ ほんたうですか、大人」

石黒の聲は激しく弾んだ。

「どうぞ安心してその人達を早速こちらへ呼んであげてください。あの人達の長い夜も、今こそ漸く明けようとしてゐるのです……」

黄は、かういつて、暫くうるんだ眼を夢みるやうに窓外の空に放つたが、

「御承知の通り、今日まで、お互ひ身を賭して準備に盡してきた新中央政權も、やがてこの月内には成立を見るだらうと思つてゐます。その時、今まで地下に潜んでゐた楊大偉も、また忽然としてこの世に大きな姿を現はす筈です。その時、二十幾年目の夫婦、親子の對面は、この偉大な興亞の大典を背景として、涙に充ちたその人達の人生にも、どんなに光輝ある幸福を寄與することです。楊大偉は、國事に疲れて、深夜ベットに身を横たへて、もうこの頃は其の歡びで、夜の眠りさへ忘れさうです……」

かう言つて語る黄の眼は、希望のうるみに輝き、その頬は感激の血に燃えた。

しかし、どうして石黒が、この眼前の黄邦思こそ、楊大偉その人であることに氣付くことができやう……

「黄大人……では、楊さんは、そんなに身近く、あなたの周囲にゐられるのですか」

「さうです、しかし私以外の人では容易に探し出すことはできないでせう」

「すると、その人も、私共の結社人として、同じ組織の中にもゐられるのですか」

石黒は眼を瞠つて、捜るやうに黄を見守つたが、

「それも、やがて分ることですが、私は、時折楊に會つて、悲壯な彼の述懐に、共に涙することがあるのです……石君！ 幸ひ君は彼の妻子を、祖國に持つ知己の中でも、最も親しい人として知つてゐます。どうぞ楊のために傳へてください。楊もまた人であり、父であり、良人であることを。しかし彼には、二十幾年間、その妻も忘れ、子も忘れて盡くさねばならぬ、不幸な祖國のあつたことを。しかし、今や、幸ひその祖國も、長い惱みの歴史から甦つて、新しい秩序と、希望と、建設の前に世紀の黎明を迎へんとしてゐます……最早彼が今後の奉公に、地を潜る要はなくなるでせう。妻を擁し、子を抱いて、許さるべき立場に浮ぶでせう……石君、その手紙の中に、それを大きく付け加へてください。私は楊になり代つて責任をもつてお願ひします……」

黄は強く言ひ放つて、何か重大事を遂げた人のやうに、ほつと深い溜息を吐いたが、

「お、さうでした。もう一つ重大なことを忘れてゐた……」
かう言つて石黒を見た。

「それは他でもありません……今も打明けて言つたやうに、楊と相知る私は、實は今日までも折に觸れては、その母と子の生活について、幾度かあなたにそれとなくお訊きしてゐます。親戚、故舊に捨てられた母、愛人に背かれた娘——そして、その悲劇の原因が、悉く血を異にする、父のため、良人のためであると、あなたは、さう申されました。しかし私は、それを信じないのです。中國民を輕視する思想は、最早お國にはない筈です。恐らく、周囲の人々は、血の異りを蔑むのではなく、愛兒を生み捨て、二十年も、妻子を顧みず行方を晦ました、無情の父を侮り、冷血の良人を蔑むのではなく、いせうか。さうした男の血を引く娘、さうした良人に欺かれた妻の愚、これを責め、これを避けるのは、人情の當然と思ひます。楊大偉も、恐らくそれを知つて、母子の周囲を恨みはしないでせう。たゞ何故に楊がそれほど、無情の父となり、冷血の良人となつたか、それは、今も申した通り、祖國中國の救済と、東亞の光を求める大義のためであることを、あなたもまた楊のために諒として、母子に故國の人を恨まず、またその父の無情を恨まないやう、十分教へていたゞきたいのです……」

「よくわかつてゐます……」

石黒の聲もいつか濕つて、
「わけて只今の解釋は、日本人石黒雄吉として、何とお禮を申していかかりませんか……」

「いや、これは私の意見ぢやない、楊大偉が語る述懐です」

「黄大人……」

石黒は、黄邦思の數々の言葉に、たゞその日を此世の希望として、長年社會の陰にかくれ、孤獨と、寂寥と、險しい生計の道に喘いできた邦子等母娘の喜びを思ふと、自分もじつとしてゐられない、激しい感動にそゝられ、

「有難うございます。……この突然の幸福の便りをあの人達はどんな驚きと、どんなに大きな喜びをもつて迎へるでせう。恐らくこの餘りにも唐突な、餘りにも大きな幸福の不意討に、二人はもう前後も忘れて、そのまゝ泣いてしまふでせう。それを想像する私でさへ、この通り胸が躍つて止みません……大人、早速その事を詳しく書き送ります……あ、どうぞ、あの人達が、今も達者で、以前の家にゐてくれ、ばい、が……いや、大丈夫です、わからなければ、私の叔父に訊けば、何とか消息は知れるでせう。とにかく以前の住所へ宛て、この喜びの便りを書きませう」

「どうぞ、さうして上げて下さい……」

「ついでには大人……どうぞ、その楊大人を、今日でも私に紹介願へませんか……」

「今日？……」

「さうです、この二十年、その母が、どんなに淨く、美しく、峻しい道を迷ひもせず、健氣に闘ひ抜いてきたか、その娘はどんなに美しく、聰明に育つて父を憶れてゐるか、私は、その清い尊い母子

の長い半生を、一刻も早く、楊大人に、お報せせずにはいられなくなりました。大人、最早私には秘密はない筈です。どうぞ、どうぞ、楊大人を、私に御紹介願ひます……」

涙さへふくめた石黒の、火のやうな激しい嘆願に、黄邦思は、眼をつむつて、思はず熱い息を洩らしたのである。

恩

讐

「たゞ今……」

青山五丁目の患者の家を出て、看護婦會へ歸り、謝禮清算を済ませた暁子は、四五日歸らない大山の宅へ、大急ぎ歸つてきた。

「あら、お歸り……」

ちようど日曜日で、母の邦子は、家に居り、ひとりで寂しいお晝の食事を済ましたところだった。暁子は茶の間へ飛込むなり、

「患者さんのお宅で、お心付けをいたゞきましたから、明治喫茶でお母様のお好きなシュークリームを買つてまゐりましたわよ」

「それは済みません……ちや、お茶でも、淹れませうかね。でも、お晝は、まだでせう」

「え、久し振りにお母様と、一緒に頂かうと思つて歸りましたの。でも、少し遅かつたから、もうお済みでせう」

「まあ、いけなかつたわね。いま済ましたとこよ。ちやすぐ御飯にしてあげますわ」

暁子は去年の暮に、看護婦の資格を得て、邦子の知り合である、附近の看護婦會に入つてゐた。

「患者さんは、すつかり快くおなりになつて？」

「え、八つばかりのお子様のお風邪ですのよ。でも、去年お母さまがお亡くなりになつて、お父さんだけなもんですから、御心配なすつて、附添をお呼びになつたんですの。今朝はもうケロリとしていらつしやいますけれど、二日間はその夜分になりますと、八度から下らないんでせう、随分心配しましたけれど、お子様は快くなると、まるで嘘みたいですよ」

「それは御苦勞様だつたわね」

邦子は勞るやうに言つたが、

「同じ片親でも、お母さんが亡くなつて、お父さんだけの方は、見てゐてもお氣の毒ね。そこへ行くと私なんか、お母さんがゐてくださったので、幸福だつたと思ひますわ」

暁子がしみく感謝するやうに言つた時だ。

ガラリと格子戸が開いて、

「江島さん、看護婦會から、すぐいらつしやるやうにお電話ですよ」
角のお米屋の小婢が知らせて来た。

「あら、毎度済みません……」

「まあ、ゆつくりするひまもないのね」

邦子は、暁子の多忙を憐ふやうに言つたが、

「結構ですわ。私お仕事の忙しいのは、ちつとも苦勞だとは思ひません。お母さんのお若い時のことを思つたら、私なんか呑氣過ぎるくらゐですわ」

「まだ、夜分は寒いから無理しないでね」

「え、それは、十分注意してゐますわ」

暁子は、後の御飯を掻き込むやうにして、早々仕度を整へ、再び、出てきたばかりの會へ急いだ。會は、澁谷の驛から青山の方へ上る坂道の途中だつた。

「済みません、折返しました迎へで……」

四十過ぎの會、長さんは、暁子を迎へると、

「原宿の松永病院ですの。すぐ行つて上げていたゞきたいの」

「承知いたしました……」

暁子は、漸く新芽の光りはじめた参宮通りをバスで急いで、松永病院へ入つていつた。

「患者さんは肺炎で、少し骨が折れるけど」

かう言つて、顔馴染の婦長さんが案内したのは、三階の特等室だつたが、暁子は病室の入口まで行つて、そこに懸けられた患者の名前を見ると、

「あ……」

思はず、驚きの聲を呑んだ。

「室井康子様」

暁子が、どうして此名を忘れやう、同じ血を引く従姉妹に生れながら英二の愛情を奪つた上に、終生忘れ得ぬあの惨酷な勝利の宣言書まで寄越して、敗れた自分を最後まで蹂躪しようとした、憎らしい宿命の敵手！

暁子は、飽くまで皮肉な運命の前に、慄然として立ちつくした。

「あら、何うかなさいまして……」

婦長は、怪訝に暁子を顧みた。

「いゝえ、どうもいたしませんけれど……」

暁子は、すぐ何気なく答へた。この聖なる白衣の前に、何の恩讐や愛憎があらう。この身は、全ての病める人達に捧げて、博愛の神に任せられた體軀ではないか——暁子は決心したのであつた。

「御存知の方でもありませんの？」

婦長が訊ねた。

「はア、以前二三度お目にかゝりましたけれど、でも、先方様さへお構ひでございませんでしたら……」

「でも、何か事情がありさうね」

「あら……」

暁子は、當時の自分を思ひ泛べて、ちよつと頬を火照らせたが、

「ぢや、とにかく、入つていらつしやいませ。その上でまた……」

「どうぞ……」

ドアを開けて婦長は入つていつた。暁子も、さすがに波うつ胸をおさへて、後から従つた。

「よく休んでいらつしやいますわよ」

婦長は、入口で、につこり暁子を顧みて、

「お一人きり、よく眠つていらつしやいますのよ。いゝでせう」

「結構ですわ……」

「さつきまで、お母様がいらしたんですけど、お出かけになつたのかも知れませんが、ちや、とにかく、こゝにゐてくださいね」

「えゝ……どうぞ……」

暁子は、妙に立騒ぐ感情を抑へながら、控室を通り抜けて病室のベットに近づいた。そして、何か恐ろしいものでも覗くやうに、そつと患者の寝顔を覗いてみた。

あれから、二年、歳月の流れは、この娘の上にもさすがに見えぬ影を刻み、病苦の寒れと相俟つて、當時の誇らかな面影は見えなかつたが、やはり紛ひもない、あの康子であつた。

「それでは、お願ひいたしますよ」

婦長は、言残して、出ていつた。暁子は、すこし離れて椅子を寄せ、じつと康子を凝視した。

胸を裂くやうな悲しい思出のかすく、口惜しい恨みのかすく——譬へやうのない感情の嵐が、

白衣に包んだ暁子の胸に、暫くは吼え、狂ひ、猛り立つた。

眞晝とは言へ、夜半のやうに、物音もなく静まつた病院内の三階に、病める娘と、看取る娘と、しかも血を引く従姉妹同志が、仇敵のやうな過去を包んで、二人きり一室に向ひ合つてゐた。

原宿の閑静地帯——小春日の影に、周囲の木立が光つて、街の騒音も、殆どそこへは聞えて來なかつた。

その時である。

「あッ……」

今まで、熱っぽい呼吸に喘ぎながら、ぐつたり眠つた康子が、はつと重たげな臉を開いた。

「あら、お目醒めでございますか？」

漸く心の平静を取戻してゐた暁子は、瞬間、平常の職業意識に返つて、殆ど習慣的に、につこり顔を出した。

「……」

康子は、まだ半意識の眼を睜つて、今まで見なかつた相手の白衣と、その顔を、ぼかんと見守つてゐたが、やつと暁子を意識したのか、

「あッ……」

激しい驚愕の聲を立てた。暁子も、はつとして顔を引いたが、すぐ、

「いかゞでございますか。お苦しいございますか」

あらゆる感情を押し殺して、につこりするやうに覗き込んだ。しかし、康子は、何にも答へなかつた。たゞ彫像のやうに眼を睜つた蒼白い寒れた康子の顔面が、瞬間の驚愕の色から、見る／＼激しい苦惱の色に亂れてきたと同時に――

「御免なさい……」

何と思つたか、くると向ふ向きになつて、背を見せたきり、蒲團の襟へ顔を埋めてしまつた。

「……？」

暁子は、それが何ういふ意味か、読みとりかねてその場に立ちつくしたまゝ、暫くは康子の動作をぼんやり見守つてゐた。

その時だつた。

「どうなの……」

誰か女の聲がして、入口のドアが開いた。暁子が、思はず振り返ると、

「おや、看護婦さんですか……」

かう言つて、近づいてきたのは、康子の母の室井俊子夫人だつた。暁子は、一と目で、それと判つたが、

「至りませぬ者でございますが……」

静かに挨拶した。同時に怪訝に睜られた俊子の眼が、既に焼きつくやうに、暁子の顔に注がれてゐた。

今まで二人が顔を見合はせたのは、石黒と英二が偶然同じ旅客機で、羽田を出發したその時だけだつた。しかし、不思議な宿命に睨み合ふ、この二人の伯母と姪は、餘りにも強く相手の印象を相刻する感情の中に焼きつけてゐた。

「あなたのお名前は？」

俊子は、険しい眼を据えて、詰問するやうに尋ねた。

「江島暁子と申します。原宿看護婦會からまわりました」

暁子は力めて心を落着け、姓名の上に看護婦會の名まで加へて、はつきり個人と職業を區別するや